

---

# 夢幻の世界ファントム

秋月あきら (ししゃもにゃん)

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢幻の世界フロントム

### 【Nコード】

N0254E

### 【作者名】

秋月あきら（ししゃもにゃん）

### 【あらすじ】

そのデジャブは夢か幻か、二つの世界で事故を目撃したレイの前に現れる謎の少女メア。メアの姉ナイを助けに、レイはサイバーワールドへと導かれる。そこはゴーストやハッカーなどが存在する世界。ネットが生んだ思念の世界だった。ナイを攫ったのは黒い狼団と呼ばれる破壊集団。戦いの中で、レイの前に現れる凄腕の美形剣士ナギ。その正体は？そして、目覚めるフロントムたち。たぶん縦書きのほうを読みやすいです。

## サイバーファントム「Link1ファントム・ローズ」

世界は生まれては消えていく。

私の頭上には虚無の空が無限に広がり、足元に大地はない。

個々の世界を繋ぐワールドネットワークのハザマに私たちはいる。

互いに白い仮面を被り、私たちは顔を持たない。

「このままでは世界の中心 真世界 が……いや、世界のシステムそのもの崩壊するだろうね」

ファントム・メアは静かにそう言った。これに対して私は闇に声を響かせる。

「個は全体であり、全体は個だ。この責任は全てのモノたちが取らねばならない」

「ボクの望みは全てのモノが夢幻の中で夢うつつに暮らすことだよ」「幸せは人それぞれだ。しかし、私は偽物を決して幸せだとは認めない」

「けど、何が真実なのだろうね。こんな例え話があるよ。悪魔なんていないと言った人に対して、ある人はこう言ったそうだが、『君は自分自身の存在を証明することができるか』と。それを言われた本人にしてみれば、理解しがたいことだよ、自分はここにいるのだから。自分自身がここにいると思っっている、でもそれだけでは自分自身の証明ではないんだ」

この例え話を聞いて、私は宙を仰ぎながら思考を巡らせた。

「かつて中世時代に魔女狩りが行われた。魔女として告発された者は己が魔女でないことを証明しなくてはいけない。これは一見簡単ないように思えて、実は不可能に近い。いくら泣き叫んで無罪を訴えても無駄だ、それは証明にはならない」

「証明なんてできないのさ。自分自身の証明は自分自身だけではできない、そこには他の『想い』が必要なんだよ」

「そうだ、それがこの世界の成り立ち。そして、私たちは世界から『弾かれたモノ』。自分自身だけでは己の証明ができなくなってしまうモノだ」

「だから、ファントムなのさ。世界は全ての者に平等に与えられている。個人の持つ世界が己を証明してくれる。しかし、自己の世界から弾かれてしまったては、他に自己を証明してもらわなければ、消えてしまう。自分自身がここにいると感ずるだけでは、想いが弱すぎる」

ワールドネットワークから遮断され、世界剥離してしまった私たち。多くの人々の記憶は改ざんされ、私たちは存在しないことになっている。

だから私たちは……。

「すでに私たちは顔を持たない」

「見る人によつてボクらの顔は違つて見えるのさ」

「私には君の顔が」

私は少し間を空けて言葉を続けた。

「春日リヨウに見える」

そして、ファントム・メアも言葉を続けた。

「ファントム・ローズ。ボクにはキミが鳴海マナに見える」

互いの仮面は、ただ白く無機質のまま。他人から見ればそう見える。

しかし、私は春日リヨウを知っている。

ファントム・メアになる前の彼を私は知っているのだ。

「私は君に春日リヨウに戻つて欲しい」

「ボクを滅ぼせないという理由だけで、君は見す見す死ぬ気なのかい？ 君にはやらなくてはいけないことがあるはずだよ」

彼は私を滅ぼそうとしている。私がいる限り、彼の悲願は叶わない。

しかし、私が死ねば彼は確実に多くの世界を滅ぼすだろう。

やはり……ここで決着を着けなくてはならないのか。

先に攻撃を仕掛けたのはファントム・メアだ。  
そして私も薔薇の鞭を振るうのだった。  
戦いの行方は私にはわからない。

## サイバーファントム「Link2レイ」

僕は目をパツと開けて天井をガン見した。

こんな寢覚めの良い朝は何年ぶりだったかな？

もしかしたら人生史上最高の寢覚めかもしれない……かなりウソをついた。

ここで『ご主人様、朝食を運んでまいりました』とか言つて、メイドさんが部屋に入って来たら90点なんだけどなあ。平凡な寢覚めなんてなんの幸せでもない。ぶつちゃけ、寝てるほうが人生幸せだと思う。

そして、枕元にあつた置き時計を見て、最低の寢覚めに急落下した。

これは認めてはいけない現実だ。まさか学校に遅刻しそうなんて、ギャグ漫画の王道でもあるまいし、そんな朝はイヤだ。

そうだ、ここは現実的な解釈で乗り切ろう。この時計は二十分ほど進んでいるんだ。僕が寝ている間に、小人さんが時計の針を進めたら違いない。

お茶目なイタズラだなあ、あはは。ってぜんぜん現実的じゃないし！

バカなこと考えてないで早く着替えよう。

僕はパジャマの上から制服を着るといふ裏技を使い、ネクタイを締めながら等身大の鏡に自分の姿を映した。

さすがにそろそろ髪の毛を切ろうと思う。

僕の両眼は全部前髪で隠れ、口の辺りまで髪の毛の先が伸びている。

猫背だし、幸薄そうだし、見るからにネクラっぽい。

でも僕はネクラなんかじゃない。

たしかに学校でひと言もしゃべらずに家に帰ってくることもあるけど、それでも僕はネクラなんかじゃない！

ちょっと面と向かってしゃべるのが苦手なシャイボーイなだけで、

ネットの世界では明るい自分が出せている。

だから僕はネクラなんかじゃないんだ。

ネットの世界でコミュニケーションが取れてるんだから、まったく問題ないと思う。

こんなこと考えてないで早く高校にいかなきゃ。

僕は家をダッシュで飛び出した。

学校までの距離は近い。徒歩で十分通える距離にある。

僕は前髪が乱れないように走り、一〇メートルもしないうちに息が切れた。

疲れてしまった僕の歩く速度は普段の50パーセントOFF。これじゃ走った意味がない。最初から走らなきゃよかった、損した。

……んっ？

前方五メートル先に黒いナマモノ発見！

うはっ、黒猫に目の前を横切られた。縁起が悪い。

僕は見て見ぬフリをして曲がり角を曲がろうとした瞬間だった。

衝突音が聴こえて間もなく、

「キヤーツ！！」

女の子の甲高い叫び声が聴こえた。

放物線を描いて巨大な何かが、僕の足元へ鈍い音を立てて落ちた。ナース服を着た美少女が、頭から血を流してアスファルトに横たわっていた。

フロントガラスが割れた車が目に入った。

身動き一つしないナース服の美少女。

頭から流れた血が僕の靴を浸す。

……ありえない！

僕の人生は順風満帆じゃないことは認めるけど、目の前でこんな悲劇に遭うなんて認めない。

そもそもナースがなんで町中にいるんだ？

しかも美少女。

そっだ、これは夢だ。

夢以外にこんな展開あるわけないじゃないか！

「僕は認めないぞ！」

僕は腹の底から叫んだ。

そして目が覚めた。

頭を乗せていた腕が痺れている。

どうやらパソコンの前で寝落ちしてたらしい。毎日こんな感じだ。学校から帰って来てまずやることは、パソコンの電源を入れること。それからずっとパソコンの前で過す。休みの日なんかは、ずっと家に引きこもってパソコンをやっている。

学校に行かなくなったら、絶対ヒツキーになると思う。ついでに今流行のニートにもなりそうだ。

そんな未来予想図を展開しながらも、僕はパソコンなしじゃ生きていけない。

今ここでこうしている僕は本当の僕じゃない。ネット世界のほうが生き生きしてて、あれが本来の僕だと思う。だからパソコンがなくなってしまうたら、本当の僕も消えてしまうんだ。

昨日も遅くまでパソコンをやっていた……せいで遅刻しそうだし！僕はパソコンの時計を見て焦った。

すぐにパジャマの上から制服を着替え、僕は家を飛び出した。

家を飛び出した時点で息が切れ、ゼーハーしながら歩いていると、黒いナマモノ発見！

うはっ、黒猫に目の前を横切られた……デジャブ？

悪い予感がした瞬間だった。

衝突音とガラスの割れる音、そして

「ぐぎゃ！」

カエルを握りつぶしたような短い叫び声が聴こえた。

僕の足元に落ちてきた中肉中背の男。

僕は血の気が引いて顔面蒼白になった。

首を一八〇度回転させた男は嘔吐をして、頭からは血を流してい

た。ひと目で死んでいるとわかった。

男を撥ねた車がバツクして逃げて行く。

「僕も怖くなって逃げた。」

「……ありえない！」

まさか正夢になるなんて、信じてたまるか。これはきつと夢の続きなんだ。

僕は自宅に逃げ込み、自分の部屋に入るとドアのカギを閉めて、ベッドの上に乗って布団を被った。

冷や汗をかいて異常に寒い。

急に部屋がノックされた。僕はビビって心臓が止まるかと思った。

「どうしたの？」

ドアの向こうから母親の声が聴こえた。

「体調悪いから学校休む」

そう言つと、母親の足音が遠ざかっていった。

それなりに心配されているみたいだけど、一線を越えてまで僕に関わりとうとしない母親。

「……母親の対応がリアルだ。」

これって夢なのだろうか？

なにひとつリアルと違うところがない。非日常な現象は男が僕の前で死んだことくらいだ。

やっぱり夢だ。ここで認めてしまったら負けになる。何に負けなのかわからないけど、とにかく負けになる。

全身に鳥肌が立った。何か音がした。耳を澄ますと、その声がよく聞こえた。

猫の鳴き声。

寒い、背筋が寒い。寒くて猫背になる。

潜った布団の隙間から、僕はベランダの方を見た。

猫だ、黒猫が窓の外にいる。

ホラーか？

ホラーなのか？

いや、ホラーの展開にするもんか、絶対コメディに持っていつてやる。

あれは黒猫と見せかけて宇宙刑事<sup>デカ</sup>なんだ。どこかの星から凶悪な怪人を追って、地球の平凡な住宅街に来たんだ。

「ここを開けてくださらない？」

……幻聴？

なんか少女の音が聴こえた。部屋に少女の霊でもいるのか、今までパソコンをやっていてそんな気配感じたことないぞ。

「開けて頂戴」

少女の声と窓を叩く音。

黒猫が前脚で窓を叩いていた。

……やっぱり宇宙刑事だ！

違う、これは夢だ。

確信した。猫が人語をしゃべる「夢だ。

よかった、安心した。車に轢かれた男も特殊メイクか何かで、血はケチャップだったに違いない。この際、豆板醬でもいいや。

僕は呼吸を整えながら、布団を被ったままベランダの前に立ち、窓をゆっくりと開けた。

黒猫は小さくお辞儀をすると、しなやかに僕の部屋に入って来た。家宅搜索の令状は？

僕は布団を被ったまま黒猫と向き合った。

「どこのどなたですか？」

猫に向かつて尋ねるような質問じゃないけど、相手は宇宙刑事だ。「わたしの名前はメアよ。貴方にお頼みしたいことがあって参りましたの」

宇宙刑事のスカウトか？

でも、そういうことに巻き込まれるのはごめんだ。

「断ります。僕は何もしたくない。危険なことに巻き込まれるのは嫌です」

例え夢だとしても、嫌なものは嫌だ。

黒猫が僕に一歩近づいた。

「人が車に轢かれて死ぬのを二度、貴方は目撃されましたわね？」  
この言葉にちよつとビビったけど、二度とも夢の中なんだから、何か繋がりがあっても可笑しくない。そして、僕の目の前を二度も横切ったのは、この黒猫に間違いない。

「見たけど何か？」

「一度目は向こうの世界。二度目はこちらの世界。向こうでの出来事が影響して、彼は死にましたのよ」

「何を言っているのかよくわからない。もっと詳しく説明してくださいませんか？」

「ナースが死んだのはサイバワールド、オタクの男が死んだのがこの世界なのよ。つまり二人は同一自分だったということなの」

「うっそだー。美少女ナースと中肉中背男が同一人物なんて想像もしたくない。テーマパークのマスコットのの中に、どんな人が入っているのか想像しちやいけないのと同じだ。」

「だって同じ人間が二度も死ぬわけじゃないじゃないか」

「彼はナースマニアだったの。それがサイバワールドで投影され、彼はナースの姿をしていた。本来なら向こう側で死んでも、こちらに影響することはなかったのだけれど、世界のバランスが崩れはじめているせいで、向こうの想いがこちらの現実となったのよ」

「はあ？」

さすが夢だ。荒唐無稽で理解しがたい。

こつちとか、向こうとか、サイバワールドとか、ナースマニアとか、よくわからない。

どこから質問するべきか、やっぱりナース……いや、サイバワールドかな？

「そのサイバワールドって言うのを、まず僕は知らないんだけど？」

「俗に多くの人間が現実と呼ぶ世界の名がホームワールド。世界は今このときも生まれ、そして消えて逝くのよ」

「で？」

「中には強く想われて生き残る世界もあるわ。夢から生まれたドリムワールドは数ある世界の中でも、揺ぎない強固な存在で歴史も古く、いくつもの階層に分かれている。他にも確立された世界は鏡の世界、ミラーワールドなどがあるわ。そして、ごく最近、急速に存在を確立しつつあるのがサイバーワールドよ」

理解できそうできない。わからない単語が二つも増えた。僕に理解力がないんじゃないかと、このメアとかいう猫が説明ベタなんだ、絶対。

このまま説明を聞いても、時間がかかりそうだから、別のことを聞こう。

「それで僕にどんな頼みがあるの？」

「サイバーワールドで捕れられてしまった姉を助けて欲しいのよ」  
宇宙刑事の任務に違いない。

「でもなんで僕に頼むの？」

「貴方がこちらとサイバーワールドを行き来できる選ばれた存在だからよ」

選ばれた存在って響きがいい感じだ。まるで伝説の勇者の響き。でもやっぱりメンドウなことに巻き込まれるのはごめんだ。

「危険そうだし、僕が君のお姉さんを助けてあげる義理もないし、お断りします」

「駄目よ、これは定めなの。貴方はわたしと一緒に来なければならぬ」

「ヤダ、絶対ヤダ」

「さあ行きましょう、サイバーワールドへ」

黒猫が僕の身体に触れた瞬間、貧血のように意識が遠退いた。

目を開けると……もう僕の部屋じゃなかった。

どこか荒んだ雰囲気を受けるビル街。

僕の目の前には少女がひとり立っていた。

「…………誰？」

「メアよ。向こうの世界ではわたしの力が弱められ、黒猫の姿を取らざるを得なかったの」

つまり黒猫「少女」。

ネコミミ少女かつ！

残念ながら、目の前の少女にネコミミはなかった。

メアは僕のことを見ながら、流し目でクスクス笑っている。

「アタシの何が可笑しいの？」

僕は自分の胸に手を当てて、メアに尋ねた瞬間、物凄い違和感に襲われた。

「…………マジでっ！？」

思わず僕は自分の胸をモミモミしてしまった。

「胸だ…………胸がある…………なんでアタシ、スカート穿いてるの！？」

女の子の胸が僕の身体についている。それだけじゃない、どうやらメイド服を着用しているようだし、声も女の子だ！

メアは悪戯に笑いながら僕を見つめた。

「貴方ネカマだったのね」

「えっ？」

「サイバーワールドの法則はドリームランドに近いのよ。なりたいたいモノになれる世界。貴方が普段ネットで演じているキャラが投影されたようね」

そうだ、そう言えば、中肉中背の男が美少女ナースと同一人物だったって…………。

こういうことだったのか！

僕はネットで女の子のフリをしている。つまりネカマってやつだ。今ここにいる僕は、ネットで演じている女の子そのものなんだ。

「てゆか、スカートってこんなに股がスースーするものだったのね」「嫌なら別の姿になればいいわ。ただし、想いが強くなければ別の姿にはなれないわ。ほら、あそこを見て頂戴」

メアの指さした方向を見ると、人影のようなモノが行き来してい

た。まるで幽霊みたいだ。いつから僕は霊能力が開眼したのだろうか？

「それにしても幽霊たくさんいすぎ」

「あれは幽霊ではないわ。似たようなものだから『ゴースト』とこの世界では呼ばれているの」

「ゴーストってデスクトップアクセサリじゃないの？」

「それはこの世界では『プログラム』や『擬人化』の種族に分類されるわね。今そこにいるゴーストは、顔がなく、存在があやふやで確立した存在ではない種族。ホームワールドのネット社会に対応させると、捨てハンや名無しなどがなりやすい種族かしらね」

『ゴースト』の中にもいろいろいるらしく、影が濃いものから薄いもの、口にジッパーがついているモノまでいた。

「なんでアイツ口にチャックが付いているの？」

「あれは『傍観者』。ネットを見ているだけの種族ね」

「だんだんこの世界のことかわかってきたかもー」

「この世界の法則は創想そつそうと創言そつげんによって成り立っているの。なりたいたいモノになれる世界。ただし、それには周りがある程度信じ込ませることが大切なのよ。貴方が周りに自分が女だと信じ込ませているように」

つまりキャラ設定が甘いと化けの皮が剥がれるってことかな？

その点に関して僕は完璧だ。

ツインテールで脚が長い、出かけるときはいつも厚底ブーツの、メイド喫茶でバイトしている十六歳の女子高生だ。

他にもいろいろ設定があるぞ、一日一パック納豆を食べるとか…

…。

そうそう、名前は。

「そう言えばアタシ名前言ってなかったよね？ レイって言うのよろしくね」

もちろん本名じゃなくてハンネだけど、こっちのほうがリアルネームより愛着がある。

営業スマイルで僕が握手を求めると、見事にスルーされた。シヨツクだ！

メアは僕のことを放置でさっさと歩きはじめている。勝手に僕をこの世界に連れて来て、もう少し僕に気を使うとかなんとかすればいいと思う。

そう言えば、姉を助けるのを手伝って欲しいとかなんとか……？

「ねえ、お姉さんを助けに行くんでしょ？」

「そうよ、姉を攫った奴等はわかっているわ」

「どこのどいつ？ アタシがコテンパンにやっつけてやるわ！」

いつもの僕だったら、そんなメンドクサイことしたくないけど、このキャラを演じてると積極的になれる。

「姉を攫ったのはハツカーやクラッカーの集団 黒い狼団よ」

「なんで攫われたの？」

「それは追々話していくわ」

「アタシに協力しろって言って、そんなことも教えてくれないわけ？」

前を向いて歩いていたメアが、急に鋭い眼つきで僕を見た。違う、僕の後ろを見ている。

僕もすぐに振り返った。

目に飛び込んで来たのは、黒いロングコートを靡かせ走ってくる美青年だ。しかも、両手に刀を持っている。立派な銃刀法違反だ。

美青年っていうのは僕の主観だけど、他の人が見てもきつと美青年だと思う。

なぜならば！

逃げる美青年を男が追っているからだ。やっぱり美青年っていうのは、一部の同姓にも好かれるんだなあ。

メアが身構えた。

「黒い狼団の戦闘員よ」

「あれが？」

美青年を追っていたのは全身黒タイツの男たちだった。ただの変

態かと思った。

逃げられないと思ったのか、美青年は急に立ち止まって振り返った。

美青年の背中に傷があるのを僕は見た。鉤爪で引っ掻いたような服に三本の線が走っていた。でも、どうやら血は出てないみたいだ。刀を構える美青年の傍らにメアが駆け寄った。

「わたしも加勢するわ」

「手助けは無用だ」

冷たい声で美青年は切り捨て、二刀流で戦闘員に突っ込んで行った。

一方メアは手助け無用と釘を打たれたので、冷笑を浮かべながら美青年の戦いを見守っている。

で、僕はというと、戦闘員がすぐそこまで迫っていた。

「なんでアタシまで戦いに巻き込まれなきゃいけないのよ！」

きっとメアが加勢するなんか言ったせいだ。僕まで美青年の仲間に使われたに違いない。最悪だ。

でも大丈夫、ネットの世界では誰にも負ける気がしない！

僕は厚底ブーツを振り上げて回し蹴りを放った。

「きゃっ」

僕の声から可愛らしい声が漏れた。恥ずかしい。

しかも見事に蹴りは外れて、反動で僕は尻餅をついていた。かなり恥ずかしい。

たとえ姿かたちが変わっても、実践の蹴りのイメージがない僕には、回し蹴りなんてことはできないんだ……たぶん。

卑劣な戦闘員は僕が転んだ隙に、飛び掛って来ようとしている。仮にも僕は美少女だぞ、襲うなんて痴漢のすることだ。

「この全身タイツの変態！」

この言葉は心で思ったことだったんだけど、気付いたら思わず口から吐いていた。

襲いくる戦闘員に僕は尻餅をついたまま足を振り上げた。

「これでも喰らえ！」

「ぎゃっ！」

厚底ブーツは見事股間を抉り、戦闘員は股間を押さえながら、アスファルトの上でのた打ち回った。

僕にすぐに立ち上がってメアに助けを求めろ。

「突っ立てないで手を貸してよ」

「だってわたしのところには誰も来ていないもの」

全部で四人いた戦闘員のうち一人は僕のところへ、残りの三人は謎の美青年がまとめて相手をしていた。

だからって、突っ立てないで僕のことを助けてくれてもいいと思う。

股間を押さえていた戦闘員が持ち直して立ち上がった。

「キーツ！」

なんか怒ったような奇声を上げたぞ。

さつきはまぐれで蹴りが当たったけど、今度はどうにもいかない気がする。

ここは逃げるしかないと思った僕は、ダッシュでメアの後ろに回って彼女を盾にした。僕より幼い少女を盾にするなんて、汚い奴だと思われるかもしれない。けど、さつき美青年の加勢を申し入れたくらいだから、きっとメアは強いに違いない。だって宇宙刑事だし。

「こんな下っ端戦闘員なんてやつちゃってメア！」

「この世界の仕組みを覚えるためにも、レイが戦うべきだと思うわ」  
そう言っただけメアは僕にリボルバーを手渡した。

「アタシ銃なんて撃つたことない！」

遠い昔にゲーセンで撃つたくらいで、本物の銃なんて見たことも触ったこともなかった。

渡されたりリボルバーはズッシリと重く、シリンダーには六発の銃弾が込められていた。

「なんでオートマじゃないの？」

「何か不満でもあるのかしら？」

「弾込めるのも大変だし、いちいちハンマーだつて下ろさなきゃいけないじゃない？」

「特別な弾を使うから、リボルバーのほうが使い勝手がいいのよ。さあ、敵が目の前まで迫っているわよ、撃ちなさい」

メアの言ったとおり、戦闘員はすぐそこまで迫っていた。けど、銃なんて人に向けて撃てるはずないじゃないか。急所に当たったら人殺しだ。

僕が躊躇しているうちに、戦闘員はロッドを高く振り上げていた。当たられたら痛そうだ。痛いのは嫌だ。

大丈夫、ここは現実じゃないんだから、銃弾が人に当たっても死にはしない……と思う。

僕は無我夢中で引き金を引いた。

銃声が耳に届いたけど、目をつぶって撃ったから、弾丸が当たったのかわからない。

でも、僕が殴られてないってことは当たったのだろうか？

僕が恐る恐る目を開けると、戦闘員に恐るべき現象が起きていた。根本から戦闘員が崩れようとしている。

戦闘員を構成していたプログラム言語が浮き彫りになり、それが弾け飛んで崩壊をはじめているのだ。

目の前にいる戦闘員は人間ではなかった。戦闘員だけじゃない、この世界に存在する全てのモノがそうなんだと思う。全部プログラムで構成され、言語によって形作っているんだ。

僕の傍らに立っているメアが補足をする。

「弾丸にはウイルスが仕込んであったのよ」

パソコンなどを破壊するウイルスと同質のものだと思う。この世界では効果的な攻撃方法なのだろう。

ところで美青年はどうなったんだろう？

自分のことで精一杯で他人のことまで気が回ってなかった。

美青年は軽やかに舞いながら、二刀流を趨らせていた。

煌く一刀が戦闘員の腹を斬ったが、まだプログラムは崩壊してい

ない。空かさず二撃目が首を刎ねた。

噴き出る血飛沫。血もちゃんと出るんだあ……グロイ。

首を刎ねられた戦闘員は致命的な損傷を受けたことにより、修復不可能に陥ったプログラムが崩壊した。

戦闘員の数はさつきより増えているようだった。これって加勢したほうがいいのかな？

銃で加勢したいけど、外して美青年に当たった大変だから、もっと近づこう。

僕はカッコよく加勢するべく走った。

そこへちようど、美青年の背後に迫る戦闘員の影。このピンチを救ったら、僕は絶対カッコイイ！

「危ない避けて美青年！」

僕は叫びながら戦闘員に飛び掛ろうとした。

が、こんな展開、想定外だ。

美青年を背後から殴ろうとしていた戦闘員が急に振り向き、電流の走る棍棒を僕に振りかざしたのだ。

バットスイングのようにロッドは僕の腹を抉った。

殴られた痛みは感じなかった。けど、身体中に電流が走り、意識が遠退くを感じた。

まさか……死ぬの……？

僕はちゃんと目を覚ました。

自分の部屋じゃないのはわかった。

コンクリートの壁に囲まれた冷たい部屋。

ベッドから上半身を起こすと、あの美青年が壁に寄り掛って立っていた。

「目を覚ましたようだな」

「アナタがアタシをここに？」

「そっだ」

美青年は決して僕と顔を合わせようとしなかった。すぐ近くにメ

アもいて、クスクス僕を見て笑っている。

「……変態」

ボソツとメアが呟いた。言葉に毒とトゲがあった。

明らかに僕を見て、変態って言った。侵害だ。人間誰しも、少しくらいは変態の要素を持つてると思う。でも、少なくとも僕は人前じゃ変態要素を見せないように努力している。

「アタシのどこが変態なのよ！」

怒った僕はここでハツとした。

言葉使いは女の子のままなのに、声が僕だ。

……ま、まさか。

僕は慌てて胸を両手で鷲掴みにした。鷲掴めるほど胸はなかった。股間にも手を当てみたら、こっちはちゃんとあった。

男に戻ってる。

これは変態だ！！

違った、大変だ。いや、やっぱり変態だ。

メイド服を着た男なんて変態だ。しかも、僕は自分のビジュアルくらい心得てる。ネクラの猫背で、前髪なんて口の辺りまである。

こんなキモイ男がメイド服なんて着て、似合はずがない。

美青年が僕と顔を合わせてくれないのも、美しくないモノを見たら目が腐るとでも思ってるんだコンチキショー！

「でも、どうして元の姿に？」

戦闘員に殴られて電流が身体に走ったような気がする。

「電磁ロッドによってプログラムが破壊されたんだ」

美青年はそう言った。

そこにメアが付け加える。

「この世界の大半はネット世界の幻影でしかないわ。だからウィルスや電気によって破壊が可能なの。けれど、貴方は別世界の住人だから、外装だけの破壊で済んだのよ」

口調は真面目なのに、顔が笑ってる。

笑いたければ笑うがいいさ！

笑われたら傷付いてやる！

ナイはクスクス、クスクス笑いながら僕にブレスレッドを差し出した。

「それは創想能力と創言能力を高めるブレスレッドよ。免疫化の効果と、使い方によっては全てを可能にするわ」

「どうやって使うの？」

「腕に嵌めて想うのよ。強く強く信じることが大切よ、それで貴方はまた美少女になれるわ」

僕はブレスレッドを腕に嵌め、メイド喫茶でバイトしているレイを思い描いた。

するとどうだ、胸が出た。

頭を振るとツインテールが踊った。

股間の男性オプシヨンもなくなっている。

完璧だ！

美青年は僕の顔を一瞥して、立て掛けてあった二本の刀を持ち、ドアに向かって歩き出した。

「オレはもう行く」

無愛想な態度で出て行こうとした美青年を僕は呼び止めた。

「待つて、まだ名前も聞いてない」

「お前たちに名乗る名前などない」

「ちよつと待つてよ、アタシ一緒に戦つてあげたじゃん！」

「ふつ、オレ一人でもどうとでもなった敵を、お前が勝手に割り込んで来てやられたせいで、余計な手間が掛つてしまった」

「ヒツドリー！」

ムカツク野郎だ。

カッコイイからってなんでも許されると思うなよ。せいぜい夜道に気をつけな、ケツ。

再び出て行こうとする美青年の前にメアが立ちはだかった。

「わたしたちも黒い狼団と戦っているの。どうして貴方は追われていたの？」

「なぜお前たちは奴等と戦う？」

背の高い美青年が厳しい眼差しで、一回りも二回りも小さいメアを見つめた。

「黒い狼団に捕らえられた姉を助きたいの」

「もしかしたら、奴等のアジトで見ているかもしれない……」

「本当なの？」

少しメアは声を大きくしたけど、その顔は静かな月のようだ。

「奴等のアジトに乗り込んだとき、お前にそっくりな少女を見た。

おそらく間違いないだろう」

「その少女はどうなったかしら？」

「さて？ 返り討ちに遭って逃げるのが精一杯だったのでな、どうなったかまでは知らん」

僕もピンチになったら逃げるけど、カッコイイ奴が逃げるのはカッコ悪すぎ。

「敵のところへ突っ込んでおいて、逆にやられて逃げてくるなんてダッサーイ」

悪意を込めて言ってやった。

するとすぐに美青年が睨み返して来た。

「またすぐに奴を倒しに行く」

「わたしたちも行くわ」

メアの申し出に美青年は首を横に振った。

「断る。あのネカマが足手まといだ」

「ネカマじゃなくて、十六歳女子高生、名前はレイ！」

「お前に何ができる？ 足手まといの意味を理解できないのか？」

「アタシのことバカにしてるの！ こんな奴と一緒に行くことないよ、ねっメア？」

どんどんこいつのこと嫌いになって来た。実はもともと綺麗な男って好きじゃないんだ。

「一緒に行かなくてはアジトの場所がわからないわ」

「オレにはオレの目的がある。お前らと行動を共にするつもりは毛

頭ない」

この男には協調性ってやつがないのか？

再び部屋を出て行くこうとする野郎の背中に、僕は腹の底の気持ち  
を吐き掛ける。

「もう正直に言っちゃうけど、アタシ、アンタのことなんかムカツク！」

ドアノブを握った野郎の動きが止まった。

そして、鋭い眼つきで僕を睨んだ。

「オレの名前はナギだ、その心に刻んで置け」

そう言っただけは僕に何かを投げ渡した。

強烈に閉められるドア。

あいつが姿を消したあと、僕は受け取った手の平を開いてみた。

そこにはメモリーカードがあった。

「なにこれ？」

まさか僕を殺害せんとするウイルスが仕込まれてるとか？

「貸して頂戴」

メアが差し出した手に僕はメモリーカードを乗せた。

メモリーカードにはいったいどんな情報が入っているんだろう？

メアは壁にあったディスプレイ付きの端末に、メモリーカードを  
差し込んだ。

「サイバーワールドでは、いたるところにネットワークに繋げる端  
末があるのよ」

壁のボタンとタッチパネルを操り、メモリーカードの情報を調べ  
てみると、中身は地図だった。

僕はメアの後ろから地図を覗いた。

赤い印がいくつも付けられ、そこには印を消すようにバツが引か  
れていた。その中のひとつ、バツ印がつけられていない赤い印の横  
に、『BW』と文字が書かれていた。

もしかして『BW』ってブラック・ウルフの頭文字？

メアも同じことを考えていたらしい。

「このバツがつけられていない場所が、黒い狼団のアジトに違いないわ」

「ってことは、あの美青年が僕たちに敵のアジトを教えてくれたわけ？」

でも僕は決してあいつが実はいい奴だなんて思わない。きっと、僕らに恩を押し売りするつもりなんだ。

「行くわよレイ」

メモリーカードを粉々に握りつぶし、メアはさっさと部屋を出て行ってしまった。

……粉々に握りつぶし？

ゴリラがリングゴを握りつぶすんじゃないんだから、メモリーカードがそんな簡単に粉々になるわけがない。少女の姿とは裏腹に、実は怪力の持ち主なのかもしれない。

この世界の人々は目に見える姿が本当だとは限らない、僕のように。

もしかしたらメアも……？

ナギから貰った地図の情報は、全てメアの脳に刻み込まれているらしい。ちなみに僕はぜんぜん覚えられなかった。

メアを先頭に僕らは先を急いだ。

ビル街の裏路地に入り、マンホールから地下道に下りた。

地下だから下水道かと思ったけど、どうやら古い地下鉄の線路だったらしい。

長いトンネルに薄暗いライトが灯っている。

僕はメアの袖を掴んで、引っ張られるようにして先を進んだ。

メアが静かな口調で呟く。

「ナギが一度侵入したせいで、もっと警戒厳重かと思っていたけれど、まだ人の気配がしないわね」

「本当にアジトなんかあるのかなあ？」

もしかして罠だったりして。

実はナギが戦闘員に追いかけられていたのも全部、自作自演だったりして……。

全ては僕らを畏にハメるための大いなる悪の陰謀なんだ。そうに違いない。

前を歩こうとしていた僕の身体を、メアが腕を伸ばして制止させた。

「静かに、人の気配がするわ」

物陰に隠れて様子を窺うと、二人組みの人影が地面に倒れた人らしきものを、持ち上げて運んでいるようだった。

トンネル内に強い光が差し込み、ドアらしきものが開いたのを確認できた。その中へさっきの二人組みが人を抱えて入っていった。

メアは静かな足取りで駆けて、すぐにドアがあった場所に向かった。

金属の扉が僕らの前に立ちはだかる。

カードリーダーが扉には付いていて、それがカギになっているっぽい。

「どうやって開ける？」

尋ねるとメアは何も言わずカードリーダーの前に立ち、肘を引いてグーパンチ！

カードリーダーは木っ端微塵。小さい火花を飛ばしながら壊れてしまった。

「開かないわね？」

本当に不思議そうな顔をするメア。

今のギャグじゃなくて、本気で開くと思ってやったみたいだ。

「……開くわけないじゃん。カギを壊したらもう入れないじゃない？」

「なら扉を壊すわ。少し下がって頂戴」

壊すって、まさか怪力パンチ？

夜風のような冷たさが背中を撫でた。

メアの髪の毛が重力に反してふわりと持ち上がり、まるで地面か

らそよ風が上に向かって吹いているみたいだ。

何か独り言をブツブツと呟いたメアの手が扉に向けられた。

「クルデ！」

何その単語と思ったのも束の間、僕は眼を剥いて驚いた。

メアの手から茶色い飛沫が噴射され、扉を腐食させ溶かしてしまったのだ。

「ナニ今の!？」

驚きを隠せない僕にメアはにべもなく、

「魔法よ」

と、ひと言。それだけ言って、さっさと扉の向こうに行ってしまった。

今の現象をそれだけの言葉で片付けていいの？

魔法ってスゴくないの？

だって魔法だよ、魔法。

「メアって魔法使いだっただの？」

僕の質問は見事にスルーされた。

扉が壊れた瞬間から、何やら警報らしき音が聴こえていた。やっぱり扉を破壊したのが不味かったのだろうか。

蛍光灯が照らす鼠色の金属が囲む廊下を、僕は忍び足で進んだ。子供の秘密基地よりレベル高いけど、鉄板を貼り付けてあるボルトが出てたり、溶接が雑だったりしている。静かに歩かないと、すぐに足音が立ちそうだ。

ほら、後ろから足音が聴こえて……!？

僕は慌てて振り返った。

「メア、戦闘員が！」

「わかっているわ」

僕らの後ろから戦闘員が駆け寄って来ていた。

前に顔を戻すと、こっちからも戦闘員が迫っている。挟み撃ちさせられてしまった。

でも大丈夫、こっちには美少女魔法使いメアがいるんだ。

「やれるもんなら掛って来い！」

「あら、レイったら戦う気満々のね」

「アタシじゃなくて、メアがお得意の魔法でちょちょいのちょいみたいなの」

「姉が近くにいないと連続して魔法が使えないのよ」

「……マジで!?!」

絶望だ!

これってピンチとかそういう展開?

計画性ゼロで敵のアジトに突っ込んで、当たり前の如くピンチが訪れたみたいなの?

全身黒タイツの戦闘員の数は、二の四の六人だ。

絶対こっちが不利だし勝てるはずがない。

もう絶望だ!

困った顔をしている僕にメアが投げかける。

「早くリボルバーを抜いて、貴方ならできるわ」

「……わかった」

そうだ、僕だって武器を持つてるんだ。

僕はスカートを捲し上げ、太腿のホルスターからリボルバー抜いた。

迫りくる戦闘員に向かって僕は銃弾を打ち込んだ。

鳴り響く銃声……ハズレたあッ!!

僕が銃を撃ったことで敵は一瞬怯んだ。でも、そんなの一時しのぎでしかない。

「リボルバーなんて連射できないから素人が的に当てられるわけない!」

メアが静かに諭す。

「想言プログラムを発動させるのよ。貴方の想いはブレスレットによって増幅され、現実となる」

「想言プログラムなんて初耳だし、とにかく強くイメージすればいいんでしょ!」

戦闘員との距離はもうない。

僕は想い、『レイ』に新たな一面を追加した。

「地元のゲーセンでアタシにガンシューティングで敵う者なし！」  
これでどうだッ！

僕は無我夢中で銃を撃った。

「キーッ！」

奇声を上げなら次々と戦闘員たちがプログラム言語に戻って逝く。

「あと一匹！」

僕は最後の引き金を引いた。

カチカチと、引き金が鳴るばかりで弾が出ない。

「……弾切れ!?」

最初に一発外したから……。

僕が慌てている隙にメアは戦闘員に抱きかかえられていた。

「捕まってしまったわ」

淡々とまるで他人事のメア。もっとジタバタするとかかないの？

メアを抱えた戦闘員が逃げ出した。

ヤバイ、これは新たなピンチだ。

「こら待て、メアを放して！」

僕はすぐに戦闘員を追ったけど、あいつ予想以上にすばしっこい。戦闘員つてやつぱり肉体労働だから体力あるんだなあ。その割りに時給は安いに違いない。

感心している場合じゃなかった。

曲がり角で戦闘員が視界から消え、すぐに僕も曲がり角を曲がったけど、戦闘員の姿がどこにもない……メアを抱えた戦闘員は。

代わりにメアを抱えてない戦闘員がゴキブリのように湧いて来た。銃弾の込められてないリボルバーなんて、ただの鈍器だ。あんな大勢で来られたら僕に勝ち目はない。

「……ごめんメア」

決してメアを見捨てたわけじゃない。ちょっと独りになって作戦を立てただけだ。

戦闘員に背を向けて僕は必死に逃げた。徒競走より真面目に走った。

近くの曲がり角を曲がった瞬間、何者かが僕の腕を引いた。

「ボクは敵ではありません」

僕は眼を丸くして相手の顔を見た。

ピエロの仮面を被った見るからにピエロだ。派手な衣装が眼に痛い。

「なんでこんな場所にピエロが？」

「話は後です。今は少しの間、耳を強く塞いでいてください」

耳を塞ぐ理由を尋ねる前に、ピエロはどこからかダイナマイトを取り出し、なんとそれに火を付けて 投げた！

すぐに爆発音が聴こえ、煙が僕の咽喉にも入りむせ返ってしまっ

た。ピエロは爆発跡を覗き込みながら、僕に親指を立てて見せた。

「見事に跡形もなく吹っ飛んじやいましたねー。ちよつとやり過ぎちやいましたかね」

ちよつとどころじゃない。非常識だ。

「アナタ何者なの？」

「申し遅れちやいました。ボクのハンドルネームは休日の道化師です」

「なんでピエロがこんな場所にいるのよ？」

「最近ちよつとウエスト周りが気になって、ちよつとお散歩に」

彼の言うとおり、お腹が妊娠したみたいに大きく膨らんでいた。

でも……。

「絶対さっきまでそんなに膨れてなかった」

「あつ、わかっちゃいました？」

ピエロは服の下から風船を取り出して、両手でパンと音を立てて割った。

「……付き合ってらんない」

こんな得体の知れない奴と、コントなんてやってる場合じゃない。

とにかくメアを探して、ナイも探さなきゃいけなかった。

「助けてくれてありがとう、じゃあまた」

僕は変質者と深く関わる前に逃げようとした。

けど、いつの間にかピエロは僕の前に立っていた。

「どこに行くんですか？ ボクにできることならお手伝いしましょうか？」

「結構です」

「そんなつれないこと言わないで、ボクも連れて行ってくださいよ」

「しつこくすると警察呼びますよ」

「それは困りました。お詫びのしるしに良いこと教えましょうか？」

「結構です」

僕は足を一八〇度回転させ、逆方向に歩き出そうとした。

けど、ピエロは僕の前にいた。

「あなたのお探しのモノを知っていると云ったらどうしますか？」

「……………」

ピエロの仮面が僕を覗き込んでいる。何か得体の知れないモノを感じる。

「例えば、道に落としたお金のありか。例えば、なくしてしまった昔の記憶。例えば、このアジトにある牢屋の場所」

「今の教えて！」

「道に落としたお金ですか？」

「違う！ このアジトの牢屋よ」

そこにナイがいるかもしれない。メアもすでに入られているかもしれない。ただ、気がかりなのは、このピエロの得体が知れないってことだ。

畏かもしれない。

でも畏だったら、こんな回りくどいことしないで、さっさと僕を煮るなり焼くなりすればいい。

「キーツ！」

戦闘員の声が向こう側から聴こえた。

しまった、見つかってしまった。

「きゃっ」

突然、僕の身体が浮いた。

ピエロが僕をお姫様抱っこして、軽やかなステップで走り出した。

「さあ、お姫様、着きましたよ」

僕はピエロに降ろされた。

辺りは薄暗く、少し湿った空気が流れていた。

奥のほうに牢屋の鉄格子が見える。本当に牢屋に着いたようだ。

「ありがとう……？」

振り返るとピエロの姿はなく、微かに花の香りがするような気がした。

そして、薄闇から足音が近づいて来た。

何かが闇の中で煌いた。

「レイ？」

刀を持ったロングコートの美青年 ナギだった。

あんまり二人つきりで会いたくなかった。

ナギは刀を腰に差し、僕の横を通り過ぎて牢屋に向かった。僕も着いていく。

牢屋の中で何かが蠢いているようだった。『ゴースト』だ、『ゴースト』が牢屋の中に入られていた。

いくつかあった牢屋を全部見たけど、ここには『ゴースト』しかない。メアもナイの姿もない。

突然ナギが抜刀した。

抜くと同時に斬り、鞘に戻すと同時に竹を切るように格子が落ちた。

スゴイ刀の使い手だ。現実だったら絶対ありえないな。

牢屋が破られたというのに、『ゴースト』たちは出ようとしなかった。

ナギは言う。

「後はお前たちの自由だ」

ナギは踵を返しコートを翻した。

歩き出すナギの背中を僕は追った。

「待ってよ、どこに行くの？」

「大狼君を倒しに行く。そして、ナンバー2のザキマも必ず倒す」

「タイロウクンって誰？」

「なにも知らずにこの場所に来たのか？」

「何か悪い？」

別にそんなの知らなくてもいいじゃんね。ちゃんとナイさえ助ければ問題なくない？

「狼どもの君主。大狼君とは黒い狼団の団長の名だ」

「つまり諸悪の根源、悪の大魔王ってことね」

「そのようなところだ」

早足で先に行くナギを僕が追う形だ。

廊下ではまだ警報が鳴り止まらずにいる。

ナギが二本の刀を抜いた。

前から戦闘員たちが迫っていた。でも、何かいつもと違うぞ？

ハチマキが青い！

全身黒タイツが下っ端だとしたら、たぶんそのバージョンアップ版に違いない。きつと、赤とか、黄色の戦闘員もいるような気がする。

ナギが風のように走った。

刀が煌き、風切音が鳴り、赤い飛沫が次々と噴いた。

戦闘員たちはみんな一撃で消えて逝った。

悔しいけど強い。いや、戦闘員がザコなんだ。

次々と戦闘員たちを薙ぎ倒し、僕は楽をしながら先に進んだ。

そして、ついになんか特別そうな大きな扉の前まで来た。

「ここだ、この先に大狼君がいる」

ナギはそう言って重たそうな扉を押した。

僕らが部屋に乗り込むと、広い部屋の奥でノートパソコンを傍らに、リクライニングチェアに座っていた痩せ男が立ち上がった。きつとこいつが大狼君だ。

「また君か……」

腰まで伸びた長い黒髪が揺らし、大狼君の顔はサイバースコープでほとんど隠れてしまっている。

メアの声がある。

「早くここから出して頂戴」

部屋を見渡すと、大きなガラス管みたいな中に、ホログラム映像みたいなメアが入っていた。

「ワザと捕まってみただけけど、どうやらナイはすでにここにはいないそうよ」

すっごい魔法使えるクセに、簡単に連れ去られたと思ったら、ワザと敵の手に落ちたらしい。ワザと捕まるのいいけど、自分ひとりで逃げられるようにもして欲しかった。

大狼君には片腕がなかった。肩の付け根から電気コードのよう物が伸び、まるで何かにもがれたようだった。

「腕はどうした？」

ナギが訊いた。

「些細なバグがあつてね、腕を破壊された」

大狼君はヒップバッグに手を突っ込み、ドロップキャンディーを取り出すと口に放り込んだ。

ドロップを噛み砕く音に合わせて、僕の背後から足音が聴こえた。

戦闘員たちがこの部屋に飛び込んで来た。

部屋の出口を塞がれてしまった。

「逃げ場はないぞ、どうする？」

大狼君の声が響いた。

どうしようもない。銃弾だって切れてるし、僕は戦力外だ。

ナギが二本の刀を抜いた。

「戦闘員は任せた、オレは大狼君を仕留める」

そんなこと言い残されても困る。ナギはさつさと大狼君に向かって行ってしまった。

戦闘員の数はたくさんだ。これを僕一人で倒せと？

「……ムリ」

後退りをする僕を追い詰めるように、戦闘員たちがジリジリと詰め寄ってくる。美少女を集団で甚振ろうなんて卑劣だ。

「レイ、想言プログラムを発動させるのよ」

僕の後ろでメアの声が出た。

そんなこと言われてもどうしていいかわからないし！

戦闘員が僕に飛び掛って来た。

「キーツ！」

「きゃっ！」

僕は必死で床に飛び込んで避けた。

うつ伏せの体制から僕はすぐ立ち上がろうとしたけど、そこに次々と戦闘員たちが飛び込んで来た。

「……く……苦しい」

僕の上にどんとん山形に積み重なっていく戦闘員。このままじゃ圧迫死しそうだ。

どうにか僕は隙間を探して、匍匐全身で戦闘員の山から抜け出せた。

でもすぐに戦闘員に気付かれて追われるハメに。

「もお追って来ないでよ！」

僕は部屋をグルグル逃げ回り、何かいい物はないかと自分の身体を探った。

「……あれ？」

腰の辺りになんかある。

僕はすぐにそれを引っ張って胸の前に出した。

……手榴弾だ。

いつの間に僕はこんな物を持ち歩いていたんだろう？

手榴弾をよく見てみると、ピエロのイラストが手榴弾にプリント

されていた。あのピエロが僕にプレゼントしてくれたのか！

とにかく僕が助かるためにはこれを使うしかない。

おそらくここにあるピンを抜いて投げればいいハズだ、たぶん。

「えい！」

僕は可愛らしく手榴弾を投げてみた。

手榴弾は放物線を描いて戦闘員たちの真ん中に落ちた。急に慌て出した戦闘員たちが散り散りに逃げていく。

「……………爆発しない？」

不発かと思つた瞬間、手榴弾が爆発して僕は咄嗟に伏せた。投げてすぐ爆発するんじゃないらしい。

手榴弾はあと二個あった。

立ち上がった僕は手榴弾を胸の前に突き出し、戦闘員たちに見せつけて牽制した。

「近づいたら投げるからね！」

戦闘員たちは恐れおののいて近づいてこうとしない。今だ、今のうちにメアを助けよう。

僕はメアが閉じ込められている装置の前に立った。

メアが入っているケースの前にはタッチパネルがあつて、これをどうにかこうにかすればメアを救えるはずだ。

僕はタッチパネルと睨めっこした。電化製品は得意だからきつとどうにかなる。

とにかく僕は適当にボタンを押してみた。すると、すぐ近くの画面にパスワードの要求画面が出た。いくら電化製品に強くても、パスワードの解読とかはムリだ。

「後ろから敵が迫っているわよレイ」

淡々とメアは言った。そういうことは慌てて言おうよ。

僕はすぐに振り向いて手榴弾を投げようとした。

もう遅かった。

僕はタッチパネルの上に押し倒されてしまった。その拍子に僕の手から手榴弾が落ちた。でも大丈夫ピンさえ抜いて……………。

「抜けてる！」

手榴弾のピンが何かの拍子で抜けていた。

それに気付いた戦闘員は僕を置いて一目散に逃げ、僕も慌ててその場から逃げた。

背中に爆風を浴びて、僕は大きく前方に吹き飛ばされた。

……しまったメアが！

硝煙の中に小柄な影が映っていた。

「さあ、少し遊んであげようかしら、クスクス」

煙の中から現れたメアがこっちに向かって歩いてくる。

そのとき僕はすでに戦闘員たちに取り囲まれていた。

けど、もう僕の出番は終わったようだ。

冷たい風が吹き、メアが呪文をブツブツ唱えはじめた。

「デザインド！」

黒い稲妻が避雷針に落ちるように戦闘員に吸い込まれ、そこからまた別の戦闘員に次々と放電していった。辺りは閃光に包まれ、稲妻は縦横無尽に暴れまわった。僕は巻き添えにならないように、芋虫みたいに床を這う。

稲妻を喰らった機器が火花を吐いた。そして、急に部屋が停電した。

すぐに予備電源に切り替わり、明るくなった部屋の中には四人だけが残っていた。メアと僕、そして大狼君に馬乗りになって刀を突き付けたナギの姿。暗がりの中でナギは大狼君を追い詰めていたんだ。

「貴様がいなくなればすぐにでも黒い狼団は壊滅する」

ナギはより深く刀を大狼君の首元に突き付けた。

「ここでやられるわけにはいかぬ！」

危険を顧みず、決死の覚悟で大狼君は相手の懐に飛び込み、グロブを嵌めた手がナギの腹を押した。

「クラックパンチ！」

腹で起きた爆発にナギは押し飛ばされた。

その隙に背を向けて逃げる大狼君。

「次に会うときは両腕で相手をしよう、ハハハハッ！」  
きつと、負け犬の遠吠えだ。

大狼君はパソコンのディスプレイの中に飛び込み、その姿を消してしまった。

残された僕たちは顔を見合わせた。

ナギは刀を鞘に収め、ディスプレイの中に飛び込んで消えた。画面に頭打つっていう王道展開はないらしい。

すでにメアも飛び込もうと構えていた。

「わたしたちも行くわよ」

「うん」

僕は頷き、メアの後を追ってディスプレイの中に飛び込んだ。

ゴッソッ！

「痛あゝい！」

ディスプレイの枠に頭を打ってしまった。

……よかった、誰にも見られてなくて……？

後ろを振り向くと、戦闘員が並んでいた。

見られた！

僕は顔を真っ赤にしてディスプレイの中に逃げ込んだのだった。

## サイバーファントム「Link3ナギ」

街中の『ゴースト』たちが無差別に襲われている。襲っているのは黒い狼団。

刃向かう者は容赦なく破壊し、弱い者はトラックに詰め込みどこかに攫っていく。彼らの目的はこの世界の破壊と、新たな世界の構築。黒い狼団を束ねる者の名は大狼君。

世界の破壊なんて、あたしは絶対に許さない。  
もう失うのは嫌。壊されるのは嫌。だからあたしは戦うと決めたの。

あたしは隙を見てトラックの荷台に乗り込んだ。

『ゴースト』たちがあたしを見てる。

「オレのことは黙っていてくれ、あとで必ず助ける」

あたしは『ゴースト』たちに紛れて、トラックの奥に身を隠した。トラックが走り出し、たぶんアジトに向かっているんだと思う。

……きや！

暗がりの中で誰かあたしのお尻さわった。もおやんなっちゃう。まるで満員電車みたい。

トラックに揺られて、どのくらい経ったんだろ？

停車して、また走り出さないとと思ったら、急に荷台の扉が開かれた。

眩しい光であたしは目が眩んだケド、不意打ちするなら今だと思つて、勇気を出して飛び出した。

戦闘員の頭を踏み台にしてあたしは飛んだ。

ロングコートを靡かせながら着地して、しゃがんだまま辺りを見回した。

戦闘員たちがコツチを見てる。

本当はイヤなんだケド、ヤルしかないかなあ。

あたしは両脇に差している刀を抜いた。

戦闘員の数はざっと七匹。ほとんど黒だケド、一匹赤いヤツが混ざってる。あの赤には気をつけなきゃ。

背の高いビルに見下ろされる中、あたしはアスファルト力いっぱい蹴り上げた。

電磁ロッドを構える戦闘員を狙い、まずは一撃を喰らわせた。

切っ先が戦闘員の胸を撫で斬る。

ヤダ、もおまたコートに血がついたあ！

なんで血なんて噴き出る仕様になってるんだろ、いらぬのに。

すぐそこに迫っていた戦闘員の頭に回し蹴りを喰らわせ、真後ろにいたヤツには刃をお見舞いした。

これで三匹。

黒戦闘員は下っ端だから、少しのダメージでプログラムが破壊してくれる。

問題はあの赤い奴だ。

赤戦闘員の真横に待機していた二匹の戦闘員がハンドバズーカを撃った。

撃たれた弾が普通の弾じゃないのは知ってる。六本の脚が生えた蜘蛛型のワームだ。身体に取り付かれたら、あたしが破壊されちゃう。

飛んできた蜘蛛を真っ二つに斬って、もう一匹は……あつ、踏み潰しちゃった。でもいいや、壊せまし。

後ろから飛びかかってきた戦闘員の股間を踵で蹴り上げて、あたしは赤戦闘員に刃を向けた。

横にいる二匹なんてあたしの敵じゃない。

シンメトリーを描いて二匹同時に首を刎ねた。

いやん、もおたくさん血が吹き出してるし最悪。

血が目晦ましになっちゃって、赤戦闘員のこと見失っちゃった。どこにいるの？

後ろから気配を感じる。早い！

顔を殴られそうになってあたしはしゃがんで躲した。そこに回

し蹴りを喰らって脚を掬われちゃった。

尻餅を付きそうになったケド、どうにか刀を地面に突き立てて堪えて、残った刀を思いっきり投げつけてやった。

「キーツ！」

怪鳥みたいな叫び声をあげて、赤戦闘員は背中から倒れた。そして、跡形なくこの世界から消えた。

赤いのって黒に比べて三倍の戦闘力があるんだもん。油断すると危ない危ない。

さてと、まずは『ゴースト』たちかな。

あたしはトラックの荷台を覗き込み、『ゴースト』たちに声をかける。

「もつ心配ない。辺りに戦闘員たちはいない今が逃げるチャンスだ」  
荷台の中から『ゴースト』が出てくるのを確認して、あたしはその場を後にすることにした。

この近くにアジトがあるハズ。あたしが調べた情報によると、どこからか地下に行けるハズなんだケド……。

トラックが止まっているのがココだから、コッチかなあ？

あたしは裏路地に入って、ビルとビルの間を歩いた。

行き止まりだ。

足元にはマンホールがあるケド、コレかな？

ヤダなあ、下水とか臭いもん。でも、行くっきゃないよね。

がんばってマンホールを開けてハシゴを降りた。悪臭はしないみたい。

地下に降りてみると、下水じゃなくて線路みたい。でもなんか使われてる雰囲気しない。

……アレ？

向こうから明かりが見えるケド、もしかしてあそこが入り口？

あたしは闇に身を隠しながら明かりに近づいた。

扉の前に戦闘員が立っている。退屈そうにしてるから遊んであげようかな。

足元にあつた石を拾い上げて、遠くに投げ飛ばした。

石が落ちた音に戦闘員が気を取られているうちに、あたしは刀を抜いて全速力で駆けた。

戦闘員があたしに気付いて振り向いたケド遅い。刃はすでに戦闘員の首に付けつけてあつた。

「首を落とされたくなければ、大人しくしろ」

「キー」

いつもより語尾が下がってるから、観念したってことかなあ？

「それではドアのロックを解除してもらおうか」

「キーッ！」

戦闘員は首を横に振った。

「言うことを聞かないなら、首を落とす前にまずは……」

もう一振りの刀を抜いて戦闘員の……いやん、股間が目に入っちゃった。全身タイツでそこだけモッコリしてるんだもん。えい、ここに刀突きつけちゃえ！

股間に刃を突きつけられた戦闘員は震え上がった。

「キーキーッ！」

そしてドアについてるボタンを押してロックを解除した。

「もう用済みだ」

あたしは柄の底で戦闘員の首の後ろを強打した。おやすみなうい。気絶した戦闘員を残してあたしはアジトの中に侵入した。

金属の廊下を静かに走り、大狼君の居所を探した。

サイレンが急に鳴りはじめた。

「……っしまった」

天井に防犯カメラが仕掛けてあつた。

ええっと、防犯カメラを叩き切って、姿を晦ませることにしよう。カメラを壊してあたしは身を隠しながら先を急いだ。

戦闘員の影だ！

あたしは即座に身を隠し、近くにあつた部屋に忍び込んだ。

部屋の中にも戦闘員たちがいるじゃん！

あたしは身を伏せて、床を這いながら移動した。

この部屋では何かの研究をしてるっぽい。だって、戦闘員に混ぜて白衣を着てる人がいっぱいいるもん。

なにしてるんだろ？

人が入れそうなカプセルがいっぱい並んでる。冬眠装置なん不需要だし、人間を移動させる装置？

部屋の奥から戦闘員に引つ張られて『ゴースト』が連れて来られた。カプセルの数は五個、それと同じ数の『ゴースト』が連れて来られたみたい。

あたしがジツと見てると、『ゴースト』はカプセルの中に押し込められ、フタが閉められて閉じ込められた。

白衣を着てる人たちが慌しく動きはじめた。

いつたいなに行なわれるんだろ？

白衣を着た男がスイッチのレバーを降ろすと、装置が火花を散らして揺れはじめた。

時報みたいな音が聴こえる。

ポン、ポン、ポン、ポーンっと同時にカプセルのフタが開き、大量のスモークが流れ出した。

スモークの奥に黒い影が見えた。

……あれは、戦闘員だ！

中に入ったハズの『ゴースト』が、出てきたら戦闘員に変わってる！？

もしかして、戦闘員の生産マシン？

だとしたら、今まであたしが戦ってきた戦闘員って、みんな『ゴースト』だったの？

ヒドイ、そんなのヒドイ。敵だと思って戦ってきた戦闘員が、元は『ゴースト』だったなんて……。

「キーツ！」

見つけたぞと言わんばかりに、戦闘員があたしを見つけて叫んだ。柄を握ったケド刀が抜けない。あたしには斬れない。

あたしは戦闘員にタツクルしてその場から逃げた。

部屋の外に出ると廊下の向こうから戦闘員が！

あたしは逆方向に走り出した。

Ｔ字路に差し掛かると、また向こうから戦闘員。後ろからも戦闘員が迫ってる。あたしは誘導されるように逃げるしかなかった。

そして、あたしの前に立ちはだかった大きな扉。

一本道に追いやられ、あたしは扉の向こうに行くしかなかった。

重い扉を押してあたしは部屋の中に飛び込んだ。

すぐに甲高い男の声が聴こえた。

「ケケケケツ、よく来たな美男子さんよ」

あたしの前に現れたのはモヒカンのヘヴィメタ野郎。その後ろには長椅子で寛ぐ大狼君の姿。そして、戦闘員に両脇を囲まれた少女？大狼君が戦闘員たちに命じる。

「ナイを隔離フォルダに入れて置け」

「キーツ！」

戦闘員たちに腕を捕まれ、ナイっていう少女が連れて行かれようとしている。

「ウチのこと放せつてば！ このエツチ痴漢変態！」

物凄いジタバタ暴れたケド、結局ナイは連れて行かれてしまった。いったいあの少女はなんなんだろ？

大狼君があたしに顔を向けた。

「色々とり込んでいる最中だったので失礼した。さて、君の用件を聞こうじゃないか？」

あたしは刀を抜く準備をして敵意を示した。

「なぜお前は这个世界を破壊しようとしている？」

「そんなの楽しいからに決まってるだろバーカ！」

答えたのは大狼君の前に立っていたモヒカン野郎だ。

「お前などに聞いていない、オレは大狼君と話しているんだ」

「ケツ、大狼君、大狼君つてオレ様のことはほったらかしかよ気に食わねえ」

不貞腐れたようすのモヒカン野郎は、壁に持たれかかって口を開かなくなった。もしかしてイジケちゃった？

大狼君が立ち上がった。

「最初は、破壊そして、創造を楽しんでいるだけだった。しかし、私はいつしかこの世界の真理を追究していたのだよ。などと言つても君には理解できないだろうがな。君はなぜ私に会いに来た、ただ私を倒すためか？」

「それもある。だが、オレがこの世界に来たのは情報が欲しかったからだ。この世界にある膨大な情報にアクセスできるお前の力が必要だった」

サイバースコープの下から覗く大狼君の唇が、先ほどとは違う表情をしたのをあたしは見逃さなかった。……形のいい唇。もしかしたら素顔は美形かも。

「引つかかる言い方をしたな。貴様、この世界の人間ではないな？」  
バレちゃった。この世界の住人たちはほとんど思念だケド、たまにあたしたちみたいなのホームワールドから来た人間がいる。

あたしの正体がバレたつてことは、大狼君も『世界』の情報を握つてることになる。やっぱり男の力が必要だ。でもあたしは大狼君たちを許せない。この世界を破壊して、我が物にしようなんて許せない。

突然、真後ろの扉が開かれた。

部屋に流れ込んでくる戦闘員たち。

壁に寄りかかっていたモヒカン野郎がニヤリと笑う。

「袋のネズミだな、ケケケツ」

あたしに逃げ場はない。ケド、できれば戦闘員たちとは戦いたくない。

大狼君が戦闘員たちに合図を送った。

「デリートするな。その男には聞きたいことがある、生け捕りにしろ！」

「キーツ！」

戦闘員たちが襲ってくる。もう刀を抜かなきゃ。  
「待ちな！」

大きな声を出して戦闘員たちを制止させたのはモヒカン野郎だった。

「オレ様にやらせてくれよ」

あたしの前にやってきたモヒカン野郎に大狼君は、

「好きにしる」

と、だけ言っつて、自分の長椅子に腰掛けてパソコンをはじめしまった。絶対見くびられてる。あたしが真剣なときに、パソコンなんてはじめて、どうせエロサイトでも見てるんでしょ！

バーカ！

モヒカン野郎があたしに近づいてくる。

「可愛がつてやるぜ美男子さんよお」

うわっ、舌なめずりした。キモイ、こいつそっちの趣味あるのかなあ。鳥肌立つちゃう。

「刀の錆にしてやる」

「ケケツ、やれるもんならやってみな！」

いつの間にかアイアンクローみたいな装備してるし。あれで斬られたら絶対痛いだろうなあ。

あたしは二振りの刀を抜いた。速攻で決める！

「十文字斬り！」

キンと甲高い音がして、あたしの攻撃は受け止められた。刀はツメの間に挟まり、もう一振りの刀も同じように止められていた。アイアンクローは両手に装着されていた。

刀がまったく動かせない。向こうもツメを動かそうとするけど、こっちだって負けてらんない。

金属がぶつかり合っ音が響く。

そして、モヒカン野郎の足が蹴り上げられた。

「クッ！」

歯を食いしばったあたしの腹に足が食い込む。

後ろによろけたあたしに容赦なく次の攻撃が……そんなギターどつから!?

モヒカンがスイングしたエレキギターの側面で、あたしは顔面を殴られて床に転げ回ってしまった。

イターイ。リアルだったら絶対泣いてる。ケド、あたしは負けない。

叩かれた反動で向けてしまった背中に、ツメが振り下ろされた。

「クッ!」

激しい痛みが背中に走った。痛すぎる。

すぐに立ち膝を付いて体制を整えようとしてるところに、モヒカ  
ンがエレキギターを構えて見下してきた。

「骨のねえ奴だ。もう飽きたぜ!」

そう言つてモヒカンはエレキギターを掻き鳴らした。

電磁攻撃!?

目に見えない衝撃波を喰らい、あたしの身体は動かなくなった。  
まるで痺れたみたいに身体が動かない。

そんな……こんなにあっさり負けるなんて……。

口を開いても声すら出せない。

さつきまでパソコンをやっていて、あたしたちの戦いなんて目にも留めなかった大狼君が口を開く。

「留めは刺すな。口が聞けるようになるまで隔離フォルダに入れて  
置け」

「キーツ!」

戦闘員たちの声が聴こえ、全身に痺れが回ったあたしは気を失っ  
た。

……出られない。

金属の箱の中に入れられたみたい。天井も低いし、横になること  
もできない。立ってるか座ってるしかできない。閉所恐怖症だった  
ら耐えられないと思う。

「誰かいないのか！」

あたしは壁を蹴っ飛ばした。びくともしない。声も外に聴こえるのかわからない。

「ここを開ける！」

……あれ、開いた。

ちよつと押したら開いちゃった。

開いたのはいいけど、誰この人？

「すみません、ここトイレじゃなかったんですねー」

ピエロはそう言って扉を閉めようとした。

「待て！」

閉められたらまた出られなくなっちゃう。あたしは強引に外に出た。

でも、どうしてこんなところにピエロが？

「誰だお前？」

「ボクですか？ 休日の道化師です。散歩していたら迷ってしまつて……」

「迷つてだと？ 黒い狼団の仲間じゃないのか？」

「と、とんでもない！ ボクはただの道化師ですよ」

見るからに怪しい。でも、偶然でも故意でも、あたしを出してくれたつてことは、敵ではないのかも。とにかく得体の知れないヤツ。

ここから逃げ出すなら、とにかく武器を探さないと……あれ？

「お前が持つてる刀はなんだ？」

ピエロがあたしの刀を持っていた。

「これですか？ さっきこのロッカーを開けていたらまたまた見つけました」

「それはオレのだ、返せ」

あたしは強引にピエロから刀を奪い返した。

辺りを見回すと、まるでロッカールームみたいだった。でも、ロッカーより大きいかも。あたしが入ってたくらいだし。

もしかして、まだロッカーに入ってる人が？

「ここから出せ！」

女の子の声が微かに聴こえたような気がする。このロッカーからだ。

「誰かいるのか？」

「いるいる、ぜんぜん使用中！ ウチの名前はナイ、奴等に捕まっちゃって、とにかくここから出してよ」

「少し待て」

ナイってどこかで聞いた名前……大狼君の部屋で見た少女だ。

あたしは刀を構えて、力を込めて振り下ろした。

「一刀両断！」

手が強く痺れ、刀ごとあたしは弾き飛ばされた。ロッカーの扉はびくともしない。

「駄目だ、ぜんぜん歯が立たない」

「そんなこと言わないで、ウチのこと助けてよ」

助けたいケド、この刀で斬れないなんて、破壊は絶対にムリそう。あたしはピエロに顔を向けた。

「オレのロッカーはどうやって開けた？」

「開いてましたよ」

「なんだと？」

「だから、キミの入ってたロッカーは最初から開いてましたよ」

そんなバカな。だって、あたしが中から暴れてもびくともしなかつたのに……。

あたしはナイが入っているロッカーに手を掛けた。力を込めて引いてみたけど、やっぱり開くハズなんてない。

扉に力ギリしきものはついていない。どうやって開けるんだろ？

ピエロが耳に手を当てて物音に耳を済ませた。

「なにか聴こえませんか？」

「いや、なにも聴こえない」

「聴こえますよ、ほらサイレンの音です」

急にサイレンの音がこの部屋にも響きはじめた。

部屋の扉を開けて戦闘員が飛び込んできた。

あたしは柄を握り直して逆刃にして、戦闘員に斬りかかった。  
ごめん、眠ってて。

戦闘員の腹に峰打ちを喰らわせ気絶させると、あたしはナイが入  
ってるロッカーに駆け寄った。

「必ず助けに戻る！」

「ウチのこと置いてく気！」

ごめん、絶対に助けにくるから待ってて。

「この薄情者のバカ！」

あたしはナイの罵声を背中に浴びながら部屋を飛び出した。

廊下の向こうからは戦闘員たちがもう来ていた。

「こっちですよ」

ピエロがあたしに合図を送った。

「道に迷っていたんじゃないのか？」

「トイレを探して迷ってただけです。出口ならわかりますよ」

このピエロのことを信じていいのかなあ？

敵だったらこんな回りくどいことをするはずもないし……。

あたしは警戒しながらも、走るピエロの後を追った。

偶然なのか、このピエロの力なのかわからないけど、一回も戦闘

員と鉢合わせしないで出口まで着ちゃった。

アジトの入り口にいるハズの見張りまでいない。

このピエロっていったい……？

あたしはピエロを探して辺りを見回した。でも、あいつの姿は跡  
形もなく消えていた。そして、ピエロが消えたあとに残ったこの香  
は……？

なぜか懐かしい香。思い出せない。まるで記憶を改ざんされてし  
まったように、この香のことが思い出せない。

「キーッ！」

ついに戦闘員たちに追いつかれた。まったくしつこいんだから。  
あたしが長い地下道を走り出した。たかさんの足音が響き渡り、

あたしのことを追ってくる。

しばらく走ってあたしは足を止められた。天井が崩れて道が塞がってる。後ろからはまだ追ってくるし、どうしよう？

あたしは天を仰いだ。

光が見える。マンホールのフタが開いてる。あたしはすぐにハシゴを登って地上に出た。

マンホールから這い出して見た景色はビル街。最初に入ってきた場所とは違う場所だけど、ドコなんだろうココ？

ハシゴを登って戦闘員たちがやってくる。転がってるフタを見つけて、マンホールにフタをしてやろうとした。

ケド、それが大失敗。重たいフタを運ぶのに手間取って、そのうちに戦闘員がすぐそこまで来ていた。

捕まれそうになった足をジャンプで躲して、そのままこの場から逃げ出した。

ビルの角を曲がったところで、あたしは眼を丸くしてしまった。あの子がいる。ナイっていう名前の少女が向こうにいた。でも、

どうやって逃げたんだろう？

もういい、ここで戦闘員たちを迎え撃つ！

刀を構えたあたしのところへ、ナイが駆け寄ってきた。

「わたしも加勢するわ」

あの子じゃない。顔はそっくりなのに、この子はナイじゃないって直感した。とても冷たい眼差し、とても冷淡な声。あたしが会ったナイは、もつと元気な感じがした。

「手助けは無用だ」

あたしは謎の少女の申し出を断って、戦闘員たちに向かっていった。

たとえ戦闘員の正体が『ゴースト』だとしても、あたしはここでやられるわけにはいかない。やらなくちゃやられちゃう。もう戦うしかないの。

あたしは戦闘員の相手を三人まとめてした。

もう一匹いたはずの戦闘員は？

しまった、メイド服の女の子のところへ！

助けなきゃと思ったケド、手が離せない。

……あつ、メイドさんが回し蹴りしようとしてコケた。思わず嘔出しそうになったのを堪えて、真顔であたしは戦闘員たちの相手をした。

戦闘員の電磁ロッドを躲して、相手の胸を斬り一匹仕留めた。そのとき、銃声が聞こえた。振り向いて見ると、あのメイドさんが銃を撃つたみたい。

銃を撃たれた戦闘員の様子がおかしい。戦闘員を構成している言語が目にも見えるようになって、壊れた言語が連鎖を起こして、存在が意味を持たなくなる。きっとウイルス弾だと思う。

あのメイドの子……何者なの？

向こうに気を取られているうちに戦闘員の数は増えていた。これってちょっとマズイかも。

戦闘員の腹を抉り、空かさず二撃目で首を刎ねた。

いやん、また血がスゴイ出てる……キモチ悪くてトラウマになりそう。

「危ない避けて美青年！」

誰かがあたしに叫んだ。

すぐに振り向くと、メイドさんが電磁ロッドで殴られていた。

電磁ロッドを喰らったらただじゃすまない。最悪、この世界から消滅する。

ケド、予想を反してメイドさんには別の変化が起こった。身体を覆っていた言語が崩れて、中から男の子が……そんな、まさか？

アスファルトにうつ伏せになった男の子の背中……そんなハズない！

だって、だって彼が……こんなところに……。

あたしは戦うことを忘れて、ただ呆然と立ち尽くした。

「戦いの最中に気を抜いちゃ駄目よ、クスクス」

ハッと我に返ると、あたしの傍らには謎の少女が立っていた。そして、すぐそこまで迫っている戦闘員の大群。

謎の少女が何か呟きはじめた。

この感じはなに？

冷たい風が吹き、謎の少女の髪の毛が揺れた。

なにか……強大な力が……。

「デューウイン！」

謎の少女が囁くと、強烈な爆風が吹き荒れた。それがただの風じゃないことは、見てすぐにわかった。黒い風が意思を持って戦闘員たちを呑み込んで行く。呑み込まれた戦闘員の姿は闇に溶けて見えない。

「キーツ！」

悲痛な叫び声。戦闘員たちを呑み込んだ黒い風は治まることを知らず、物陰に隠れていた一般人や『ゴースト』まで呑み込みはじめた。

「風を止める！」

あたしは怒鳴った。

けれど、謎の少女はただ冷たく。

「なぜ？」

と、言いながらクスクス嗤うだけだった。

「無関係の人たちも犠牲になってるだろ！」

「それがどうかして？」

「どうかしてじゃないだろ！」

「何事にも犠牲は付き物なの。それにこの世界の人たちが消えても、わたしにはなんの関係もないもの」

「……クソッ」

黒い風はあたしたちのところまで迫っていた。

気を失っている『ネカマちゃん』のことを案じて、あたしは彼を抱きかかえてこの場から走り出した。

『ネカマちゃん』をベッドに寝かせて、あたしはその顔を見ようとした。前髪で隠れて顔はほとんど見えない。でも、この下にもしかして……。

あたしが髪の毛を退かそうと手を伸ばすと、後ろから謎の少女に声をかけられた。

「なにをしようとしているの？」

「いや、べつに……」

あたしはすぐに手を引つ込めて『ネカマちゃん』から離れた。

壁に寄りかかりながら、あたしはなるべく『ネカマちゃん』を見ないように、謎の少女とも顔を合わせないようにした。

なぜかあたしの胸は高鳴っていた。

すぐそこにいる『ネカマちゃん』の男の子。雰囲気はぜんぜん違う。でも、あたしが好きだった人に、どこか……似てるの。

想い耽つていると、謎の少女があたしの前に立った。

「貴方、この世界の人間ではないでしょう？」

こんなことを言われたの今日は二度目。

あたしが答えずにいると、ベッドで寝ていた『ネカマちゃん』が目を覚ましたようだった。

「目を覚ましたようだな」

「アナタがアタシをここに？」

彼があたしのことに顔を向けた。ダメ、ちゃんと彼のことを見れない。

「そっだ」

あたしは素っ気無く言っつて顔を逸らした。

「……変態」

謎の少女が突然呟いた。

「アタシのどこが変態なのよ！」

言い返した『ネカマちゃん』。しばらくして、『ネカマちゃん』はハッとして声を荒げた。

「でも、どうして元の姿に？」

そういうことね。自分がメイドさんの姿じゃなくなっていたことに、気付いてなかったのね。

「電磁ロッドによってプログラムが破壊されたんだ」

あたしが教えてあげると、謎の少女がつけ加えた。

「この世界の大半はネット世界の幻影でしかないわ」

わざわざサイバーワールドの説明をするなんて……。話を聞いていると、別世界の住人って……。やっぱり違う世界から来たのね。

謎の少女が『ネカマちゃん』にプレスレッドを渡すと、突然彼の姿が変化した。最初に会ったときの姿。スゴイ、この世界の法則を自由に操れるなんて、いつたいこの人たちって……？

この人たちのことをもつと知りたい。ケド、この少女と関わるのは危険な気がする。なにかイヤな予感がするの。

「オレはもう行く」

あたしは好奇心を抑えて、この人たちと別れることにした。

刀を持って出て行こうするあたしに『ネカマちゃん』が声をかけた。

「待つて、まだ名前も聞いてない」

「お前たちに名乗る名前などない」

こんなこと言っつもりなかったのに、なぜか口から出ちゃった。どうして？

あたしがこんなことを言っっちゃったから、『ネカマちゃん』が食いかかって来た。

「ちよつと待つてよ、アタシ一緒に助けてあげたじゃん！」

「ふつ、オレ一人でもどうとでもなった敵を、お前が勝手に割り込んできてやられたせいで、余計な手間がかかってしまった」

「ヒツドリー！」

なぜだかわからないけど、反発してしまう。憤り、悲しみ、なぜかそんな感情が沸いてしまう。どうして？

わからない、どうして？

あたしが悩んでいると、謎の少女があたしの前に立って、鋭い眼

つきで見上げてきた。

「わたしたちも黒い狼団と戦っているの。どうして貴方は追われていたの？」

「なぜお前たちは奴等と戦う？」

「あたしが会ったナイと何か関係があるのかな？」

「黒い狼団に捕らえられた姉を助けたいの」

「やっぱり。ナイとこの子は双子だったのね。」

「もしかしたら、奴等のアジトで見ているかもしれない……」

「本当なの？」

「奴等のアジトに乗り込んだとき、お前にそっくりな少女を見た。」

「おそらく間違いないだろう」

「その少女はどうなったかしら？」

「さて？ 返り討ちに遭って逃げるのが精一杯だったのでな、どうなったかまでは知らん」

「本当は助けてあげたかった。でも、どうすることもできなかった。」

『ネカマちゃん』が鼻で笑ってる。

「敵のところへ突っ込んでおいて、逆にやられて逃げてくるなんてダッサイ」

トゲのある言い方。とても胸が痛んだ。どうしてそんな言い方するの！

「あたしは思わず睨み返してしまった。」

「またすぐに奴を倒しに行く」

「わたしたちも行くわ」

この少女からは言い知れないなにかを感じる。そして、『ネカマちゃん』の近くにはいられない。『ネカマちゃん』の近くにいと、なぜか心が乱される。

「断る。あのネカマが足手まといだ」

「ネカマじゃなくて、16歳女子高生、名前はレイ！」

「お前に何ができる？ 足手まといの意味を理解できないのか？」

「アタシのことバカにしてるの！ こんな奴と一緒に行くことない

よ、ねっメア？」

こんな言い争いなんてしたくないのに……。  
目を伏せてあたしは一刻も早くここを出たかった。  
なのに謎の少女が引きとめる。

「一緒に行かなくてはアジトの場所がわからないわ」

「オレにはオレの目的がある。お前らと行動を共にするつもりは毛頭ない」

もうなにも聞かない。早くここから出て行こう。

けど、彼の言葉があたしの耳に届いてしまった。

「もう正直に言っちゃうけど、アタシ、アンタのことなんかムカツク！」

涙が出そうなほど悲しかった。それを堪えてあたしは彼を睨んだ。  
「オレの名前はナギだ、その心に刻んで置け」

そして、あたしは彼にある物を渡した。

それが少しでも彼の役に立てばいい。

……さようなら。

あたしは逃げるように部屋を後にした。

また正面から乗り込むわけにはいかないし。

けど、よく考えてみてあたし。一対一でモヒカン野郎と戦ったのに惨敗。ちょー絶望的。

戦闘員たちがいないか確かめながら、あたしは黒い狼団のアジトに向かった。

マンホールの入り口に来てみたけど、戦闘員もいないし、マンホールは開きっぱなしになってた。

ぜんぜん警備が厳重になってみたいだし、それが畏じゃないかって不安になるよね。

マンホールを降りるかどうか迷っていると、誰かに後ろから肩を叩かれて刀を抜こうとした。

「誰だ！」

「ボクですよ、休日の道化師です」

また得体の知れないピエロだ。なんでまだこんなところにいるんだろ。

「こんなところでなにをしている？」

「キミの姿を見つけたから、ちよつと声をかけてみただけです。だってボクたち友達でしょう？」

「……いつから友達になったんだ」

馴れ馴れしいナンパみたいな原理。

「一度会ったら友達ですよー。それになにか困ってるみたいですし、ボクにお手伝いできることがあればなんなりと」

まだあたしはコイツのことを信用したわけじゃないケド、ちゃんと逃がしてくれたし敵じゃないっぽい。

「黒い狼団に捕まってる人たちを助きたい。そして、できることから大狼君を倒す」

「じゃあ、ボクがちよつと暴れてザコたちの気を引きましようか？」

「お前、戦えるのか？」

「そこそこ強いですよ、ボク」

この言葉を信じていいのかなあ。でも、あたし一人じゃまた……。

「わかった、お前を信じよう」

「信じてくれるんですか？　じゃあ、今からボクたちは親友ですね」！

「……それは断る」

「そんなあ。いいこと教えたら親友になってくれますか？」

「なんだ言ってみろ」

「黒い狼団のナンバー2のザキマが大狼君を裏切って、大暴動を起こして組織はボロボロらしいですよ」

ザキマって誰だろ？　もしかしてあのモヒカン？

ケド、そんな情報どこから仕入れたんだろ。やっぱり得体の知れないピエロだ。

仮面を被った顔でピエロはあたしの顔を覗きこんだ。

「これで親友になってくれますよね？」

「断る」

「ええ、それってサギですよー」

聴こえないフリをして、さっさとあたしはマンホールを降りはじめた。

マンホールを降りると驚いたことに、なんとピエロが先にいた。瞬間移動までできるなんて、どんだんこのピエロのことが恐ろしくなってきた。

「さあ、行きましょう」

スキップで走るピエロに置いて行かれないように、あたしは全速力で走った。見た目は軽やかなスキップなのに、異様に移動スピードが速い。

アジトの入り口まで来ると、やっぱり見張りが立っていた。

ピエロは片手を軽く振って戦闘員に挨拶をする。

「こんにちは、見張りご苦労様です」

思わぬ相手の行動に戦闘員の動きが止まった。

その瞬間、ピエロは隠し持てるハズがない巨大なハンマーを大きく振った。

ハンマーに強打された戦闘員は一発で気を失って倒れた。

そんな戦闘員に気を取られていると、もうピエロはハンマーなんて持ってなかった。この世界の法則を最大限に利用できる術を知っているのかもしれない。そうとしか考えられない。

驚きを隠せないあたしを他所に、ピエロは扉の暗証番号を入力していた。そして、扉は簡単に開いてしまったのだ。このピエロにかかれば、なんでもアリみたい。

アジトに入つてすぐ、道は三方向に分かれてる。

「じゃあ、ボクは向こうのほうで暴れてきますねー」

ピエロはさっさと廊下の向こう側に行つて、角を曲がって姿を消してしまった。本当にだいじょぶかなあ？

少し心配だけど、ここまで来たら引き下がれない。

あたしがピエロの消えた方向とは逆に歩き出そうとしたとき、後方から巨大な爆発音が聴こえた。

なに！？

大暴れするって行ってたけど、今の爆発音は異常じゃ……？

また爆発音が遠くから聴こえた。続けてサイレンの音まで聴こえはじめた。急がなきゃ。

ピエロが敵の目を引きつけてるからかな、あたしは戦闘員と鉢合わせしなかった。

たまに戦闘員たちの走る音が聴こえるけど、みんな通り過ぎてどこかに行ってしまう。

順調にあたしがアジトの中を散策していると、最初の目的地にいた。

でも、扉が開いてる？

あたしはいつでも刀を抜く準備をして、暗い部屋の中に足を踏み入れた。

甘い花の香りが微かにする。

やっぱり誰かいる……。

「レイ？」

薄闇の中にいたのはレイだった。

やっぱりあたしがあげたマップを頼りにアジトまで来たんだ。でも、レイしかいないのはなんでだろう。

またレイに会えたのに、あたしはどうしていいかわからず、彼の横を無言で通り過ぎた。

湿ったこの部屋の置くには鉄格子の牢屋があった。中でなにかが蠢いてる。それは『ゴースト』だった。

このくらいの鉄格子なら斬れる。

神速に迫る速さであたしは抜刀した。そして、鞘に素早く戻すと同時に、鉄格子は斬れていた。さすがあたし。

「後はお前たちの自由だ」

後は彼らの意志に任せよう。逃げようと思わないヒトをムリに連

れ出しても意味がない。

あたしはこの部屋を後にすることにした。次はナイを助けなきゃ。  
「待ってよ、どこに行くの？」

あたしの背中にレイが声をかけてきた。あたしは振り返らずに答える。

「大狼君を倒しに行く。そして、ナンバー2のザキマも必ず倒す」  
モヒカンには借りがある。暴動を起こしたっていうから、ここにいない可能性はあるケド、手がかりはつかめると思う。

「タイロウクンって誰？」

まさかそんな質問をされるなんて思わなかった。

「なにも知らずにこの場所に来たのか？」

「何か悪い？」

「狼どもの君主。大狼君とは黒い狼団の団長の名だ」

「つまり諸悪の根源、悪の大魔王ってことね」

「そのようなところだ」

なにも知らずに彼はここまで来たみたい。ナイを助けに来たのはわかるけど、敵の大将くらい知ってていいと思うケド。

牢屋があつた部屋を出ると戦闘員の姿がすぐに見えた。やっぱりピエロー一人で全部引きつけるのはムリみたい。

あたしは二振りの刀を抜いて構えた。

コツチにくる戦闘員のハチマキは青だった。黒よりだいぶ強いケド、あたしの敵じゃない。

あたしは俊足で金属の床を叩き、疾風のような一撃を繰り出した。

一撃、一撃、あたしの繰り出す業は全て止め一撃。

次々と鮮血が壁や床を彩った。自分の血はまだいいケド、人の血って見ると気持ち悪くなる。ウエーッ。

走りながら、足を止めずにあたしは戦闘員たちを倒して進んだ。

後ろからはちゃんとレイが付いてきてる。

……しまった。

敵を倒すのに夢中で道に迷った。ナイを助けに行きたかったのに、

ぜんぜんどこに行ったらいいのかわからないし、大狼君の部屋までわからない。

レイに道を訊いてもわからないと思うし、なんか彼に訊くのはイヤ。道なりに進んでたらだいじよぶかなあ？

あたしが道に迷って走っている最中も、戦闘員の数はどんどん増えてきた。ピエロどうしたんだろ、もしかしてやられちゃった？

ピエロのことを気にかけてる余裕もなくなってきたみたい。

一本道の廊下で挟み撃ちにされた。そこでついにあたしたちは足を止めた。

「お前戦えるか？」

あたしが尋ねるとレイは首を横に振った。

「ムリムリ、銃の弾が切れちゃったんだもん」

換えの弾くらい、なんで持ってないの？

たしか彼の銃ってリボルバーだと思っただケド、リボルバーなんて六発くらいしか撃てないんだから、普通予備の弾くらい持つてるよね。ホント、使えない人。

あたしたちを挟み撃ちにしたのは、赤、青、黄、三種類も揃ってるよお。あともうちよつと色数があれば、戦隊物ヒーローになれるのにな。

レイは役に立ちそうもないから、ここはあたし独りでやるしかない。

「烈風斬！」

烈風のごとく一撃で敵を薙ぎ払う。

「稲妻衝き！」

稲妻のごとく敵を貫く。

「剣の舞！」

……っあ、これ剣じゃなくて刀だ。

戦闘員たちを一掃してあたしたちは先を急いだ。

そして、ナイを助けに行くハズだったのに、大狼君の部屋の前まで着ちゃった。こうなったら先に大狼君を倒すしかない。

「ここだ、この先に大狼君がいる」

あたしは踏み込む合図をレイに送り、重い扉をゆつくりと押した。広い部屋の奥に大狼君はいた。足が伸ばせる椅子に座って、寛ぎながらパソコンなんてやってる。

「また君か……」

長い前髪をかき上げながら、大狼君はあたしたちに顔を向けた。大狼君の片腕が破壊されてる。怪我じゃなくて、破壊って言い方をしたのは、傷口から電気コードみたいのが伸びてるから、大狼君の身体は生身じゃないっばい。この世界で生身って言い方はおかしいケド。

部屋のどこかから少女の声がした。

「早くここから出して頂戴」

ナイの妹だ。水槽の中に閉じ込められてるみたいなのに、ガラス管の向こうに揺らめいている。映りの悪いテレビの中に閉じ込められてるって言うほうがわかりやすいかも。

「ワザと捕まってみただけけれど、どうやらナイはすでにここにはいないそうよ」

声も少しノイズが入ってるみたい。

あの少女を助ける前に、まずは大狼君の相手をしなきゃいけない。腕はどうした？」

あたしが尋ねると、大狼君の口元が少し笑った。

「些細なバグがあつてね、腕を破壊された」

暴動を起こしたザキマにやられたのかも。

腕を破壊され、あたしたちがここに乗り込んだっていうのに、なんだか大狼君の態度は余裕って感じ。どこからかドロップなんて出して口に入れてるし。

ドロップを噛み砕く音が聴こえたケド、それを掻き消すようにこの部屋に大勢の足音が入ってきた。

戦闘員によって出口が塞がれちゃった。もう逃げ場はない。

「逃げ場はないぞ、どうする？」

大狼君に釘を刺された。言われなくてもわかってるって。あたしは二振りの刀を抜いてレイに声をかける。

「戦闘員は任せた、オレは大狼君を仕留める」

あたしは疾風のごとく駆け、大狼君に斬りかかった。

大狼君は手の平をあたしに向けた。それで刀を受ける気なの！？

「ファイアオール！」

呪文のように大狼君が叫ぶと、彼の前にガラスのような『壁』が現れた。壊すしかない！

刃が『壁』に当たると同時にあたしは大きく後方に飛ばされていった。

大狼君がグローブを嵌めた指を鳴らした。

「さて、ゲームをはじめよう」

まるで見えないキーボードを操るように大狼君の指が動く。

急にあたしの身体がむず痒くなった。なぜか風邪を引いたみたい。に熱っぽい。

ヤバイ、ハッキングされてる！

大狼君の動きを止めるため、あたしは一振りの刀を鞘に納め、残る一振りに全神経を集中させた。

刀を地面と平行に構え、切っ先を『壁』に向けて突進した。

切っ先が『壁』に突き刺さる瞬間、鞘の底に手を添えて力いっぱい押しした。

「稲妻衝き！」

刀が大きく撓った。垂直に刀を衝いたつもりだったのに、まだまだあたしの業が未熟だったために、力が外に流れちゃったんだ。

ダメッ……刀が……。

ついに刀は音を立てて折れ、断片が回転しながらあたしの頬を掠めた。

「私のファイアオールは何人たりとも敗れんよ」

大狼君はあたしを見下し、そして動かしていた指を止め、言葉を

続けた。

「君のハッキングは不可能だった。やはり君はこの世界の住人ではないな、でなければハッキング不能の説明ができん」

他人に自分の心を覗かれるなんて、裸を見られるより恥ずかしい。あたしのことをハッキングできないことは知っていた。ケド、もしかして大狼君なら……っていう不安があったの。

ハッキングできないなら恐れることはない。あとはこの『壁』を壊せさえすれば……。

あたしは折れた刀を鞘に納め、もう一振りの刀を抜いた。

「次は必ずこの『壁』を壊す」

「不可能だ。それより話をしないかね？」

あたしにとつて大狼君を倒すだけが目的じゃない。

「なんのだ？」

「『世界』について、ワールドネットワークについて、多元世界のシステムについて、君の知っていることを教えてくれないかね、お嬢さん？」

「……っ！？」

バレてる？

あたしが女の子だってなんでバレてるの？

サイバースコープの下で大狼君の唇がニヤリとした。

「君の本体にはハッキングできなかったが、外装のプログラムにはアクセス可能だった」

「黙れ！」

あたしは無我夢中で刀を『壁』に叩き付けた。何度も何度も斬りかかっても、やっぱり『壁』は傷一つ付かない。

今は誰にもあたしが女の子だって知られたくない。

あたしはレイに視線を配った。戦闘員たちに追いかけていて、あたしたちの話が聞こえている様子はない。ナイの姉もレイを見ている。

切っ先を床に向けてあたしは手を休めた。

「お前はただの破壊者じゃないのか？」

「私はハッカーだよ。それが講じてこの世界の真理を追究したくなつた。調べれば調べるほどこの世界は興味深い……私はこの世界が電影だと知っている」

「もしかして、お前は異世界の住人なのか？」

「そうらしい。ただし、私はこの世界のメモリーしかない。君はどうなんだね、自分の世界のメモリーを持っているのかね？」

「……答えたくない」

あたしは自分の世界の記憶を持っている。あたしは望んでこの世界に来た。大切な人たちの情報を見つけるため、失った人の情報を見つけるため。

大狼君は少し前に出て、『壁』の間近　あたしの目と鼻の先に立った。

「やはり君は私の知らぬ多くの情報を持っている可能性が高い。必ず手に入れてみせる、君のメモリーを」

「ハッキングできないのにどうやって手に入れる？」

あたしは挑発的な態度で言ったあたしを大狼君は嘲笑う。

「方法はいくらかもある。それにはまず君の自由を奪わねば……ッ!?」

言葉は途中で途絶えた。

部屋の中で大爆発が起きた。火薬の臭い……爆弾？

爆発に気を取られてる間に大狼君の姿が消えていた。焦ったあたしは辺りを見回す。

背後から感じる気配。

あたしは抜刀して背後を薙いだ。

振り向いた先に大狼君はいた。あたしの刀は確実に大狼君の胸を割っていた。やっちゃった、訊きたいこといっぱいあるのに……大狼君は跡形もなく消えてしまった。

ケド。

「……クッ！」

あたしの背中に強烈な痛みが走り、バランスを崩して床に手をうついてしまった。

すぐにうつ伏せから仰向けに体制を変えて、刀を謎の敵に向けた。あたしの視線の先に立っていたのは大狼君だった。そんなまさか、だつて身体を真つ二つにして、なんで？

「なぜ消滅していない！」

「君が倒したのはダミープログラムだ」

それを知ったあたしは大狼君に再び刃を向けた。

あたしの突きをいとも簡単に躲す大狼君。でも、逃がしはしない！すぐに刀を薙いで、斬つて、振つて、もお掠りもしない！

あつたま来たから折れた刀を投げつけてやったケド、やっぱり簡単に躲されちゃった。

完全に踊らされてる。このままじゃボロが出ちゃう。あたしはナギ、クールでカッコイイ美形の剣士、華麗に舞つて美しく斬る。

よし、大丈夫！

あたしは気を落ち着かせて再び大狼君に斬りかかる……つもりだったんだけどお。

また大爆発が起きて辺りに煙が立ち込めてしまった。視界を奪われてなにも見えない。

「さあ、少し遊んであげようかしら、クスクス」

煙の中から声がした。大狼君じゃなし、レイでもないし、あたしの独り言でもない。

あの少女が不敵な笑みを浮かべていた。まるで月のような微笑。

冷たい風が煙を掻き消した。

「ディザンド！」

またあの少女が力を使った。

黒い稲妻が宙を奔り、あたしは瞬時に伏せた。

この部屋にある機器が次々と火花を上げてショートする。あんな稲妻に当たったら丸焦げになっちゃう。

稲妻は大狼君に襲いかかろうとしていた。

「ファイアウォール！」

稲妻と『壁』が激突して、閃光が目を眩ます。

ガラスの割れるような音がして、あの『壁』がついに弾け飛んだ。それとほぼ同時に部屋が停電になって、あたしは今しかないと全速力で駆けた。

暗闇の中でサイバースコープをつけている大狼君は、あたしの存在に気付いたように顔を向けた。

あたしの方が早い。

大狼君の胸を平手で突き飛ばし、そのまま地面に叩きつけて馬乗りになった。

部屋の明かりが一斉に点く。

あたしの握った刀の切っ先は大狼君の咽喉を突きつけていた。

「貴様がいなくなればすぐにでも黒い狼団は壊滅する」

あたしはより切っ先を突きつけた。

「ここでやられるわけにはいかぬ！」

大狼君の拳があたしの腹に喰い込んだ。

「クラックパンチ！」

激しい痛みと衝撃がお腹を抉り、あたしの身体は大きく後ろに飛ばされてしまった。

歯を食いしばりお腹を押さえるあたしの視線の先で、すでに大狼君は背を向けて逃げようとしていた。

「次に会うときは両腕で相手をしよう、ハハハハッ！」

大狼君はパソコンの画面に飛び込み姿を消してしまった。

あたしに追い詰められたから逃げたんじゃない。きっとあの少女の力を危惧して逃げたんだと思う。

早く大狼君の後を追わなきゃ……。

あたしはレイたちと顔を見合わせた。独りでも行かなきゃ。

あの画面の先にはどんな世界があるんだろう？

もしかしたら大狼君が罫を仕掛けて待っているかも知れない。でも、ここまで来たら行かなきゃ。

だいじょぶ、あたしなら平気。  
あたしはレイたちを置いて、パソコンの画面の中に飛び込んだ。

## サイバーファントム「Link4ザキマ」

どっかの誰かがアジトに侵入しやがった。さっきからサイレンがうるせえ。

「ったく、そのガキを奪い返しに来たのかよ……。どうしてそんなガキなんて攫ったんだ？」

オレ様は大狼にガンを飛ばしてやった。ったく、いつものことだけどよ、ぜんぜん動じねえーでやんの。サイバースコープのせいであらう。表情も読み取れねえ。

「教える必要はない」

ハッキリ言いやがった。ホントあつたまくるぜ。

オレ様は舌打ちをして床に唾を吐き捨てた。

上目遣いでオレ様は大狼の背中を見た。奴は自分の椅子に座ろうとしてるとこだ。腹いせにオレ様は殴りかかってやった。

「ふざけんなよ！」

背後を向けてても、奴のディフェンスは完璧だった。ファイアウォールに阻まれて、オレ様の拳は奴に届くことはなかった。

ファイアウォールに弾かれてオレ様は床に尻をついた。ったく、やってらんねえ。

大狼は振り返ってオレ様を見下した。

「お前は頭の悪い人間ではないはずだ。だが、すぐに頭に血を昇らすためにバカに見える」

「ケツ、オレ様を怒らせたのはどこのどいつだよ？」

「私だとも言いたいのか？」

「そうだ、他に誰がいる！」

「そんなに彼女のことを知りたいのか？」

そう言っただけで大狼はガキに顔を向けた。奴が自ら攫ってきたガキだ。カワイイ顔した少女だけど、もしかして大狼の奴ロリコンだったのかよ？

オレ様はガキを舐めるように見た。

「このガキに何ができるんだよ？」

「ガキ、ガキってうるさいんじゃないやポケット！」

ガキが言い返してきやがった。顔に似合わず口が悪いなこのガキは。

オレ様はガキをぶん殴ろうと拳を上げたが、その拳を大狼が抑えやがった。

「やめておけ、少女を殴る気か？」

「この世界で大事なものは見た目じゃねえ、中身だ」

「では、彼女がもし本当に少女であれば殴らないか？ 彼女の正体は何だと思う？」

そんなの簡単だ。ハッキングすりやすぐにわかる。

オレ様はポケットからステッカーを取り出し、ガキのおでこに叩き貼ってやった。このステッカーはオレ様の特別製のプログラムだ。これを対象物に貼り付ければ、ハッキングは簡単になるって代物だ。簡単に言えば相手の中に侵入する入り口を作るってことだな。

「ウチに何する気？」

ガキは喚いて、両脇にいる戦闘員を振り切って逃げようとする。だが、ガキの首にはプログラムを制御する首輪がついている。これをつけられたら誰だって本来の力が出せねえ、オレ様だってムリだ。

オレ様がジャケットの胸ポケットからサングラスを出して掛けた。サングラスのレンズにパソコンの画面が映し出される。これの制御は手に嵌めたグローブで行なう。

そこにキーボードがあるように、空気の上でブラインドタッチする。知らない奴が見たらピアノでも弾いてるみたいな格好だ。

オレ様はさっそくガキの中に侵入しようとした。

「……そんなバカな」

思わず口に出しちまった。

大狼の口元がオレ様を嘲るように笑いやがった。

「どうした？ 彼女の正体はわかったか？」

「……っ、もう少し待ってる！」

「待つのは構わんが、ハツキングできる見込みはあるのか？」

「……………」

ねえーな。このガキはここに存在してない。目で見えるのに、プログラム上はそこに存在してない。ないモノのハツキングなんてできねえ。

オレ様はサングラスを胸ポケットにしまった。これ以上やってもムダだ。

大狼の野郎はいつの間にかリクライニングチェアに座って寛いでやがる。

「彼女はこの世界の住人ではない。事例は少ないが、たまにそういう者がこの世界に紛れ込むのをお前も知っているだろう？」

「ああ、ハツキングできねえ奴がいるのは確かだ。けどよ、この世界の住人じゃねえってのは、まだ信じてねえぞオレ様は」

たまに大狼はたわ言を抜かしやがる。この世界は現実じゃねえなんて言うんだ。オレ様はここに存在してるし、自分の意思で動いてる。どこが現実じゃねえって言うんだよ？

オレ様はガキの顎を掴んで顔を真正面に向けた。

「オイ、てめえ本当にこの世界の奴じゃねえのか？」

「バカに説明したくない」

「バカとはなんだてめえッ！」

「バーカ！」

ガキが蹴り上げた爪先がオレ様の股間に当たった。

「うっ……………」

すぐに反撃してやりたかったけどよ、痛みでそれどころじゃねえ。

「てめえぶっ殺してやる！」

クソッ、声を絞り出すので精一杯だぜ。

痛がるオレ様を見ながらガキは舌を出してあっかんべーしゃがった。あとで絶対殺してやる。

オレ様の痛みが引いてきたところで、大狼が呟いた。

「そろそろ来るな」

アジトに侵入した美男子が、ここまで着やがったようだ。壁に取り付けられた65V型の液晶に美男子の姿を映し出される。なかなかハデに暴れてやがるぜ。

おっ、ついにこの部屋の前まで着やがった。

部屋の扉をハデに開けて美男子が飛び込んできた。

オレ様は液晶ディスプレイから、本物の美男子に顔を向けた。

「ケケケケツ、よく来たな美男子さんよ」

楽しくなりそうだぜ。

大狼が戦闘員に命じる。

「ナイを隔離フォルダに入れて置け」

「キーツ！」

戦闘員から逃げようとガキが暴れる。

「ウチのこと放せつてば！ このエツチ痴漢変態！」

ガキがいなくなったところで、大狼が美男子に顔を向けた。

「色々取り込んでいる最中だったので失礼した。さて、君の用件を聞こうじゃないか？」

「なぜお前はこの世界を破壊しようとしている？」

大狼が口を開く前にオレ様が言っただけだ。

「そんなの楽しいからに決まってるだろバーカ！」

「お前になど聞いていない、オレは大狼君と話しているんだ」

「ケツ、大狼君、大狼君ってオレ様のことはほったらかしかよ気に食わねえ」

「それでもオレ様はナンバー2だぜ。いつか必ずオレ様がナンバー1になってやる。」

壁に寄りかかって見物でもさせてもらうか。

おっ、大狼が立ち上がったぞ。いつにヤル気か？

「最初は、破壊そして、創造を楽しんでいるだけだった。しかし、私はいつしかこの世界の真理を追究していたのだよ。などと言って君には理解できないだろうがな。君はなぜ私に会いに来た、ただ

私を倒すためか？」

「それもある。だが、オレがこの世界に来たのは情報が欲しかったからだ。この世界にある膨大な情報にアクセスできるお前の力が必要だった」

「引つかかる言い方をしたな。貴様、この世界の人間ではないな？」

あの美男子もかよ。たまにしかいねえハズなんだけどよ、こうも簡単に現れると、ホントは結構いるんじゃないかと思うな。

おっ、来た来た。やっと来たぜ。

戦闘員どもが部屋に流れ込んできた。

「袋のネズミだな、ケケケツ」

どうする美男子さんよ？

大狼が戦闘員どもに合図を送った。

「デリートするな。その男には聞きたいことがある、生け捕りにしろ！」

「キーツ！」

やっとはじまったぜ。だがよ、戦闘員どもにこんな楽しいこと持っていかせねえぜ。

「待ちな！」

オレ様は大きな声で戦闘員どもを止めた。

「オレ様にやらせてくれよ」

顔を向けると大狼は頷きもせず言った。

「好きにしろ」

それだけ言ったら、すぐにリクライニングチェアに座ってパソコンをはじめた。

さてと、楽しませてもらうか。

「可愛がってやるぜ美男子さんよお」

「刀の錆にしてやる」

「ケケツ、やれるもんならやってみな！」

刀の錆か……ならこっちはアイアンクローで返り討ちにしてやるぜ。

「十字斬り！」

なかなかのスピードで二刀流がオレ様に襲い掛かってきた。だが、まだまだだな。

ギンギンに金属音を鳴らしながら、二発同時にクローのツメ受けた。

クソツ、コイツ刀に力入れてやがる。こつちが刀を受け止めたはずが、こつちの動きも止められてるぜ。

ガチガチ刀とクローが歯軋りをする。

別の手で行くしかねえな。実際、出すのは足だけだよ。

オレ様は足の裏で美男子の腹を抉った。

「クツ！」

歯を食いしばった顔もいい顔してるぜ。

こいつがよろめいた隙にオレ様は『隠しフォルダ』からエレキギターを出した。戦闘仕様の特注だ。

立ち上がるうとした美男子の顔を、エレキの側面でぶん殴ってた。った。

ケケツ、痛そうな顔して転げまわってやがる。

続けてこいつの背中にクローを振り下ろしてやった。

背中が抉れ血が吹き出した。

ここで止めを刺してやる。

「骨のねえ奴だ。もう飽きたぜ！」

膝を付いて立ち上がるうとする美男子の前に立って、オレ様はエレキを掻き鳴らした。

ソウルのこもったガンガンの演奏を聴きな。

エレキから発せられた電磁パルスが美男子の自由を奪う。

安心しな、最低出力だ。ちよつと身体が動かなくなるくらいだ。

ここまで攻め込んできたわりには呆気なかったな。

戦いが終わったとここで大狼が口を開く。

「留めは刺すな。口が聞けるようになるまで隔離フォルダに入れて置け」

「キーツ！」

戦闘員どもが美男子を連れて行く。

この部屋に残ったのはオレ様と大狼だけだ。

「これからどうする大狼？」

「被害状況を確認。ナイから情報を聞き出す。あのサムライが口を聞けるようになったら情報を聞き出す」

「情報はオレ様が聞き出す」

「私がやる」

「情報を独り占めする気かよ？」

「この世界は情報が全てだ。情報を制するものがこの世界を制するって言っても過言じゃない。」

「情報を独り占めしたいのは貴様だろう」

「……ケツ」

大狼が動く前にどうにかしてやるぜ。

いつまでもナンバー2に甘んじてるオレ様じゃねえ。

オレ様は大狼に背を向けて部屋をあとにした。

大狼の野郎より先にガキから情報を聞き出してやる。まずは大狼に気付かれねえように、監視カメラに細工をしなきゃいけない。このアジトのシステムは全て大狼が握ってやがる。ちよつとでもしくじればすぐにアウトだ。これまで何度かシステムにアクセスしてやろうとしたが、危なくなつて大狼にバレる前にやめた。

今日こそ絶対防犯システムをクラックさせてやるぜ。

さつそくオレ様がシステムにアクセスしようとしたときだった。サイレンがガンガンに響いた。今度は誰が来やがった？

共有システムにアクセスすると、廊下で爆発があったらしい。だが、防犯カメラに人影は映ってない。オレ様でもムリだった防犯システムの改ざんをしたのか？

そんなバカな、オレ様にできないことを誰ができる？

できるとしたらシステムを握ってる大狼くらいだ。けどよ、大狼

がそんなことをして何の意味がある？

オレ様を欺くためか？

ヘッドフォンに大狼からのボイスチャットが入った。

《侵入者だ》

「防犯カメラには映ってないぜ？」

《X - (存在 + 事象) 〓 原因だ》

「なるほどな」

《それに防犯システムには引つかからないが、戦闘員たちの視覚なら捉えられるらしい》

作戦変更だ。この混乱に乗じない手はないな。

「オレ様もその侵入者とやらを探すぜ」

《好きにしる》

一方的にボイスチャットを切りやがった。

はじめっから侵入者探しなんてする気なんてねえ。オレ様の目的はあのがキだ。

爆発音が聴こえた。侵入者はなかなかハデにやってくれてるらしいな。

もうコソコソやる必要はないな。オレ様は決めたぜ、大狼とおさらばするときが来たみてえだな。

オレ様は自室を飛び出して隔離部屋に向かって走った。

戦闘員どもは大慌てだな。おつ、また爆発音が聴こえたぜ。

防犯カメラに映ってることも気にしないで、オレ様は隔離部屋のドアを蹴破った。

ロッカーの形に似たフォルダが並んでやがる。ここに美男子とガキが入れられてるハズだ。

開いてやがる。美男子が入ってるハズのフォルダが開いてやがるぜ。謎の侵入者が逃がしたに違いねえが、ここまで開けやがるとはな……。

侵入者がどんな奴か興味が湧いてきたぜ。

「そこに誰かいるんでしょ、ここ開けるバーカ！」

あのガキの声だ。美男子は逃げたつてのに、こいつは置いていかれたらしいな。

オレ様はガキの入ってるフォルダを蹴っ飛ばした。

「オイ、オレ様がここから出してやるうか？」

「早くだしてよ！」

「おう、今出してやるよ。けどよ、自由にはしないぜ」

「ハア？」

「オレ様と一緒に来てもらうってことだよ」

フォルダのカギはあらかじめ登録した人間しか開けられない。それはここをオレ様が開けた途端、大狼に裏切りがバレってことだ。

そんなこと気にしちやいねえ。オレ様はフォルダを勢いよく開けた。

その瞬間、ガキがオレ様に飛び掛って来やがった。

「クソ、何しやがる！」

「よくもウチをこんなところに閉じ込めて、とにかくシネ！」

「クソガキがつ！」

オレ様の首を絞めるガキを振り飛ばして、すぐにポケットからある物を取り出した。小さなボタンのついたスイッチだ。

嫌たらしい顔でオレ様は勝ち誇った。そしてボタンを押した。

「イヤーツ！」

ガキが悲痛な叫びをあげて地面に両手をついた。身体は振るえ、今にも口から泡を吐いて死にそうだけ、ケケツ。

これは拷問具のスイッチだ。ガキが首につけてる装置は力を抑制するほかに、このスイッチで電磁パルスを発生させてガキの身体に電流を流す。今は手加減してやったが、やろうと思えばすぐにも殺せる。

オレ様がスイッチから手を離すと、ガキは震える身体を押さえてオレ様を睨みやがった。

「シネ、このモヒカン野郎！」

「まだ威勢たつぷりだな。まだまだ電流が物足りないか？」

「……バカ、シネ、この変態サディスト！」

オレ様は鼻で嘲笑ってまたスイッチを入れた。

すぐにガキは床でのたうち回って悶絶する。苦しそうな顔して  
るぜ、ケケツ。

スイッチを切ると、床にうつ伏せになって息を切らせてやがる。

「大人しくオレ様の言うことを聞くんだな」

「変態ロリコンの言うことなんか聞くもんか！」

「強情なガキだ」

「ガキはお前のほうだ。ウチのこと甚振って、そんなに楽しいの？」

「うつせいガキ！」

すぐにまたスイッチを入れた。今度は少し出力を上げた。

床をバウンドして振るえてやがる。

あんまりやりすぎるとメモリーに障害が出るからな、このくらい  
にしといてやるか。

これだけやったのにまだ意識があるなんてな。それにこの姿が偽  
りだったら、とつくにそれが剥がれてるはずだ。この姿が何も偽っ  
てないこいつの本当の姿ってことか？

オレ様はガキの腕を掴んで無理やり立たせた。まったく力が入ん  
ねえみたいで、オレ様が手を離したらすぐに倒れそうだ。

「オレ様はここから逃がしてやるって言った。大人しくしたらど  
うだ？」

「ここから逃げても捕まったままじゃ意味ないじゃん。ウチにとっ  
ては何も変わらない」

「オレ様には意味があることだぜ、いいから来やがれ」

こいつを連れ出せば大狼に一泡噴かせられる。ついでにこいつの  
持つてる情報とやらも手に入れてやる。

力の入らないガキを引っ張るのは簡単だった。抵抗されでもした  
ら、このアジトから出る前にメンドクサイことになるからな。

まずはこのアジトから逃げ出して落ち着けるとこに行こう。

オレ様は緊急用の脱出通路に急いだ。

秘密の扉を開けると、そこには逃亡用の乗り物が置いてある。

バイクに車に、早い話が駐車場だな。

オレ様がどれで逃げるか選んでいると、柱の影から誰かが出てきやがった。

「どこに行くつもりだザキマ？」

大狼の野郎だった。オレ様の計画に勘付いて先回りしてやがったのか。

「オイオイ、こんなところ油を売ってていいのかよ。謎の侵入者はどうなった？」

「アジトは他にもある、ここを壊滅されても私は一向に構わんよ。

それよりも、私にはナイが重要なのだ」

「このガキがそんなに大事かよ？」

「大事だ。それ以上のことを裏切り者の貴様に教えてやる道理はない」

「教えてくれなくてもいいぜ。あとでガキに吐かせるまでだ」

オレ様はガキを床に寝かせた。弱って逃げる気配もないが釘を刺しておくか。

「逃げてもムダだぜ、このスイッチの電波はどこにでも届く。そこで大人しく休んでな」

細かく言うとケータイの電波が届くくらいの場所だけだよ、そんなこと教えてやる必用はねえ。

大狼は指を鳴らして戦いの準備をしてやがる。オレ様もサングラスを掛けて、隠しフォルダから出したアイアンクローを両手に嵌めた。

「今日は負ける気がしねえ。どっからでも掛って来いよ、大狼！」

「貴様は私に指一本触れることも適わんよ」

「言ってくれるじゃねえか！」

「てめえの時代はここで終わるんだよ！」

このクローで引き裂いてやるぜ。

大狼がプログラムを使う。

「ファイアウォール！」

今日こそこの壁を乗り越えてやる。

オレ様はファイアウォールにステッカーを貼り付けて飛び退いた。すぐにステッカーは爆発した。

煙の中で大狼の声がした。

「確率的に不可能なことをなぜする？」

「……………なっ！」

大狼はオレ様の背後にいた。

「クラッシュパンチ！」

奴のパンチがオレ様の背中にヒットして爆発した。

背中を焼かれ吹っ飛ぶオレ様。まったくカツコ悪いぜ。

振り返ると同時にオレ様はエレキを出した。

すぐ目の前にいる大狼に電磁パルスを食らわせやるぜ。

オレ様は弦がはち切れるくらいエレキを掻き鳴らしてやった。

大狼の動きが一瞬グラついた。けど、それも少しの間だ。奴はそのままオレ様に襲い掛かって来やがった。

「その程度の小細工、私に通用すると思っただか」

チツ、やっぱアースで電流を逃がしやがったな。けどよ、動きが少し止まったところを見ると効果はゼロじゃねえらしいな。

大狼の電気コードの鞭がオレ様に襲い掛かってくる。オレ様はそれを素早くかわし、エレキを掻き鳴らした。今度は長い演奏だ。

「鞭の動きが鈍ってるぜ大狼」

「電磁パルスを使えるのは貴様だけではないぞ」

なんだと？

グオオオオン！！

大きな口を開けて大狼が咆哮をあげた。まるで巨獣みたいな声だぜ。

声は電波の並になって俺様に襲い掛かった。

オレ様の耐電が保つか……………。

「クッ！」

電気を帯びたオレ様の身体から小さな火花が出た。身体の表面のプログラムが少しやれたみたいだ。つたく、大狼があんなプログラムの使えるなんてはじめて知ったぜ。

こんな戦い方じゃいつまで経っても大狼を倒せねえ。物理攻撃でクラッシュさせるしかねえな。

オレ様はクローを構えて大狼に飛び掛ろうとした。だが、オレ様の目は別のところに奪われた。

「あのガキ、逃げる気だ！」

その言葉に大狼の目もガキに向けられた。

よるめきながら逃げようとするガキに向かって大狼が駆け寄る。

オレ様は近くにあつた車に乗り込んでエンジンを掛けた。

こうなつたら大狼との勝負はお預けだ。

アクセルを叩き踏み、ハンドルを切つてガキに向かって車を走らせた。

すぐ近くにいた大狼を轢くつもりで突っ込んだ。

「死ねーッ大狼！」

間一髪ここで奴は車をかわして地面を転がった。

オレ様はガキの真横に車を走らせて、ハンドルから手を放してガキの腕を引っ張り、そのまま身体を抱きかかえて助手席に放り投げた。

「きゃっ！」

ガキが顔を歪めながら短く悲鳴をあげた。

このまま逃げるしかないな。

オレ様がドアを閉めようとしたとき、追つて来た大狼の手が運転席まで伸びてきやがった。オレ様は構わずドアを閉めてやった。

大狼の口元に明らかかな苦痛が浮かんでやがる。だが、奴はオレ様の腕を掴んで放さない。車は奴の身体を引きずりながら進んだ。そのまま駐車場を出て道路に出た。

「ザキマ、許さんぞ！」

「このガキはもらつていくぜ」

運転席のドアを一度開けて、大狼君の身体に蹴りを入れてやった。だが、それでもしぶとくオレ様の腕を掴んで放さねえ。

今度はドアを強く締めて大狼の腕を挟んでやった。それでも大狼は引かねえ。それどころか、手はオレ様の首を絞めてきやがった。

「オレ様の首から手を……放しやがれ！」

オレ様は車のハンドル切って、ガードレールに大狼をぶつけた。何度も、何度も、何度もぶつけてやった。

ドアに挿まれた大狼の肩から火花が出た。外装の下から電気コードが見えてやがるぜ。こいつ身体の中までサイバーなのかよ、ぶっ飛んでやがるな。

あと少しで大狼の肩が引き千切れそうだな。ならこれで最後だ。

「あばよ大狼！」

オレ様は再びドアを開けてすぐに力強く閉めた。挿まれた大狼の肩が断絶され、奴は道路の上を転がって車の遥か後方だ。

一対一の勝負には負けたが、ガキはもらってくぜ！

車はグングン進んでアジトから離れていった。いくら距離を稼いでも大狼のことだ。すぐにネットワークを使ってオレ様たちの居場所を突き止めるだろうよ。

「ん……うん……」

今まで気絶してやがったガキが目覚めたらしいな。

「やっと目が覚めたかクソガキ」

「……クソガキ……ウチはクソガキじゃない。マジムカツク」

「約束どおりちゃんとあの場所から連れ出してやったぜ」

「アンタに捕まってるんじゃない意味ないじゃん。あそこにいた方がまだマシだったもん」

「かわいくねえガキだ」

「まったく大狼の野郎、こんなガキがからどんな情報を手に入れようとしてたんだ？」

見た目に騙されるな。これは常識だ。

ネカマ、ネナベなんていうのは山ほどいる。このガキの正体はなんだ？

「オイ、ちよつとこつち向け」

「なに？」

ガキがこつちを向いた瞬間、オレ様はガキのおでこにステッカーを貼り付けた。

「イタッ」

「別に痛くないだろ」

「痛いつていうのは条件反射だもん。いちいちつっこまないでよ」

片手でハンドルを操作しながら、もう片手でオレ様はハッキングを開始した。

「畜生、アクセスできねえ」

やっぱりムリだ。ファイアウォールでも、免疫でも、そういうのが邪魔してるわけじゃねえ。このガキはここに存在してない。

「ウチのことハッキングするつもり？」

「うっせえ」

「どーせできなんいんだから諦めたらー？」

「うっせえ」

「どうしてできないか知りたくない？」

「知りたくねえーよ」

知りたくて堪んねえけど、ガキに媚びるなんてできるわけねえだろ。

ポケットに入って潰れた煙草の箱を出した。

「つつたく」

煙草が切れてやがる。イライラしてくるぜ。

オレ様のイライラが伝わったみてえで、横でガキが笑ってやがる。

「本当は知りたいんでしょ？」

「知りたかねえよ！」

「そうやって怒鳴るところが怪しいんだから、えへへ」

「笑ってんじゃねえぞクソガキ！」

ホントは拷問具のスイッチ入れてやりてえが車中だ。  
これ以上、車を走らせても意味がねえ。

カラオケボックスの駐車場に車を停めて降りて、助手席のガキを引つ張り出した。

「オイ、行くぞ」

「カラオケ行くの？ ウチ歌うの大好き！」

「勘違いすんなよ」

「てめえみたいなガキと誰が歌いにくるかよ。ここが一番話をするにはいいんだよ。」

オレ様たちはカラオケボックスに入って、店員に個室まで通された。

店員がいなくなったのを見計らって、ガキを蹴飛ばして座らせる。  
「てめえの知ってることを全部話な」

「知ってることって言われても、何話していいかわかんないもん」

「大狼はなんででてめえを攫った？」

「さあ？」

「ふざけんじゃねえぞ！」

オレ様はポケットに手をつ込んでスイッチを押した。

電流に悶えるガキの悲鳴が個室に響く。だが、部屋の外にはバレーねえ。

スイッチから手を放すと、ガキはオレ様を睨んできやがった。

「アンタたちが知らないことなんて山ほどあるもん。それをみんな話せっていうの？ バカじゃないの、アナタたちの一生じゃ到底話しきれない」

「ハア？ いいから話せよ」

「もっと具体的に話題を絞ってよ。なんか質問とかないわけ？」

「じゃあ……あれだ、てめえをハッキングできない理由を教えろよ」

この話の流れなら別に質問しても恥ずかしくねえよな。

「そんなの簡単じゃん、ウチがこの世界の住人じゃないから」

「何意味わかんねえこと言ってるんだよ」

「この世界の住人たちはみんなプログラム。住人たちだけじゃない、そこに置いてあるマイクだってそう。ウチは違うの、この身体を構成しているのはプログラムじゃない、ただそれだけのこと」

そんな話信じられるかよ。

ガキがオレ様の顔を見つめてやがる。

「信じられないの？」

心を見透かされたような言葉だ。

「おう、信じられるかよ。だったらでめえは何者なんだよ？」

「ドリームワールドが生み出した存在」

「ハア？」

「ワールドっていうのはね、このサイバーワールドだけじゃないってこと。それにサイバーワールドっていうのは総称で、サイバーワールドはいくつも存在してる。今ウチらがいるのはそのひとつ」

「いくつも存在するってえのは、パラレルって意味なのか、それとも外国みたなものなのか？」

「両方。ワールドネットワークはウチらが計り知れないほど複雑なの。ただひとつ言えることは、アンタは思念体ってこと」

思念体って幽霊ってことか？

オレ様はここにいます。自分で考えて行動することもできる。

大狼のたわ言が脳裏を過ぎる。この世界は現実じゃないってな…

…

「だったらオレ様はなんだ？」

「誰かの想いか、それともホームワールドに本人がいるんじゃないの？」

「？」

「ホームワールドって何だよ？」

「ホームワールドってゆーのは、個々に与えられたワールドのこと。だから、例えばAっていう人間がいたら、A本体が主観の世界が存在してるわけ。Bの世界にもAはいるけど、あくまでAじゃない。A、なわけで、ホームネットワークを介しての存在なわけ。Bの世界にいるA、はAの一部であり、その一部であるA、を見るB

によつて、A'のディテールが創想され、Aと誤差のあるA'が生まれる。Bの世界にあるAのフォルダにAの情報が蓄積されていく。そして、そのフォルダから『世界の中心』に情報が配信され、真世界が構築される」

「一気に話すんじゃねえよ」

「だつたら休憩して一曲歌おうよ」

何考えてんだコイツ。自分の立場つてもんがわかつてねえのかよ。途中で休憩なんて入られるかよ、いつ大狼が来るかわかんねえんだからな。

「話を続ける」

「いくつもあるパラレルワールドの情報が集約されている世界が真世界。パラレルワールドで存在が消えるたびに、真世界での存在が薄れて逝く。真世界での死は、すべてのパラレルワールドに影響を与え、全ての消滅を意味する。例外として、真世界での存在が消えても、強い想いにより、パラレルワールドまたは他のワールドで生き残ることができる。また、本体のいるホームワールドでの死もホームネットワークに影響を与える。その場合、普通なら別のパラレルワールドにいる自分に本体としての資格が受け継がれるわけんだけど、たまにバグがあつたりして。バグと言えば、なんらかの事故でホームワールドから弾き飛ばされる場合がある。簡単にいうとホームネットワークから遮断されて、存在が認識されなくなるってこと」

やっぱり話が長い。それに言つてることの半分も理解できねえ。違うな、言つてすることはまあまあ理解できるけどよ、信じられない話をされても理解しようと思味噌が働かねえだけだ。

「そんなことよりも、オレ様たちが今いるこの世界はなんなんだよ？」

「だからー、個々のホームワールドの思念が集まって創造されたワールド。このワールドは誰が主観つてわけじゃないの、だつてみんなの想いが集まってできた場所だから」

だったらやつぱりオレ様はなんなんだよ？

幽霊、電影、思念？

オレ様は偽者なのか？

「信じられるかよ、んなこと」

「信じるも信じないもアンタ次第、好きにすればいいじゃん」

もし、このガキが言ってることが本当なら、オレ様が本物になりたい。

大狼も同じこと考えているのか？

わかんねえ、奴の腹ん中はイマイチわかんねえ。奴は何を求めているんだ。このガキを攫った理由は、こんな話を聞きたかったに違いない。だったら聞いてどうする、何がしたい？

「大狼の野郎がなんでてめえを攫ったか本当に知らねえのか？」

「さあ、アンタと同じような話が聞きたかったんじゃないのー」

「てめえ、違う世界から来たんだろ。だったらオレ様も別の世界行けるのか？」

「世界を渡れるのは特別な存在だけ。誰でも渡れる方法もあるかもしれないけど、そこまでウチは知らない」

オレ様は別の世界に行きたい。この目で確かめたい。

そして。

「もしオレ様の本体って奴のホームワールドがあったとして、そいつとオレ様が入れ替わることは可能なのか？」

「さっきも話したけど、Aが死んだら別のA、がAになるの。そういうシステムだから、それを上手く使えばできないこともないんじゃないの？」

「だったらオレ様が本物になってる」

「本物ねえ……。このワールドで生まれたアンタにとって、ここが現実でアンタが本物だと思うけどなあ」

そうだ、オレ様は本物だ。けどよ実感が無い。実感を得たい、自分自身の存在を証明したい。

オレ様はポケットから煙草の箱を取り出した。そうだ、煙草は切

れてたんだ。つたくやつてらんねーな。

「オイ、煙草買いに行くからついて来い」

「なんでウチまで行かなきゃいけないの？」

「てめえ自分の立場がわかってねえのか！」

イライラでオレ様は拷問具のスイツチを押しした。

苦しそうな顔をしてガキはソファの上から落ちた。ケツ、クソガキが。

ゆっくりと両手を付いて立ち上がるうとしているガキが、オレ様の顔を見上げて笑った。

なんだよその笑みは？

次の瞬間、個室の中に戦闘員が飛び込んで来ていた。

畜生、オレ様が戦闘員にやられればいいと思って笑ったのかよ。

だがな、こんなザコにやられるオレ様じゃねえ。

すぐにアイアンクローを装備して戦闘員を八つ裂きにした。逃げようとしたもう一匹も背中から切り裂いてやった。ざまあ見る。

ここに来た戦闘員はみんなやった。問題は次がまたすぐ来るだろうってことだな。

「行くぞクソガキ」

「どこまで逃げる気？」

「体制を整えるまでだ。そしたら大狼の野郎をぶつ潰しに行く」

オレ様はひらめいた。この世界で逃げてつたつてすぐに大狼に見つかる。さっきのガキの話がヒントになつたぜ。

……別の世界に逃げればいい。

途方もなく広い荒野を歩き、岩場まで来たオレ様たちは休憩することにした。

岩を椅子代わりにしたオレ様の前には、白いロープを来たガキの姿がある。クレリック系のジョブがする格好だ。

オレ様はダークハンドつてジョブにした。モンク系のジョブでクラスチェンジすれば使用可能になる。最高位のジョブじゃねえが、

気にいったからこれにただけだ。常に上半身裸ってのは寒いけどな。

もちろんチートでジョブチェンジした。パラメーターも最大値まで上げたから、ダークハンドは見た目だけで、中身は最強のプレイヤーってわけだな。

「こんなゲームに逃げ込んでどうする気？」

ガキがオレ様に尋ねてきた。

「このゲームには、このゲームのルールがある。たとえ大狼だろうが、このゲームのルールには逆らえねえはずだ」

そこにオレ様の勝機がある。

オレ様たちが逃げ込んだのはネットワークRPGの世界だ。プレイヤーが冒険したり、プレイヤー同士でコミュニケーションしたりする。人との馴れ合いが楽しくてやってる奴もいれば、ひたすらモンスターばかり狩ってる奴もいる。ゲームの内容はプレイヤー次第ってわけだ。

オレ様たちがここに来てだいぶ時間が経ってる。まあ、それもゲーム内での時間だけだな。何度か日が暮れて、朝を何度か迎えた。モンスターとも戦ったし、ウザイプレイヤーも殺してやった。

……ん？

岩が動いたような気がするぞ。おっ、どうやらモンスターのお出ましみたいだぜ。

現れたのは石の身体を持ってやがるゴーレムだ。

オレ様はすぐに両手に装備してるクローでゴーレムを殴りつけてやった。

粉々にぶっ飛ぶゴーレム。一発で終わりかよ、呆気ねえな。

ゴーレムをぶっ倒したオレ様にガキが口を出してきやがった。

「そんな派手にチートして運営側に気付かれるんじゃないの？」

「アカウントでも停止されるってか？ やれるもんならやってみるってんだ」

「ウチのパラメーターも上げてくれればいいのに」

「強いのはオレ様だけでいいんだよ」

近いうちに大狼はここに来るだろうよ。チートで最強になっただけじゃ奴には勝てない。何かいい手を捜さなきゃいけねえな。

「またモンスターだよ」

ガキに言われてオレ様は振り向いた。

「どこにもいねえぞ？」

クソガキ、オレ様をからかいたのか？

「うおっ！」

本当にいやがったぜ。

今度のモンスターは『影』だ。厚みのない薄っぺらな野郎だ。

さっさと片付けてやるうとオレ様はクローを振りかざした。だが『影』はそれを受け止めやがった。そして、驚くオレ様の胸を長い爪で切り裂きやがったんだ。

「クソッ」

今のオレ様は最強のはずだ。なのになんでこの野郎は……わかったぞ！

『影』をよく見ると、それはオレ様だった。この『影』のモンスターは、プレイヤーのステータスをパクリやがるんだ。つまりオレ様が今戦ってるのは、オレ様自信ってわけだ。

こんな野郎と真っ向からやり合って堪るかよ、冗談じゃねえ。

裏技を使うしかねえな。

オレ様は『影』に向かつてステッカーを投げつけた。ゲームのプログラムそのものを壊してやる。

ハッキングしてクラッシュだ。

オレ様は架空のキーボードを叩き、この『影』のプログラムに侵入した。そして、あとはヒットポイントをゼロにすればおしまいだ。『あばよ』

ヒットポイントがゼロになった『影』は呆気なく消滅した。

この辺りはこんなモンスターまで出やがるのか。さっさと別の場所に移動したほうが良さそうだな。

「行くぞクソガキ」

「はいはい。でも、アレはいいの？」

「あれって何だよ？」

「アレ」

ガキの指さしたほうに視線を向けると、崖の上に立っている人影が見えた。

「ケケツ……予想よりも早いな」

オレ様の心が躍った。奴が来た。

「私から逃げられると思ったかザキマ」

崖の上に立っていたのは大狼だった。あんな高い場所に立ちやがって、オレ様より高い場所に立つんじゃないよ。

「逃げられるなんて思っちゃいねえよ。てめえを待ってたんだぜ」

「私をここで倒す気か？ それができるのか貴様に？」

「さてな。けどよ、このゲームにはルールがある。てめえの力はこのゲームのルールに縛られるんだ」

「それは貴様とて同じだろう」

「そうだ、条件は同じ。キャラのパラメーターにも上限がある。あとはプレイヤーの腕しただいぜ」

「なるほど」

深く頷いた大狼が崖を飛び降りて来やがった。おいおい、よくあんな高い場所から飛びやがったな。

オレ様と大狼が向かい合った。

この世界では死んでも町に戻されるだけだ。普通に大狼を殺すだけじゃ意味がねえ。このルールに乗っ取りながらも、ハッキングを使ってやり合う必要がある。大狼そのものをデリートしなきゃなんねえってことだ。

「行くぜ大狼」

「いつでも掛って来るがいい」

そういう余裕な態度が腹に来るぜ。

大狼が握ってるのは金属の鞭か、中距離攻撃だな。オレ様はクロ

「だから鞭より踏み込む必要がある。けどよ、攻撃力と小回りはオレ様のほうが上だ。」

生き物のように動く鞭の猛攻をかわしながら、オレ様は大狼の懐に飛び込んだ。このまま腸を抉ってやる。

「死ね大狼！」

「その程度か」

「早いっ!？」

大狼のスピードはオレ様の予想を遥かに超えていた。ありえないぜ、こんなこと。

オレ様の攻撃を軽々しくかわして大狼の鞭が撓る。

「クソツタレ！」

鞭はオレ様の身体に巻きつき自由を奪った。こんなにあっさりやられるなんて、ウソだ、オレ様は認めないぞ！

大狼は鞭を引いて、よりオレ様の身体をきつく縛った。

「貴様は頭が悪いわけではないが詰めが甘い」

「どうしてオレ様より強いんだ、ステータスの上限は同じはず。なのになんであんなスピードで動ける！」

「私のこの世界での役割がモンスターだからだ」

「なにい？」

「モンスターのステータスの上限はプレイヤーを遥かに凌ぐ。実装されているモンスターで、これほどまでのステータスを持ったものはいないが、システム上はここまでパラメーターを上げられる仕様になっている」

それを今知ったところでオレ様には何もできない。何かする隙を大狼が与えてくれるはずがない。クソツ、負けちまった。

大狼が片手で合図するとモンスターどもがぞろぞろ集まってきやがった。モンスターまで配下にしゃがんだのかよ。

モンスターどもはガキの周りも囲みやがった。モンスターとのレベル差があるから、ガキも何もできねえな。それがわかってんのかガキも逃げようなんてしねえみたいだ。

大狼が隠しフォルダを取り出した。

「彼女は私のフォルダに入れてパスワードを掛けて置こう」

モンスターにガキを目の前まで連れて来させ、大狼はファイルを開けた。

「ウチ絶対そんなところ入らないから！」

大人しかつたガキが急に暴れ出して、モンスターの手を振り切つて逃げようとした。

けどよ、オレ様の目から見ても無理だな。

ガキは背後から襲ってきたモンスターに一発殴られ地面に倒れた。やっぱな。

瀕死のガキのフォルダが向けられ、掃除機で吸い込むみたいにガキはフォルダの中に消えた。

大狼はフォルダを閉めて、またどこかに隠しやがった。

「さて、ザキマ。ゆっくりと語ろうではないか」

「やなこつた」

「情報交換は有意義ではないかね？」

「てめえと交換する情報なんてねえーよ」

「君の裏切りは想定内だ。前々から君は私に好感を持っていなかったからね。では、なぜナイを連れて逃げたのだね？」

「つたく、情報交換なんてしねえーて言ってるのに話を進めやがって。」

オレ様は口を噤んでそっぽを向いた。

「てめえと話すことなんてねえーよ」

「単純に私を困らせようとしたのか、それとも君もナイに聞きたいことがあったのか？」

「だから何も話さねえって言ってるんだろうが」

「ならば気分転換に場所でも変えよう。静かで心安らぐ場所に」

そしてオレ様は大狼に拘束されたまま、別の場所に連れて行かれた。

オレ様は丘の上にある小屋に連れて来られていた。

縄でグルグル巻きに縛られ、手も足も動かせない状態で椅子に座らされている。目の前には優雅に足を組んで椅子に座った大狼がいやがる。

「ここはあまりプレイヤーが来ないところだね。話をするには最適だと思うが、どうだね？」

「だから何も話たくねえって言うてんだろ」

「君はなぜ黒い狼団に入った？」

「なんだよいきなり」

「私は世界の成り立ちを知りたかっただけだ。そのためにこの世界を我が物にし、多くを動かす力が欲しかった。君は何がしたかった？」

「オレ様はただ破壊が楽しかっただけだよ」

支配、破壊、弱いものどもがオレ様に恐怖する。己の快樂のためだけにオレ様は行動してきた。オレ様と大狼は根本が違う。

大狼が身を乗り出してオレ様の顔を近づけた。

「ナイから何を聞き出した？」

「たいした話じゃねえよ」

「別の世界に行く方法を聞き出せたかね？」

「さあな」

特別な奴しか世界を行き来できないとか、そんなことを言っていたような気がするな。

「彼女の能力について聞いたかね？」

「能力？」

「その顔は本当に知らないようだな」

「なにをだよ？」

「彼女は異世界への扉を開く力がある。その力を利用できれば、誰も異世界に旅をすることが可能だ」

そんな話聞いてねえぞ。あのクソガキ、オレ様にウソを付きやがったのか。

大狼が話を続ける。

「しかし、彼女一人では力が弱いため、自分が行きたい世界と交互性を持つ世界にしかいけない。彼女は双子だ、二人でひとつ、二人が揃った時、真の力が発揮されるのだよ」

「そのもう一人はどこにいるんだよ？」

「おそらく私を追ってすぐ近くにきているだろう」

オレ様がしなきゃなんねえこともわかってきたぜ。二人のガキを我が物にすりゃーいんだな。

ならもう大狼は用済みだ。

オレ様はニヤリと笑って、目の前にいた大狼に頭突きを食らわせた。

よるめいた大狼に全身で押し掛かり、奴の動きを少しの間封じた。オレ様の勝ちだぜ大狼」

力が漲ってくる。オレ様の身体に大狼の力が流れ込んでくるぜ。

大狼はオレ様を押し飛ばそうとしたが、どうやら力が入んねえみたいだ。

「私に何をした！」

「モンスターの能力を応用しただけさ。てめえの力を全部吸い取ってやる」

力が漲るオレ様はついに全身に巻かれていた縄をぶち破った。

すでに大狼は瀕死だった。ヒットポイントもマジックポイントもゼロに近い。もうこいつは何もできねえ。

「ケケケケツ、オレ様は勝った。てめえに勝ったんだ」

「……貴様……許さんぞ……」

「うっせええ！」

「グッ！」

オレ様の蹴りが床に倒れる大狼の腹を抉った。

「ガキを返してもらっせ」

オレ様は大狼から隠しフォルダを奪い取り、すぐにパスワード解除した。たかがフォルダでよかったぜ、もっと高等なプログラムだ

つたら解除に時間がかかるとこだった。

フォルダから出たガキはオレ様の顔を見てすぐ逃げようとした。

「逃がせねえぜ」

オレ様は拘束具のスイッチを入れた。

体中に電流の走ったガキは、ドアを目の前に倒れて悶えた。

オレ様はガキの首根っこを掴んで立たせた。

「まだオレ様から逃げられると思ってたのかよ」

「別にアンタから逃げようと思ってるんじゃないもん」

「ハア？」

「この世界に来てる。妹が近くに来てるのを感じる」

「てめえを助けに来たのか？」

「違う、ウチを捕まえに来たの」

「よくわかんねえけど、てめえをオレ様の手元に置いとけば妹が来るんだな」

床にうつ伏せになったまま大狼がオレ様を見上げた。

「妹のメアはナイと違って冷酷で非情だ。貴様の手に負えるかなげキマ」

「うつさいんだよ！」

オレ様の蹴りが大狼の腹を抉る瞬間、ナイは顔を背けた。

大狼はオレ様より姉妹の情報に詳しい。ハッキングして情報を手に入れるか。弱ってる大狼なら容易いことだ。

すぐに大狼にハッキングを試みた。だが、オレ様はすぐに顔色を変えた。

「どうしてできねえ？」

弱ってる大狼のファイアウォールはボロボロだ。免疫も役立たずで侵入はすぐにできた。けどよ、侵入した先には何もなかった。

大狼の口がオレ様を見て嘲笑ってやがった。

「私をハッキングすることは不可能だ。どうやら私もこの世界の住人ではないらしいのでな」

ガキと同じように大狼も別の世界の人間なのか？

「信じられるか、どんな小細工しやがった」

「小細工ではないよ。私と君は違う存在なのだ。所詮、貴様はプログラムでしかない。電影なのだ、貴様などこの世に存在していない！」

「オレ様はここに存在してる！」

自らの意思でオレ様はここにいる。もし、本当にオレ様が幻のような存在だったとしても、オレ様は必ず幻から現実になってみせる。小屋のドアが突然開いて、誰かが入ってきやがった。

「そうキミはここに存在しています」

振り向くとピエロの格好をした野郎が立っていた。

「誰だてめえ！」

「はじめまして、休日の道化師と申します」

ガキの眼つきが変わったのをオレ様は見逃さなかった。知り合いなのかわかんねえけど、ガキはひと言も口を開かなかった。

ピエロは敵意を剥き出しにするオレ様に構わず、小屋の中にズカ入ってきやがった。

「キミは本物ですよ、ここに存在している時点でキミは本物なのです」

いきなり入って来て、なんなんだこのピエロは？

オレ様はわけがわからず、ただピエロの話に耳を傾けるだけだった。

「ただしキミはホームワールドにいるキミの電影であることに違いない。向こうにいるキミが本物で、今ここにいるキミは偽者ですか？」

「オレ様は本物だ！」

「そう想うならキミは真物なのでしょうね。ただし、光と闇が一体であるように、どちらかが偽者ということはありません。個は全であり、全は個である。それが世界の真理」

「オレ様が影だって言いてえのかよ？」

「それはボクの決めることはありませんから」

ピエロはそう言いながら床に倒れる大狼の脇に膝をついた。

「てめえ、大狼になにする気だ？」

「彼はもらって行きます」

「ハア？」

「そっちのお嬢さんは置いていきますから心配なく」

これを聞いてナイが喚く。

「またウチのこと置いていく気！」

「キミを連れて行くわけには行かない。ボクはキミの味方ではないからね」

大狼を抱きかかえて小屋を出て行くピエロ。なぜかオレ様は呆然として、追いかけることを少しの間忘れていた。だが、すぐに我に返って小屋の外に出る。

「てめえ、大狼は渡さねえぞ！」

ピエロが振り返る。

「彼は変われる可能性がある。いつまでもベッドで眠っているわけにはいかないでしょう」

「意味わかんねえこと言っでんじゃねえぞ！」

オレ様はピエロに向かって飛び掛った。

この世界でオレ様に刃向かえると思うなよ。

ピエロは大狼を地面に下ろしてオレ様の攻撃に立ち尽くした。

「このワールドの法則ではボクに勝てませんよ」

オレ様の攻撃をピエロは避けようとしなかった。

鋭いクローがピエロの脳天から股間まで切り裂いた。

だが、真つ二つにされたピエロは霞み消えた。

「どこ行きやがった!？」

「ボクはキミと戦う理由が特にありません」

ピエロの声はオレ様の背後からしやがった。

振り返ったときには、ピエロは大狼を抱きかかえて、消えようしていた。

「てめえ待ちやがれ！」

オレ様の声も虚しく、ピエロは大狼を連れて消えやがった。移動魔法を使ったような感じた。畜生、どこに行きやがった。

ナイが玄関の陰からこつちを見ていた。ピエロとどういう関係なんだ。

「オイ、クソガキ。あのピエロはいったい何者なんだ！」

「ウチもわかんない」

「ウソじゃねえだろうな！」

「ウソじゃないもん。ただ、この香……」

「香だと？」

ピエロが消えた後、風に運ばれて花の香がした。この香なんだって言うんだよ？

とにかく今はピエロと大狼の居場所を探すのが先だ。

## サイバーファントム「Link5レイVer.2.0」

「どこなのここ？」

それが僕の第一声だった。中世ヨーロッパ風の街並み。魔法使いっぽい奴とか、なんか耳が長いエルフっぽい奴とか、鎧を重たそうに着てる奴とか、とかとか……。まるでRPGの世界だな。

先に入ったメアとナギの姿を確認した。二人とも初期装備っぽい薄手の布の服を着ている。やっぱり僕が思うに、ここはMMOの世界に違いない。

……で、そうすればいいの？

こういうゲーム苦手なんだ。特にシナリオもなくて、何していいかわからないゲーム。

僕はメアに顔を向けた。

「どうする？」

「わたしこういうゲームに疎いの」

ナギに顔を向けると任せると言わんばかりの顔をしている。

「ついて来い」

それだけ言っただけでナギが歩き出した。マジで、マジで得意なの？

実はゲームとか得意系？

ナギに着いて歩くと、迷わず町の先にある神殿に向かった。

神殿の中は無意味に広い。白い柱が立ってるギリシア風の古い神殿だ。

赤い絨毯の上を歩いて奥へ奥へと進むと、行き止まりの部屋に何やら輝く物体があった。僕と同じくらいの背丈がある宝石みたいだ。七色の優しい光を出している。

僕らになんの説明もしないでナギはその宝石に触れた。そして、瞑想するように動かなくなってしまった。

突然、ナギの身体が強く輝き出した。

わかった、きっとそうだ。

輝きを治まるとナギ姿に変化が起きていた。初期装備が鎧に変わって、見るからにナイト風。初期の職業を決める場所なんだ。

「次はアタシやる！」

おもしろそう。メアを差し置いて僕は宝石の前に立った。

よし、行くぞ！

僕の手が宝石に触れた瞬間、いくつかのイメージが頭に流れ込んできた。ほとんどシルエツトだけで、カラーで表示されてる職業はちよつとしかない。最初から全部の職業を選べるわけじゃないらしい。

選べる職業は、ナイト風、魔法使い系、僧侶っぽい奴、盗賊、弓使い、ターバンの奴、あとは……これに決めた！

僕の身体が輝き出し、何か熱いものが心の底から漲ってくる感じだった。

輝きが治まってすぐに僕は自分の足元を見た。ウエスタンブーツを履いてる。頭に手を乗せるとテンガロンハットだ。腰のホルスタ―には銃が装備してる。

よし、完璧だ。美少女ガンマンってとこだな。ガンウーマンか。

次にジョブチェンジしたメアは魔法使いになった。メイガスっていう攻撃魔法系を使うキャラらしい。

で、これからどうするの？

僕はメアじゃなくてナギに顔を向けた。

「これから何をしたらいいの？」

「プレイヤーに話を聞けば大狼君の行方がわかるかもしれない」

「うん、わかった」

とりあえず、一番近くににいるキャラに話を聞いてみよう。僕はすぐ近くに立っていた神官に話しかけてみることにした。

「あのすみません、ちよつといいですか？」

「ここはメイブス神殿。そこにあるクリスタルに触れることによって、好きな職業になることができます」

「そうことが聞きたいんじゃないって、人を探してるんだけど」

「職業を変えると装備は自動的に外されるから注意してください」  
「じゃなくて、あたしの話聞いている？」

なんだこいつ僕のことシカトかよ。  
ちよつとイラつと来て掴みかかろうとしたところで、ナギが僕の肩を後ろから叩いて止めた。

「それはNPCだ。話しかけても決まった文句しか返してこない」  
「もしかして、これって村人AとかBとかそういう感じのキャラなの？」

「そうだ」

「……………」

僕は恥ずかしくなって顔から火が出そうだった。まるでマネキンに話かけてる酔っ払い並に恥ずかしい行為だ。

「冗談、ジョーダン。ちよつとウケ狙おうとしたに決まってるじゃん、あははー」

なんて言ってみたものの顔が熱い。絶対誤魔化し切れてないし、窒息しそうなほど苦しい言い訳だ。

こういう恥ずかしいことをしちゃった場合の対処法は！

「よしっ、神殿を出てプレイヤーに話を聞きに行こう、おーっ！」  
僕は拳を高く上げて何事もなかったように神殿の外に歩き出した。町で情報収集をはじめた僕たちだったけど、大狼の行方はわからなくてさっぱりはかどらなかつた。でも、なんかこのゲームのシステムとかは理解してきた。

三人で分かれて情報収集をはじめてしばらく、僕はなんの収穫もないまま待ち合わせの場所に向かった。

町の中心にあるモニュメントの前に行くと、人ごみの中にメアとナギの姿あつた。

「遅れてゴメン」

僕が謝りながら駆け寄るとメアが静かに笑った。

「いいのよ別に。何か良い情報は手に入れられたかしら？」

「ううん、まったく」

「……遅れて来たのに収穫ゼロなんて」

微笑んでいた顔が一変、鼻で嘲笑ってボソッと呟かれた。この態度の切り替えは、ものすごく性格悪いぞ。

ナギが親指で町の入り口を指差した。

「仕方ない別の町に行ってみよう」

「町の外にはモンスターとかいるんでしょう?」

僕が尋ねると、当たり前のようにナギが頷いた。

「当たり前だろう。でもまだはじめたばかりだから、弱い敵しかでないはずだ」

だったらいいけど、なんか極稀に強いモンスターがエンカウントするとかないのかなあ。

僕らは人が集まる次の町を目指すため、ついにフィールドに出ることを決意した。

が、外に出た途端、僕らを覆う黒い影。見上げると、棍棒を持った小太りのオッサン風のモンスターと出くわした。

僕と目が合ったモンスターはいきなり棍棒を振り下ろしてきた。

「きゃっ!」

棍棒は僕の身体にクリティカル。見事に吹っ飛ばされた僕は地面にダイブ。カエルのようにうつ伏せでつぶれた。

「死ぬ……ザコしかいないなんて……ウソ付きめ」

僕は必死になって町の中まで這って逃げ帰った。

すぐに僕のあとを追ってメアとナギが追いついた。

ナギは済まなそうな顔で僕を見ている。

「今、プレイヤーに話を聞いたら、ここの出口から出るのは初級者には無理らしい」

「そーゆー情報は早く仕入れてよね」

僕は顔をぶくーって膨らませて怒りを露にした。絶対リアルだったらこんな動作しない。美少女の姿をしているからこそ似合うんだ。

初期装備の中に回復薬が入ってたけど、ここで使うのはもったいない。瀕死の重傷を負ったけど町の中にいれば平気だ。じっとして

いると自然に体力が回復する仕様らしい。

僕の体力が回復するのを待って、再び町の外に出ることになった。今度はちゃんと弱い敵がいる出口から出た。

草原のフィールドに出た僕らを待っていたのはスライムだ。RP Gのザコキャラとして定番な、ブヨブヨしたゼリーとかジェルみたいなモンスターだ。

「ここはあたしに任せて！」

僕は意気揚々とリボルバーを抜いて構えた。

そんな僕を嘲笑うかのように、スライムが突然僕に飛び掛ってくる。予想外の瞬発力だ。スライムは僕の眼と鼻の先まで。

「ウガッ！」

僕は思わず変な声を出してしまい、見事にスライムは僕の顔面に張り付いた。

「く……苦し……」

誰か取って、死んじゃう！

必死になって顔からスライムを剥がそうとしたけど、なかなかしつこくて剥がれてくれない。このままだと本当に窒息死してしまう。

突然、僕の顔からスライムが消えた。

「バカか……」

情けなさそうにナギは呟いて、手に持っていたスライムを上空に投げると、剣を抜いて真つ二つに斬った。

……カッコイイとこ持っていかれた！

シヨックだ。僕が戦闘の手本を見せて、いいところを見せるはずだったのに。おそらく最弱の敵に殺されかけ、寄りによってこいつに助けられるなんてシヨックだ。

まだまだ冒険ははじまったばかりだ。僕が活躍する機会なんていくらでもあるさ。

なんて僕が気持ちも新たに決意を固めいると、メアとナギはさっさと先を歩いていた。

「グズグズしてないで置いていくわよ」

メアの冷たいひと言。氷の刃が僕の純情な心に突き刺さった。嗚呼、なぜか凍えるように寒い。

僕らはマップを突き進み、モンスターたちをバツバツ倒して先に進んだ。ぶっちゃけ、モンスターを倒してるのほとんどナギだけだ。だって僕が戦闘態勢に入る前に、敵に斬りかかってるんだもん。

経験値はパーティーに分配されるらしく、まったく戦う気ゼロのメアにも入ってるはずだ。

レベルを上げながら僕たちは遺跡のマップまで来た。

古代都市の名残だろうか、民家の壁のような物が残っていたり、首のない石造が立っている。

メアが空を見上げた。

「そろそろ日が暮れそうね」

ゲームの中は時間が立つのが早い。あつという間に夜が来る。

僕は肌寒さを感じて両腕を擦った。

「なんかここ寒くない？」

夜だからってわけじゃなくて、何か背中がゾクゾクするような寒さだ。嫌な予感。

ナギが剣を構えて辺りを見回した。

「敵だ！」

その合図と同時に、骸骨剣士たちが僕らの前にゾロゾロ姿を現した。あつという間もなく囲まれた。逃げ場もない。

この絶体絶命のピンチは裏を返せば僕の活躍のチャンスかつ！

僕は張り切ってリボルバーを構えた。そんなことをしてるうちに、ナギはすでに骸骨の頭を剣で割っていた。

遅れを取って堪るものか！

「アナタたちの相手はアタシよ！」

リボルバーが火を噴いた。

銃弾が頭蓋骨を割った。それでも骸骨戦士たちは僕たちに向かって来る。

もつと致命的なダメージじゃないとダメだ。

スキル発動。銃弾に魔力を込めて僕は魔弾を撃ち放った。炎を帯びた弾丸が骸骨剣士にヒットした。

「やったあー！」

粉々に吹き飛んだ骸骨を見て僕は飛び上がった喜んで。

でも、喜んではいられない。敵は次から次へと湧き出てくる。奴等は土の中から湧き出てくるんだ。切りがない。

「レイ危ない！」

ナギが叫んで僕の元へ飛び込んだ。

風を唸らせながらナギの剣が僕の背後にいた骸骨を叩き斬った。

危なかった。

「別に助けってくれなんて言っていないんだし、ありがとうなんて言わないんだからね！」

少し照れながらそんなセリフを言ってツンデレぶってみた。

僕らは次々と骸骨剣士たちを倒していった。そんな中で、やっぱり戦う気ゼロのメアが耳をそばだてた。

「ボスが来るわよ」

どこに？

なんて思っていると、僕の身長のお三倍はありそうな巨大な骸骨が、廃墟となった神殿から這い出てきた！

あんなデカイの倒せるのか……？

すぐにナギが斬りかかって行った。あいつの選択肢には猪突猛進しかないんだな。

だが、呆気なくナギは巨大な手に振り払われて飛ばされてしまった。

今度こそ僕の見せ場だ！

僕はスキルを発動して魔弾を次々と巨大骸骨の身体に撃ち込んだ。

「あはは、見事に肋骨の間をすり抜けた」

当たったのは二発くらいかなあ。

弾切れしたので、すぐに弾をリロードしようとした。その際に巨

大な手が僕の目の前に迫っていた。

すぐにナギが駆け寄ってくるけど、間に合わない。僕自身も動くにも動くヒマすら与えられなかった。

横振りに振られた巨大な手に飛ばされて、僕は宙を二回転か三回転して地面に叩きつけられた。

「死ぬほど……痛い」

気付けば僕のヒットポイントはゼロだった。

遠距離攻撃のキャラは防御力が低いのか……。

暗転から覚めると僕は町の真ん中にした。目の前にはモニユメントがある。最初の町まで戻された。

死亡したから最後に立ち寄った町に飛ばされたのか……。  
しまった！

早くみんなのところへ追いつかないと……ってどうやって？

結構進んだから、追いつくの大変そうだなあ。なんか絶望的。

しかもなんか経験値が大幅にダウンしてる気がするし！

僕がどうしようかと迷っていると、目の前に突然ナギが現れた。

こいつも死んだのか。

目の前に僕がいることに気付いたナギはため息をついた。

「すまんやられた」

「メアはどうなったの？」

「オレがやられたあとのこととはなんとも……おそらくまだあの場所  
で一人戦っているか、逃げたのかもしれない」

ここにきてないってことは、戦ってるか逃げたかのどっちかだろ  
うなあ。

こういう場合、僕たちはどうしたらいいわけ？

「どうしよっか？」

「今からのあの場所に駆けつけても、それまで彼女が戦ってるとは  
考えづらい。しばらくここで待ってみよう」

「さんせい」

「ならばしばらくここで待っていてくれ」

「なぜに？」

「少しプレイヤーと話をしてくる」

「うん、わかった」

ナギは僕を残して姿を消してしまった。

しばらくするとナギが戻って来た。メアは来てない。

「すまない待たせたな」

「ぜんぜん平気」

社交辞令だ。

「どこ行つてたの？」

「パーティーチャットの方法を聞いてきた」

「なにそれ？」

「離れた場所にいるパーティーに連絡を取る方法だ」

それを使えばメアを連絡が取れるってわけだな。とっても便利だ。

《聞こえるか？》

うわっ、いきなり頭の中にナギの音が響いた。

これがパーティーチャットか。で、どうやるの？

「やり方教えて」

《頭の中にショーカットコマンドを思い浮かべて、その中に現れた

パーティーチャットを選択するだけだ》

《こうやるのね》

メアの声がすぐにした。

僕もさっそくやってみよう。

《あたしに声もちゃんと聞こえてる？》

なんかできたっばい。

ナギがメアに尋ねる。

《メア、今どこにいる？》

《さあ、どこかしかしら。敵を殲滅したまでは良かったのだけれど、

方向音痴だから道に迷ってしまったわ》

《すぐに行くから何か目印を教えてくださいませんか？》

《わたしなら平気よ一人で大狼を探すわ、手分けしたほうがいいでしょう。何か新しい情報が手に入ったら教えて頂戴》

《本当に独りで大丈夫なのか？》

《心配しないで、ごきげんよう》

……心配しないでって言われても、自分で方向音痴だって言ったよくな。

難しい顔をしてナギが僕の顔を見てきた。

「大丈夫だと思うか？」

「だいじょぶだよ、だって独りでモンスター殲滅させたんでしょ？」

「そうだな」

今までぜんぜん戦わなかったのに、僕らがいなくなったあとに本気を出したのか。僕らが死ぬ前に出して欲しかった。

僕らはメアの言葉を信じて再び旅立つことにした。

レベルの上がっている僕らは、最初よりも早いスピードでマップを進んだ。

分かれ道に来て、ナギの足が止まる。目の前には大きな木が一本立っている。

「違う道を行ってみよう」

「えーっ、さっきと違う道行くのぉ〜」

「向こうの地域はメアに任せよう」

果たして方向音痴に任せて平気なのだろうか。でも、強いんだからきつと平気。

「うん、わかった」

僕は元気に頷いて見せた。

先に進もうと歩き出すと、木の後ろから人影が飛び出してきた。敵かと思って構えたけど、違ったみたいだ。

「こんにちは、また会いましたねー」

ピエロだった。

「またお前か」

ナギはピエロを見てたしかにそう言った。面識があるのは僕だけ

じゃないのか。

ピエロは人懐っこく近づいてきた。

「何かお困りのようでしたらお手伝いしましょうか？」

まさか大狼君の居場所を知ってるわけないよな。でも一樣聞いてみるか。

「あたしたちは大狼君を追ってここまで来たんだけど、まさか居場所知らないよねえ？」

「知ってますよ」

「ホント!？」

マジか……九割ダメもとで聞いたのに、まさかそんな答えが返ってくるなんて思ってた。なかつた。

「はい、知っていますよ。でも教えません」

なんだその思わせぶりな態度というか、手伝いするって言ったクセ教えないなんて、ヒドイ。

でも、ここはそんな感情は押し殺して冷静に。 。  
「どうして教えてくれないの？」

笑顔で僕は訊いた。

「おそらく君たちが探さなくてはいけないのはザキマです。彼は今のゲームの中にいます。そして、ナイも彼と一緒にいます」

ナギの眼つきが変わった。

「ザキマがいるのか……。奴はどこに？」

「ボクが最後に見たのはここから南西向かった岬にある小屋です。

けれど、おそらく彼はこの道をまっすぐ行った町に向かうでしょう」

「なぜ？」

「それはヒミツです」

僕はピエロの秘密のほうがよくぼど気になる。こいつはどここの誰で、なぜ僕たちの前に現れるのか？

そこんとこどうなのよピエロさん！

「あたしから聞きたいことがあるんだけど、ピエロさんに」

「なんですか、ボクに答えられることならなんなりと」

今なんなりとって言ったな！

絶対答えてもらうからな！

「えーっと、じゃあ質問なんだけど、どうしてアナタはアタシたちのことを助けてくれるの？ アナタはいったい何者なの？」

「賭けをしてるんです。もしかしたら世界の命運を掛けた賭けなのかもしれません。ボクの正体について今は言うことはできません、賭けに影響がでるかもしれませんからね」

「賭け？」

「そうですね。あの、彼が心配なのでそろそろ消えますね」

「ちよつと待っ」

僕が止める間もなく、ピエロは姿を消した。残ったのは花の香。

ナギはすでに歩き出していた。

「行くぞ！」

「ちよつと待つてよ、メアに連絡しなきゃ」

「……そうだな、忘れていた」

なんだ、こいつ焦ってるのか？

ザキマの名前を聞いた途端、眼つきも変わったし、ずっと難しい顔してるし……。

何か考え込むナギに変わって僕がメアに連絡をすることにした。

《メア、ナイの情報を手に入れたよ》

数秒の間を置いてメアから連絡が返って来た。

《どのような情報なのかしら？》

《ザキマって奴と一緒にいるらしいの。場所は最初の町を出て、ほら、どっちに進もうか相談した大きな木があつた分かれ道があつたでしょ？ あそこを最初に選んだ道とは逆に進むと町があるらしいからそこ》

《わかつたわ、わたしもすぐに向かうわ》

……方向音痴だけど今の説明でわかつたのかな。ピエロに町の名前聞いておけばよかった。僕らが先についたらまた連絡すればいいか。

メアとも連絡して、僕らは町に向けて歩き出した。  
無言で前を歩くナギに僕は無性に声がかけたくなった。

「ねえ」

「……………」

「ねえってば！」

「なんだ、敵か！」

剣を抜きながらナギは振り返った。

「敵じゃなくて普通に雑談」

「……………そうか」

「何か考え事？」

「なんでもない」

ウソばかり。今だって眉間にしわ寄せてるクセに。ウソは泥棒のはじまりだぞ、今のお前は盗賊じゃなくてナイトだろ。

僕は腰の後ろに両手を回して、胸を突き出す感じでナギの顔を覗きこんだ。

「本当は何考えてるの？」

「なんでもない」

「ザキマのことでしょう？」

「それもある」

名前を出すと案外あっさり認めただけ、他にもあるみたい。

「他に何かあるの？」

「あのピエロのことだ」

「あのピエロがどうしたの？」

「懐かしい匂いがした」

ピエロが消えるたびに残していく花の香。まさかナギもあの香に何か想うところがあるのか？

僕は思い出せなかった。どこかで嗅いだことのある香なのに、なぜか思い出せない。

ナギはゆっくりと首を振った。

「いや、ピエロのことはいいんだ。それよりもザキマのことだ」

「ところでザキマって誰なの？」

「黒い狼団のナンバー2だった男だ。お前たちと会う前に一度アジトに侵入したとき、完膚なきまでにやられた」

ナギってそこそこ強いのにやられたんだ。でもナンバー2ってことは大狼君より弱いはずじゃ？」

アジトで僕が戦闘員を相手にしてる近くで、ナギは大狼君と一対一で戦った。どんな戦いを繰り広げていたのか、そんなのを見ている余裕はなかったけど、大狼君は追い詰められて吠え面かいて逃げたハズ……。片腕がなかったとはいえ、ナンバー2がそんなに強いらなかったら……。

僕の中に疑念が生まれたけど、答えは見つからずによくわからなくなかった。

そうだ、とにかくこの道の先にある町に行かなきゃ。

今はそれだけを考えればいいや。

長い道を進み、僕らの前方に町のゲートが見えてきた。

町に入った僕らはすぐに異変に気付いた。風に乗って運ばれてくるざわめき。

逃げ惑うプレイヤーが僕らの横をすり抜けた。

いったい何が？

騒ぎの原因は広場にあった。

町の広場に人々が集まっていた。その中心にいたのはモヒカン野郎。その脇には……メア？

ナギが僕の横で呟く。

「ザキマだ。おそらく一緒にいるのはナイ」

「あのモヒカンが……」

っていうか、ナイってメアと瓜二つだ。

ザキマに飛び掛る数人のプレイヤー。けど、町の中じゃプレイヤー同士の戦いは禁じられている。そのため殴りかかっても、途中で見えない壁に阻まれてしまう。

僕の眼に映っていたハズのプレイヤーが消失した。ザキマに飛び掛って失敗したプレイヤーだ。

ザキマが甲高く笑う。

「ケケケケツ、てめえらみたいなのが、ステッカーを貼らなくても簡単にクラッキングできるぜ」

ザキマの指は世話しなく動かされている。それはまるでキーボードを打つような動作。

建物の物陰に隠れながら、騒ぎを見ているプレイヤーに僕は尋ねた。

「何があつたの？」

「そ、それがあのモヒカンの人クラッカーらしいんだ。それでいきなりみんなを破壊しはじめて、ゲームマスターも駆けつけたんだけどみんな消されちゃって」

僕が話を訊いているうちにナギがザキマに向かって歩いていった。僕が話を訊いているうちにナギがザキマに向かって歩いていった。僕が話を訊いているうちにナギがザキマに向かって歩いていった。僕が話を訊いているうちにナギがザキマに向かって歩いていった。

「ザキマ、オレのことを覚えてるか！」

叫んだナギの顔をザキマが舌なめずりしながら見た。

「あのとときの美男子か……またオレ様にやられに来たのか？」

「今度は倒しに来た」

そのままナギはナイに顔を向けて話を続ける。

「あときは済まなかった。必ず助けに戻ると言って、今の今まで掛ってしまった」

「ウチのこと助けに来てくれたの？別にぜんぜん嬉しくなんだから……」

少し顔を赤らめナイは地面に目を伏せた。

ナギは剣を抜いて町の外を指した。

「外に出ろ、そこで勝負だ」

「ケケツ、やなことだ。ここでてめえをデリートしてやる」

「オレと戦うのが怖いのか？」

挑発の言葉にザキマの顔つきが変わった。

「オレ様に怖いもんなんてねえーよ。いいぜ、外で戦ってやるよ。オレ様の強さにちびるんじゃねえぞ」

二人は町の外の出で行ってしまった。僕も二人をすぐに追いかけて、プレイヤーたちも町とフィールドの境界線から二人を見守った。

僕がナギの横に行くと、手を突き出されて制止させられてしまった。

「オレ独りで戦う」

「何言ってるの!? アタシも戦うよ!」

「これはオレの喧嘩だ」

剣を強く握ってナギはザキマに駆け込んで行った。

風よりも早く、稲妻よりも激しく、ナギの剣はザキマに向かって行った。

「ザキマ!」

「ケケケツ」

ナギの渾身の一撃を軽々しくザキマはかわした。

「その程度か甘ちゃんよ」

「まだまだ!」

ナギの猛撃は続く。けれど、すべて軽くかわされてしまう。

僕も加勢したほうがいいんだろうか?

でも、ナギが独りでって……僕はどうしていいかわからなかった。そうだ、今のうちにナイを助けよう。

ナイはザキマの真後ろにいた。ザキマが戦ってる間に逃げればいいのに。

僕は学校生活で培った存在を消す術を使った。そーっとザキマに気付かれないように……ナイに近づいて……っと。

そーっと、そーっと、僕はナイの後ろに回った。

「ナイ、助けに来たよ」

小声で話しかけると、気付いたナイが振り向いた。

「もしかして……アナタは……」

「うん、メアと一緒にアナタを助けに来たの」

「妹は？」

「ちよつと道に迷ってるみたい」

「あの子、方向音痴だから……」

ナイは深くため息をついた。

とにかくまずはナイを助けて、それからメアを探そう。

「ザキマがナギに気を取られている間に早く逃げましょう」

「ウチも逃げたいんだけど、ほらこの首に付いてる奴。ザキマがスイッチを入れるか、ザキマから一五メートルくらい離れたら、ウチの身体に電流が流れる仕組みなの」

「ならそれを壊せばいいんでしょう？」

僕がナイの首輪に触れようとしたとき、

「ダメ、触っちゃ！」

ナイが叫んだ。

けど、すでに僕の手は首輪に触れていた。次の瞬間、僕とナイの身体に電流が走った。

「きゃあああつ！」

僕は甲高い声で叫んでしまった。

頭が真っ白になって、心臓の鼓動が早くなった。……死ぬかと思っただ。

ナイも地面に倒れて息を切らせている。

僕が叫び声を上げたせいでザキマに気付かれた。

「オイオイ、ガキを逃がそうとしてるんじゃないやねえだろうな？」

ザキマの気が僕らに向いた瞬間、ナギが地面を高く蹴り上げて飛翔した。

輝く剣がザキマの脳天に振り下ろされる。

刃はモヒカンの毛を真っ二つにして脳天に叩き込まれた。なのに、剣は頭蓋骨を割ることはできなかった。

ザキマは髪の毛が乱されたことで怒り狂った。

「てめえオレ様の髪の毛を……！」

鋭い爪がナギの胸を抉り、大量の血を噴出しながらナギは消滅し

た。

「ナギ！」

僕は反射的に叫んでいた。

一発でナギがやられるなんて、こうなったら僕がやるしかない！  
リボルバーを構えて銃弾を放った。

目にも留まらない弾丸をザキマは片手で受けて握り潰した。

「そんなオモチャでオレ様が倒せるとでも思ってたんのか？」

ザキマが僕に向かって走ってくる。早い、早すぎる。

僕がやられる瞬間、誰かが叫んだ。

「ザキマ！」

それはナギだった。死亡して町に飛ばされ、すぐにこの場所に戻ってきたんだ。

ザキマは僕の相手をやめてナギに身体を向けた。

「まだ力の差がわかってねえようだな」

「まだオレは戦える！」

ナギはザキマの懐に飛び込んだ。けれどザキマの攻撃のほうがかかった。今度は顔を抉られてナギは消滅した。

でも、ナギはすぐに町の中から戻って来た。

「まだまだ！」

息を切らせながらナギはザキマに立ち向かっていった。  
けれど、結果は同じ。

また町から戻って来たナギに僕は駆け寄った。

「独りで戦う必要なんてない。ナギがダメって言っても、アタシは  
勝手に戦うからね」

ナギは僕の顔を見つめて何も言わなかった。

そして、僕とナギはザキマに立ち向かっていった。

渾身の一撃を繰り出すナギを嘲笑いながら、ザキマは悪魔の爪で  
死をもたらす。ナギがまたやられた。

僕はすぐに銃弾を放ったけど、ザキマは銃弾の中を掻い潜りながら、僕の腹に爪を突き刺した。

町に戻された僕はすぐにサキマの元に戻った。

数え切れないほど殺され、それでも僕らはザキマに戦いを挑んだ。そうしているうちに、周りのプレイヤーたちもザキマに戦いを挑むようになった。

戦いの輪は広がり、何十人ものプレイヤーでザキマに挑む。

鋼が響き、汗が飛び交い、魔法が唸り声をあげる。

少しずつ、少しずつだけど、みんなの力でザキマに疲労の色が見えてきた。

そして、ついにザキマは怒り狂ったように叫んだ。

「クソ野郎どもめ、オレ様をコケにしゃがって！」

周りのプレイヤーたちを惨殺しながら、ザキマは町の中に逃げ込もうとしていた。

ナギが斬り込んだ。

「そうはさせるか！」

ナギの剣はザキマの腹を貫いた。それでもザキマは歩き続けた。ダメだ、ザキマが町に入る！

ついにザキマが町に足を踏み入れた。けど、弱ったザキマは町に入った途端、地面に倒れこんでしまった。

僕が叫ぶ。

「今のうちにザキマを縛り上げて！」

プレイヤーたちが束になってザキマに飛び掛った。

誰かが叫んだ。

「いないぞ！」

誰が？

まさかと思って僕はザキマの元に駆け寄った。  
いない！？

ザキマの姿が消えている。

辺りを見回してもその姿はなかった。

逃げられたのか？

ナイは？

僕の元に駆け寄ってくるナイの姿を発見した。けど、ナイの姿が突然消えた。どうして？

あれ……ナギは？

ナギの姿もなかった。

そして、僕の視界が突然ブラックアウトした。

視界が晴れると金属で囲まれた部屋にいた。

僕の周りにはナギ、ナイ、迷子になっていたメア、そしてザキマの姿があった。

ここは大狼君の部屋だ！

「強制的にゲームからログアウトさせてもらった」

そう言っただけ姿を現したのは片腕がない大狼君だった。

大狼君の顔はザキマに向けられている。

「さて、ザキマ……貴様の負けのようだな」

なんだか微妙な構図だぞ。

大狼君はザキマと対立してるみたいだし、ナギとメアはザキマと大狼君を鋭い目で見てる。ナイはザキマからも離れてるし、どういうわけかメアとも距離を置いてるように見える。

メアがナイに近づこうとした。

「お姉さま、こちらにいらしてください」

「ヤダもん、誰がアンタのここになんて！」

うはっ、なんか姉妹喧嘩？

どういふことだ、だってメアはナイを助けようとしてたのに、ナイはメアを避けている。

ナイが大狼君のところへ走り寄って、奴の袖を掴んだ。

「今からウチは大狼君の仲間になるから！」

はあ！？

なんだこの展開？

ザキマが腹を抱えて笑い出した。

「ケケケケケケッ。三つ巴かよ、おもしれーじゃねえか。やって

やるつじやねえか、ここにいる全員とな！」

きつと感じたのは僕だけじゃない。みんなザキマの変化を感じ取ったに違いない。

何か鬼気迫るモノが素肌を刺した。

ザキマの身体に起こる変化。筋肉が何倍も膨れ上がり、破れた服の代わりに金属が身体を覆いはじめた。巨大化と機械化が同時に行なわれてる。ザキマは別のモノに変わろうとしていた。

前髪をかき上げた大狼君が涼しい口調で咳く。

「バージョン2になる気だ」

それってソフトウェアのバージョンみたいなもの？

ってことは性能がアップしたりするってこと？

鋼色をしたボディー。全長は僕の三倍以上。赤く光る目玉が僕らを睨み付けた。

「ケケケケケツ、オレ様八更二強クナツタゼ！」

合成音みたいな声でザキマは言った。もう完全に機械人間だ。

地響きを立てながらザキマは大狼君に向かって行った。違う、その脇にいたナイが狙いだ！

大狼君の身体は叩き飛ばされ、横にいたナイはザキマの巨大な両手が捕まってしまった。

「ウチに何する気！」

「ケケケケケツ！」

笑いながらザキマは、なんとナイを口の中に放り込み、大きくの咽喉を鳴らした。

それを見たメアは静かに怒りを露にした。

「よくもお姉さまを……」

「勘違いスルンジャネエ。ガキハオレ様ノ腹ン中デ生キテルゼ。オレ様二ハ、テメエラ姉妹ノ力ガ必用ダカラナ」

「わたしが力を貸すのはただ一人、お前ではないわ」

冷たい夜風が吹いた。

大狼君はドロップを口に入れ噛み砕き、指を鳴らした。

「ひとまず休戦にしようではないか。まずはザキマを片付けることが最善のルートだ」

ナギも刀の切っ先をザキマに向けた。

「オレはナイに必ず助けると約束した」

僕もリボルバーを抜いて構え……あ、弾切れしてるんだった。腰に手を回すと手榴弾が一個だけあった。

金属の鋭い歯が並ぶ口にザキマが大きく開けた。これはチャンスだと思っただけど、中にはナイがいる。

……しまったピン抜いちゃった。しかもピン投げちゃった。

僕がこの手榴弾のレバーから手を放したら……数秒でドーンだ。

ヤバイ、自らピンチを招いてしまった。早く床に落ちてるハズもピンを探して元に戻さなきゃ。

床に這いつくばって僕がピンを探している最中に、戦いは繰り広げられていた。

中の金属部が剥き出しになった電気コードを振るう大狼君。電気コードが腕に巻き付いたザキマがバランスを崩した。その瞬間、電気コードに電流が流され、さらにザキマはバランスを崩して巨大な足を上げた。

僕は上げられたザキマの足の裏を真下から見ていた。踏み潰される！

でも、あとちょっと腕を伸ばせばピンに手が……限界だ。僕は己む無く下りて来る足を避けて間一髪の危機を免れた。

ピンは……少し離れた場所に飛んでいた。

すぐにピンを拾うとしたとき。

「デニードー！」

メアが呪文を唱えたと同時に、床の下から巨大な針が迫り出して来た。次々と飛び出す針は、まるで春のタケノコパーティーだ！

そんなこと考えてる余裕なんて実はなかった。巨大な針は無差別に僕まで突き刺そうと襲ってくるのだ。バカ、アホかと、僕まで殺す気ですかと。

針が膝に刺さったザキマの動きが封じられた。動けなくなったザキマの眉間にナギの刀が突き刺さる。

「ガガガツギギギギイイイ!!」

奇怪なザキマの叫びが木霊した。

みんなが頑張ってる中で、ついに僕は、僕はピンを見つけた!

このピンを元に……僕を覆う巨大な影。しまったザキマが僕に向かって倒れてくる!

必死で僕は床に飛び込む勢いでザキマの巨体を避けた。

床に腹をついた僕に伝わる振動。ザキマは背中から床に倒れていった。

立ち上がろうと床に手をついた僕はあることに気付いた……握っていたハズの手榴弾がない!

どこだ、手榴弾はどこに行った?

轟音を立てながら爆発は起こってしまった。爆風に煽られて僕は大きく吹き飛ばされた。

床に激突した僕の目の先には誰かの足。見上げると……メアが僕を冷たい瞳で見下していた。

「さつきから何をやっているの?」

「あの……そのお……」

まったくだ、僕は何をやってるんだ。みんなが戦ってる中で僕は手榴弾と格闘か。

「だって銃弾が切れてるんだもん」

僕はカワイイ瞳でメアに訴えた。それを氷の眼で返すメア。

「弾くらいなら創想プログラムで創造可能よ」

「そうなの!？」

僕の腕に付けたブレスレット型増幅器に念じるんだったよね?

ザキマはすでに立ち上がり、ナギと大狼君が交戦している。僕も早くみんなを助けなきゃ!

銃口をザキマに向けた。この銃には弾が残ってるような気がする。僕は力強く引き金を引いた。

カチカチと引き金が鳴るだけで、弾が出ない。そうか、僕が疑ったからいけないんだ。残ってるような気がするじゃなくて、弾は絶対込められてるって信じなきゃいけないんだ。

僕は信じた。

そして、引き金を引いた。

どんな鋼鉄も貫く弾丸が放たれた。でも、本当に機械化したザキマの身体を……ぐあっ！

やっぱり銃弾は弾かれた。貫くどころかザキマの身体にはかすり傷すらついてない。

メアが僕にアドバイスをする。

「強く想うのよ、決して疑っては駄目よ」

ちよつと貫くの無理かもと想ったのがいけなかったんだ。てゆかね、疑うななんて無理に決まってるじゃん。人間どこか心の片隅で、疑心を持つてるに決まってるじゃないか。

駄目だ、僕がそんなことだから駄目なんだ。もつと信じなきゃ。

僕は目を瞑り、心を鎮めた。

よし、いける！

僕はカツと目を開いて銃弾を放った。

想いの込められた銃弾はザキマに向かって一直線に飛んだ。

銃弾はザキマの胸に当たった。

「やったあ！」

弾丸から漏れたウィルスがザキマの身体を犯す。

地面に両手両膝を付いてザキマが倒れた。そして、身体を構成している言語が浮き彫りになり、それが少しずつ崩壊をはじめた。

「ガガツギギガガガツ！」

奇怪な声をあげてザキマは拳を床に何度も叩き付けた。

みんな攻撃の手を止めてザキマを見守った。

その中でメアが淡々と、

「復旧するわ」

その言葉どおり、急にザキマが立ち上がり、浮き彫りになってい

た言語がなくなっていた。

「ケケケケケケケッ！」

復活したザキマが大狼君が対峙した。

「免疫化されてしまったようだな」

「そんな、やっとな僕が……」

巨体を揺らしながらザキマは僕に向かって突進して来た。

大狼君がザキマの前に立ち塞がり、手から電撃弾を撃ち放った。

飛んで来た電撃弾を食ったザキマは大狼君を叩き飛ばし、僕に向かって鋭い鋼鉄の牙を覗かせた。

なんとザキマの口から呑み込んだ電撃弾が！

僕は避けるヒマもなかった。火花を散らした電流弾が僕の眼前まで迫っている。

もうダメだ！

「レイ！」

急に僕の前に飛び込んで来た人影。

その影が僕の代わりに全身で電撃弾を受け止めた。それはナギだった。

僕は倒れるナギの背中を受け止めた。強い電流がナギの身体から僕に伝わる。それでも僕はナギの身体を抱きとめた。

「ナギ！」

返事は返ってこなかった。

こいつのこと嫌な奴だと思ったこともあったけど……だけど……。ナギの身体に浮かび上がったプログラム言語が崩壊していく。

「ナギ！！！」

僕の胸の中でナギの身体がメタリックの光に包まれた。

そして、僕は目を見開いた。

僕の胸に抱かれている女の子の姿……これがナギ？

そんなんっ、ナギが女の子だったなんて……。

僕と同じツインテールの女の子。同じ、僕と同じ……。知っている。

僕はこの子のことを知っている。

なぜか思い出せない。

なんで？

知っているのに……なんで思い出せないんだ。

頭が痛い。

走馬灯のように脳に流れ込んでくる断片的な映像。

薔薇の香。

恋人の死。

偽りの記憶。

改ざんされた記憶によつて創られた偽りの恋人の名。

ナギ……ナギ……そうナギだ。

この子の名前はナギサだ！

僕の本当の名前は？

メアが僕の名を静かに呼んだ。

「我が君、フアントム・メア」

『レイ』の記憶はそこでぶつとりと切れた。

ナギサを床に寝かせボクはゆっくりと立ち上がった。

目の前にいる巨大な機械人の瞳に、今のボクの姿が映し出される。

漆黒のローブを身に纏い、白い仮面を被るボクの姿。

床に寝ているナギサが目を覚ましてボクに手を伸ばした。

「……リヨウ……リヨウ、リヨウなんでしょ！」

ボクは聞き流した。彼はもういない。

奇怪な咆哮をあげて機械人がボクに襲い掛かって来た。

即座にローブの中からボクは二丁拳銃を抜いた。

銃弾の雨が機械人の躰を貫く。

ローブを靡かせながらボクは飛翔し、機械人の頭部に掴みかかる

と、そのままこいつの首をへし折って頭をもいだ。

首を失った箇所から火花が噴出し、それでも機械人はボクに向かって巨大な手を伸ばして来た。

「ボクに勝てるでも思っているのか？」

伸ばされた巨大な手を掴みへし折り、そのままいだ腕を振り回して機械人の胴体にぶつけた。

後方に大きく飛んだ機械人が機器類にぶつかり、爆発に巻き込まれて煙の中に消えた。

煙幕の中に浮かび上がる巨大なシルエット。

「しつこい奴だ」

ボクは呟きながら煙の中に飛び込んだ。

目の前に迫った機械人の巨大な躰。その胴体にボクは力を込めて掌底を喰らわせた。

「ハッ！」

再び後方に飛ばされた機械人は壁にぶつかり、手足が吹き吹き飛んで床に転がった。

ボクの足元まで金属片は飛んできていた。これでもう機械人が再び動くことはないだろう。

粉々になった機械人に近づき、その破片の中から少女の腕を掴んで立たせた。

ボクの白い仮面を見つめるナイ。

「ファントム……メア！」

「久しぶりだねナイ」

「どうして……やっぱり復活して……」

「そのあたりの事情は復活したばかりでボクも把握できていない」  
ボクの背後で駆け寄る足音が聴こえた。

「目を覚ましてリョウ！」

ふらつきながら駆け寄ってくるのはナギサだった。その前に立ちはだかるメアの姿。

「ファントム・メア様が復活した今、もう貴女はもう用済みよ」

メアの手から放たれた見えない波動によって、小柄なナギサの躰はいとも簡単に吹き飛んだ。

この状況を見ていた大狼君が声をあげる。

「これはいったいどういうことだ！」

「さあ、ボクにもよくわからない。メア、説明してくれないかな、なぜボクが復活したのか？」

全員の視線がメアに集中した。

「全ては憎きファントム・ローズによって、ファントム・メア様が滅ぼされたことにはじまります」

そこまでの記憶はボクにもある。

ホームワールドとホームワールドの間にできた ハザマ。そこでボクとローズは一騎打ちをした。どちらもあれが最期の戦いだと思っていただろう。

そして、ボクは滅ぼされた…… 筈だった。

「そうだ、ボクは確かに滅びた筈だ。では、今ここにいるボクは何者だ？」

「我が君、ファントム・メア様でございます」

メアは断言した。

ボク自身も疑う余地はない。だが、微かに記憶が残っている。

レイ。ゼロ…… から今に至るまでの課程。

少しずつ状況が把握できてきた。

ボクは掴んでいたナイの腕を引っ張り、そのままメアに投げつけた。

ナイが声を張り上げる。

「全てはメアが仕組んだことだったの！」

メアの腕を振り切り、ナイは壁際まで逃げた。

「ウチとメアが ハザマ に駆けつけたときには、もうすでにアナタは断片化して消えかけていた。その断片をメアは掻き集めて、プレスレッドに加工したの」

プレスレッド……これが。

ボクは腕に嵌められていたプレスレッドを皆に見せ付けた。

「これだな？」

すでにプレスレッドは色褪せ役目を終えているようだった。

ボクはメアに問う。

「それからどうした？」

「ホームネットワークからはすでに、ファントム・メア様の元なつた者は完全に消滅しておりました。そこで私は新たな器をドリームワールドに見出したのです。ホームネットワークから発せられる想いが、ドリームワールドであの者を創り上げた」

「それがレイか……」

「その者は他人が創り上げた思念でしかありませんわ。ですので、本当に器になるか賭けでございました」

レイ それは人々の想いが生み出した幻影。

もしかしたら、レイはボクではなく春日リヨウになっていた可能性もあるのか。

薔薇の香が一瞬にしてこの部屋に立ち込めた。

ボクの視線の先には一人の道化師が立っていた。その姿の奥に何者が潜んでいるのか、ボクにはすぐわかった。

「鳴海マナ……いや、ファントム・ローズだな」

「そうだ。私の名はファントム・ローズ」

道化師の姿が一瞬にして仮面の使者に変わった。

白い仮面。しかし、ボクが想像えば、それは別の顔へと変わる。ボクはローズの真の姿を見ることができる数少ない存在。

ローズの白い仮面は哀しそうな表情をしていた。

「私は賭けに負けたのだ。私は君が春日リヨウに戻ることを心から願っていた。しかし、君は再びファントム・メアとして目覚めてしまった」

レイの前に度々姿を現した謎の道化師。レイはその者がファンム・ローズだと最後まで気付かなかった。もし、ファントム・ローズだと知れば、リヨウではなく、このボクの記憶を刺激してしまっていただろう。

最後にボクの記憶を呼び覚ましたのは、そこに立っているナギサの存在。彼女は諸刃の剣だったに違いない。ボクを呼び覚めますか、

それともリヨウを呼び覚ますか。

リヨウとナギサは恋人関係にあった。しかしそれはホームネットワークが整合性を取るために、記憶を改ざんしてナギサに刷り込んだ事象に過ぎない。ボクの恋人は死んだのではなく、存在そのものが世界に否定されてしまった。そのため記憶の改ざんは行なわれた。

ボクにとってナギサは真実の恋人ではなかった。しかし、ボクを呼び覚ますために必用だったのは、他者からの想い。強い想いが必用だった。

今のボクはファントム・メアであるが、その根本はローズに滅ぼされる前のモノとは異なる。

なぜならば、あのファントム・メアはあくまで春日リヨウであった。しかし、今のボクは最初から幻影なのだ。ボクが存在するためには、前よりも強い想いが必用なのだ。

ボクは真のファントムとして覚醒めた。

そして、ボクは理想郷を創るために今の世界を敵に回さなくてはならない。

ボクはローズを見定めた。

「ファントム・ローズ、ここでの勝負はお預けにしよう。ボクは覚醒めたばかりだ、少し休養を取りたい」

「そうはさせない。ここで決着をつける！」

ローズは薔薇の鞭を構えた。本当にやる気のようにだな。

「ならば相手をしよう」

銃を構えようとしたとき、ボクとローズの間にナギサが割って入った。

「やめてリヨウもマナお姉ちゃんも、なんで戦わなきゃいけないの！」

ボクは構わず銃を抜いた。

「それはきつと宿命だ」

「やめて！」

ナギサが叫んだ。

一対一での戦いではローズはボクに牙を剥いた。しかし、今はナギサの悲痛な訴えに、鞭を握った手を地面に下ろしてしまった。

やはりローズは甘い。

ボクはナギサに当たたらぬように銃を放った。ナギサの想いはボクを存在させる糧だ。滅ぼすわけにはいかなかった。

ローズも意を決したのか、弾丸を躲しながらボクに襲い掛かって来た。

撓る鞭を舞うように躲しながら、ボクはローズに話しかける。

「もう戦いは止めにしたくないか、こんな戦いなんてくだらない」

「私が戦うのを止めたらお前は世界を滅ぼすだろう！」

「何度言ったら理解してもらえるんだ。新しく創り直すんだよ」

「それに何の意味がある？」

「そうしたら君の愛した人も、ドリームワールドの幻影ではなく、君と融合して永遠となる」

薔薇の香が強くなったようにボクは感じた。

鞭の動きが早くなった。

足捌きが追いつかずボクの腕を鞭が切り裂いた。まったく痛みは感じない。

ボクはローズと戦いならメアたちに目を向けた。

メアはナイを捕まえようとしているようだ。

「お姉さま、わたしと行きましょう」

「イーヤーだ。ウチとアンタはぜんぜん性格が合わないから一緒にいたくないの！」

「なら、再び一つになるしかありませんわね」

「今度一つになったら、ウチが主権を握ってやるんだから！」

「それは無理ですわよ。またわたしが主権を握らせてもらいますわ」

「望むところだ！」

メアとナイが互いの手を握り合った。

結合した手から徐々に溶け合うように融合がはじまる。姉妹が真

の姿を現そうとしていた。

闇と光が渦を巻いて姉妹を呑み込み、突風が当たりには吹き荒んだ。戦っていたボクとローズも手を休めて風の煽りを受けた。

「ボクの予想はメアの勝ちだね」

より強い風が爆発したように吹き、この場にいた全員の躰を吹き飛ばした。

ボクはローブを風に靡かせながら床に手を付いて堪えた。物凄い妖気を感じる。

ドリームワールドが生み出した幻影。

風が吹き止み、闇と光の渦から黒いナイトドレスを着た優美な女性が這い出てきた。

夢魔 ナイトメア。

やはりメアが勝ったようだな。

「ナイトメア、別のワールドの扉を開けるか！」

ボクの問いにナイトメアは首を横に振った。

「申し訳ございません。内にいるナイが抵抗していて力が発揮できません。しかし、このワールドの別の場所ならば……」

ボクは急いでナイトメアの元に駆け寄った。

「行かせないぞファントム・メア！」

ローズの鞭がボクの足に巻き付いた。

転倒を誘発されたボクは地面に両手を付いてしまった。

すぐにナイトメアがボクの元へ駆け寄ってくる。

「ファントム・メア様！」

ナイトメアの手には闇が宿り、手刀によってボクの足に巻き付いた鞭が切られた。

立ち上がったボクはナイトメアの胸に抱かれた。

そして、闇の衣に包まれボクはこの場から逃げようとした。

## サイバーファントム「Link6ナギサ」

あたしはいたい……。

そうか……ザキマの攻撃を受けて……ただの女の子に戻っちゃった……。

白い仮面が……あたしを……見ている……。

床に優しく寝かされ、あたしは……意識が朦朧として……。

そこにいるのは……誰？

いつもあたしが抱きついていた……あの背中。

あたしはその背中に手を伸ばした。

「……リヨウ……リヨウ、リヨウなんでしょう!」

彼は振り向こうともしなかった。

ダメだ、身体が重い。

力尽きたあたしは床に顔を埋めた。

音だけが聴こえる。

鳴り響く銃声、巨大な何かが動く音、何かが爆発したみたい。

声が聴こえる。雰囲気は違うけど、これは彼の声。

立ち上がらなきゃ。

あたしは力を振り絞って床に両手を付いた。そのまま膝を付き、上半身を上げてやっとの思いで立ち上がった。

二人の姿が目に入った。ナイと仮面の人……。

「ファントム……メア!」

ナイはそう彼のことを呼んだ。

でも違うの、彼は……彼は……。

あたしは一生懸命、ふらつく足で彼に駆け寄った。

「目を覚ましてリヨウ!」

心の底から声を出した。届いてあたしの声。彼の心に届いてお願い。

あたしの行く手を阻む影　メア。

「ファントム・メア様が復活した今、もう貴女はもう用済みよ」

メアの手から放たれた見えない風にあたしは飛ばされ、何度も床に転がって全身を打った。

あたしが再び立ち上がろうとしているとき、大狼君の声が耳に飛び込んできた。

「これはいつたいどういうことだ！」

それに対して彼は首を傾げた。

「さあ、ボクにもよくわからない。メア、説明してくれないかな、なぜボクが復活したのか？」

あたしはメアに視線を向けた。

「全ては憎きファントム・ローズによって、ファントム・メア様が滅ぼされたことにはじまります」

あの時、ファントム・ローズはあたしの前に現れて言ったの。

ファントム・メアは滅びた。つて。

あたしは信じなかった。だって、そんな……ファントム・メアは……。

そして、ファントム・ローズもあたしの前から姿を消した。

でも、あたしは納得できなかった、何もかも。だから、この世界で情報を集めることにしたの。

「そつだ、ボクは確かに滅びた筈だ。では、今ここにいるボクは何者だ？」

ファントム・メアの問いに、即座にメアが答える。

「我が君、ファントム・メア様でございます」

どうして、またファントム・メアなの？

悲しすぎる。悲しすぎるよ。

ナイが壁際に逃げて叫ぶ。

「全てはメアが仕組んだことだったの！ ウチとメアが ハザマに駆けつけたときには、もうすでにアナタは断片化して消えかけていた。その断片をメアは掻き集めて、ブレスレッドに加工したの」  
ファントム・メアがブレスレッドをあたしたちに見せた。

「これだな？」

そのままファントム・メアはメアに顔を向けた。

「それからどうした？」

「ホームネットワークからはすでに、ファントム・メア様の元なつた者は完全に消滅しておりました。そこで私は新たな器をドリームワールドに見出したのです。ホームネットワークから発せられる想いが、ドリームワールドであの者を創り上げた」

「それがレイか……」

「その者は他人が創り上げた思念でしかありませんわ。ですので、本当に器になるか賭けでございました」

あたしがレイに感じていた気持ち。

レイからリヨウを感じた。けど、何か違った。レイはレイであつて、リヨウではなかった。

花の香がした。そう、薔薇の香。

そして現れたのはあのピエロ。でも、わかっているの。この香はあの人の香。

ファントム・メアもピエロの正体に気付いているみたい。

「鳴海マナ……いや、ファントム・ローズだな」

「そうだ。私の名はファントム・ローズ」

ピエロは一瞬にして、ファントム・メアとそっくりな姿になった。でも、これも違うの。ファントム・ローズはきつとあの人。薔薇が好きだったあの人。

無機質なハズのファントム・ローズの白い仮面が、なぜかあたしには哀しそうな表情に見えた。

「私は賭けに負けたのだ。私は君が春日リヨウに戻ることを心から願っていた。しかし、君は再びファントム・メアとして目覚めてしまった」

どうして……どうしてリヨウは、またファントム・メアになつてしまったの！

あたしはリヨウが好きだった。リヨウはあたしより一個上の先輩。

いつも一緒にいたのに、あんなにも楽しかったのに、突然リヨウはあたしの前から消えた。

そして、代わりにファントム・メアが現れた。

ファントム・ローズとファントム・メアが向かい合った。

「ファントム・ローズ、ここでの勝負はお預けにしよう。ボクは覚醒めたばかりだ、少し休養を取りたい」

「そうはさせない。ここで決着をつける！」

「ならば相手をしよう」

なんで二人が戦わなきゃいけないの！

「やめてリヨウもマナお姉ちゃんも、なんで戦わなきゃいけないの！」

あたしが割って入っても、ファントム・メアは銃を抜いた。

「それはきつと宿命だ」

「やめて！」

あたしは心の底から叫んだ。

銃弾があたしの真横を抜けた。

あたしには二人の戦いを止められない。どうしていいかわからなくて、あたしは地面にしゃがみ込んで、目を瞑って視界を閉ざした。

何も見たくない。

何も聞きたくない。

あたしは両耳を手で塞いだ。

薔薇の香がする。

近所に住んでいたあたしのお姉さんみたいな存在。庭で薔薇の花を育てていた。どうして薔薇が好きなのって聞いたこともあった。でも、哀しい顔をして笑うだけで、何も答えてくれなかった。

……なにッ、この感じ！

あたしは自分を閉ざすのを止めて立ち上がった。

強い風にあたしの身体は吹き飛ばされ、床にお腹から落ちた。

そのまま顔を上げると、喪服のような黒いドレスを着た妖艶な女性立っていた。

あいつは…… ナイトメア！

何度もあたしたちを苦しめたナイトメアが、どうしてここに？

ファントム・メアがナイトメアに駆け寄る。それを止めようとするファントム・ローズの薔薇の鞭。

「行かせないぞファントム・メア！」

ファントム・メアは足に鞭を巻かれた倒れたけど、それをすぐにナイトメアが助けに入った。

「ファントム・メア様！」

鞭を切つてファントム・メアとナイトメアが逃げようとしている。

ダメ、行つちやダメ！

「行かないで！」

あたしの声にファントム・メアは顔を向けた。でも、彼は何も言わない。

ファントム・メアの腕に鞭が巻き付いた。ファントム・ローズの鞭じゃない、大狼君の鞭だ。

「ファントムの存在はこの世界でも噂になっている。ファントムの真の意味とはなんなのだ？」

ファントム・メアは逃げることを中断した。

「ワールドネットワークから『弾かれたモノ』の総称。キミはどうやらこの『世界』について興味があるようだね」

「私はサイバーワールドが電影であることを知っている。そして、私はどうやら本来この住人ではないらしい。では、私は何者なのか？ 私の本来あるべき世界はどこか？ そもそも世界の成り立ちとは？ 現実と虚構の境は何なのか？」

「ならばボクと共に歩むかい？」

「どんな道を歩むと言うのだ？」

「今ある世界の破壊と、新たな世界の創造。キミがこのサイバーワールドでやるうとしていたことと同じだよ」

これに大狼君は首を横に振って答える。

「……最初はそうだったが、ある事実に気付いてからは目的が変わ

った。真に破壊を好み、自分の世界を創ろうとしていたのはザキマだ。私は純粹に全てを知りたかった。そのために権力が必要だっただけのこと」

ザキマに全ての罪を擦り付けているのか、それとも大狼君はただ純粹に探求したかっただけなのか、それはわからなかった。

大狼君は問いを続けた。

「世界の破壊と創造とは具体的にどういうことだ？」

「世界を力オスに還すほどの破壊。そして、創造とは全ての融合。全ての存在が一つに溶け合い、全ての感情や想いを共有する」

「全てが融合した時、そこに個々の自我はあるのか？」

「個の意思は全の意思となり、全の意思は個の意思だよ。自我なんてものは超越している」

ファントム・ローズの仮面が哀しい顔で口を挿む。

「誰がそんな世界を望む？」

「ボクが望む。全てが交われれば、独りで悲しむこともなくなるから……」

あたしは望まない。

よくわからないケド、それは違うのと思うの。自分がいて、傍に誰かがいることが大切だと思うの。同じ存在になっちゃダメなの。自分がいて、自分とは違う誰かがいることが、存在していることが、それが重要だと思うの。

ダメ……頭がごちゃごちゃ。

けどね……。

「あなたの考えは間違ってると思う」

あたしはファントム・メアに向かって言った。

大狼君もそれに続く。

「私の考えと不一致があるようだ。ファントム・メア、君は私の敵だ」

ファントム・メアの仮面が哀愁のこもった薄笑いを浮かべた。

「哀しいね、世界にはボクの敵ばかりいる。なぜみんなボクの言っ

てることを理解できないんだ。それがみんなの幸せなのに」

「あたしは幸せだとは思わない！」

あたしの言葉にファントム・メアが質問をぶつける。

「なら、君にとって幸せとは何だ？」

「あたしの幸せは……大切な人たちが傍にいること」

「傍にいたいなら溶け合えばいい。ずっと一緒にいられるじゃないか！」

「違うの、それは何か違うの……」

「やっぱりいくら話合ってもムダみたいだね。行くよナイトメア」

闇の衣に包まれ、誰も止める間もなく、ファントム・メアとナイトメアは姿を消失させた。

そして、ファントム・ローズもいつの間にか、薔薇の香を残して消えていた。

残されたのはあたしと大狼君だけ。

あたしはいつたいこれから……？

大狼君によって通された個室。

「そのソファに座りたまえ」

促されるままにあたしはソファに腰掛けた。

とても質素な部屋。

金属の壁に囲まれ、置いてあるのはデスクとデスクトップパソコン、テーブルとその上に置かれたノートパソコン、あとはあたしの座ってるソファだけ。

大狼君はデスクの椅子に座った。その姿のどこからも、あたしに対する敵意を感じない。ケド、あたしはこいつのことを信用しているワケじゃない。

黒い狼団のトップ。サイバーワールドの人々を苦しめ、破壊の限りを尽くしてきた。あたしはこの世界に来て、それを目の当たりにしている。

大狼君は直球であたしに聞いてきた。

「私を敵だと思っているか？」

「わからない。ケド、味方とは思えない」

正直に答えた。

大狼君の口元が笑った。

「私を敵だと思おうが、恨み憎まれようが、それは構わない。ただ、今は力を合わせたいと思っている」

「なぜ？」

「私よりも事情に詳しいからだ。私はこの世界が好きだ。この世界がなくなる、あるいは別の物になることを私は望まない」

あたしだってこの世界が嫌いじゃない。この世界だけじゃなくて、あたしの世界だってなくなって欲しくない。

でも、大狼君には協力できない。だって敵だったのに、手を繋いで仲良しになんてなれない。

「あなたは黒い狼団のトップでしょう？ あんなにも人々を苦しめてきたのに、そんな人に協力なんてできない」

「純粹に私はこの世界の情報を握りたかっただけだ、そのために必要なことをしたまで。それにここの住人たちは電影でしかない、生きていないのだよ」

「それは違う。あたしは世界というモノを知って、電影、幻想、夢も幻も、生きているとか、生きていないとか、そういうモノで計れるモノじゃないと思う。存在していることが重要なもの」

大狼君は黙り込んでしまった。

そして、とても長く感じた時間を破って大狼君が口を開いた。

「君はこの世界の人間ではないのだろうか？」

「うん、違う世界からあたしはこの世界にやって来た」

「やって来たという言い方をするといいことは、その世界での記憶もあるということだな。私もこの世界の住人ではないらしいが、自分が出た筈の世界の記憶がないのだ」

あたしにはちゃんとある。家族もいる、友達もいる、学校にだってちゃんと通ってる。向こうでの生活があたしにはある。

大狼君の口から重たいため息が漏れた。

「私はいつも疎外感を感じていた。ここは自分の本来暮らす世界ではない。帰るならば、どこに帰ればいいのか？ そのためとにかく私は情報が欲しかった」

「だからって、あなたのやって来たことは間違ってる」

「果たしてそれはどうかな？」

「間違っているものは間違ってる」

「君は私にはじめて会ったときに、情報が欲しくて来たと言ったはずだ。私から情報を得るということは、私のして来たことを肯定することになる」

「それは……」

なんか言いくるめられる感じ。

泥棒から盗品だと知っていて品物を買ったら罪？

大狼君が情報をより多く手に入れる方法が、別にあつたのかどうかわからあない。効率的だと判断したから、大狼君は黒い狼団なんて組織を作ったんだと思う。大狼君の力を借りようとしたあたしには、本当に彼を咎める資格はないのかなあ？

口ごもってしまったあたしに大狼君は言う。

「君が肯定できないのは、私が悪で、自分は善だと思いたいからだ。一般論としての善悪は民衆が決めること。しかし、真の善悪とは人それぞれの胸の中にある。間違いだと思いつながらすること、正しいと信じてすることは大いに違う。私は自分の進んだ道は正しいと思っている」

この人のこと苦手かも。

本当は大狼君って悪い人じゃないのかも。なんて思っちゃう自分がいるし。

黒い狼団がすることを通して、そのトップにいる大狼君を憎んでいた。なんてヒドイことをする人なのって、思っていたのはたしか。けど、フィルターを通しての大狼君と、実際に会った大狼君にはギャップがあつた。

あたしが想像の中で憎んだ大狼君のイメージは、実際はザキマが持っていたイメージだった。

はじめて会ったときも、戦う気満々だったあたしに対して、どちらかという情報を求めようとしていただけだったような気がする。二度目に会って剣を交えた時も、戦うことよりも対話を求めてきた。……何かいつの間にか大狼君を正当化しようとしてるし。

あたしの中で、大狼君を正当化しようする考えが働いてた。これってもしかして大狼君の術中にハマってる!?

泥棒から盗品だと知っていて品物を買ったら罪?

その答えはあたしの中で出なくなってしまうていた。前だったら、すぐに罪って声を大にして言えたのに、なんかわけわかんなくなっちゃった。

それよりも今大切なこと……ファントム・メア。

あたし独りの力じゃどうにもならないのはわかってる。

もおわかった、こうなったらちよつと考えを吹っ切ったほうがいいよね、うん。

「あなたと協力します。まずはファントム・メアの居場所を突き止めましょう」

信じたとか、信じないとか、そういうことじゃなくて、今のあたしには大狼君の力が必要。ただそれだけ。

サイバースコープの奥の瞳は見えない。けど、その下で大狼君の口は微笑んでいた。

「ありがとう」

まさか『ありがとう』なんて言葉が出るなんて、ちよつとビックリしちゃった。

うわあ、なんかまた本当は悪い人じゃないんじゃないかって、そういう気持ちが強くなっちゃったじゃん。信じない、まだ信用したわけじゃないから。

もつとあたしが冷静にね、そう、物事を進めればいいんだよね。

「ファントム・メアの居場所を突き止める方法はある?」

「ファントム・メアは、このサイバーワールドでは存在が認識されない筈だ。道化に扮していたファントム・ローズがそうだった」

「だったら探す手がかりが掴めないってこと？」

「機械的には感知できないが、目で見えることも触れることもできる存在しているが、存在していない、それが彼らの本質だ」

「だから探す手がかりないんでしょ？」

「ある」

そこを早く言ってよね。

あたしは大狼君の次の言葉に耳を傾けた。

「透明な物体は、その周りを算出することにより求められる」

それって算数ですか、それとも数学でしょうか？

言ってることはなんとなくわかるんだけど、どうやって計算したらしいのかとか……数学得意じゃないからわからない。

「ああ、なるほどねえー。ファントム・メアの居場所はあなたに任せただから、ガンバツて！」

ガッツポーズをしてあたしは大狼君を激励した。わかっているフリしたケド、ぜんぜんわかんないから、大狼君に全部任せることにした。

大狼君はあたしに背を向けて、デスクトップパソコンに身体を向けた。キーボードをちよつと叩いてパソコンが起動したところを見ると、スタンバイ状態で待機させてたみたい。

左手でキーボードを叩く横で、右手は見えないキーボードを宙で叩いてるみたい。たぶん、デスクトップと、サイバースコアに映ってるほうを同時進行でやってるんだと思う。

……この人アホだ。

パソコンをデスクに複数置いてる人はたまにいるけど、二つのキーボードを同時打つ人はいないと思う。……やっぱりアホだ。手を休めた大狼君が回転椅子を回転されてこっちを向いた。

「行くぞ」

「えっ、もうわかつちやっただの？」

「それほど遠くではなかったようだ」  
さっさと部屋を出て行っちゃ大狼君。そのあとをあたしは小走り  
で追った。

大狼君の運転するスポーツカーに乗って街を走った。運転しながら  
ずっと、ドロップ食べてる。

助手席から見る街の様子。騒がしくて、何か様子がおかしいよう  
に感じる。

信号待ちで車が止まったので、あたしはじーっと外の様子を見る  
ことができた。

……あつ！

人が弾け飛んだ。人自身が弾け飛んだんじゃなくて、まるで着て  
いた服が弾け飛んだみたいに爆発して、その中から別人が現れたの。  
あつちでは身体がドロドロに溶けて、中から別人が出てきた人が  
いる。

もしかして、ネット上の自分が崩壊してるの？

あつちでは美少女が男の人に変わってる。

大狼君も街の異変に気付いたみたい。

「世界のバランスが崩れはじめているようだな」

「みんな化けの皮が剥がされていく。ネカマをやっていた人は、男  
だつて正体がバレるし、みんなが付いていたウソが全部バレちゃう」

「まさかファントム・メアの仕業なのか？」

「……わからない」

でもタイミング的に、何か関わりがあるって考えるのが普通だと  
思う。

ケド、もし本当にこれがファントム・メアのことだったとし  
て、何の目的なの？

ネットの匿名性がなくなる。キャラクターを演じることができな  
くなる。それってネット社会の崩壊を意味してるような気がする。

発進した車の前に、突然『ゴースト』飛び出してきた。まだ走り

出して間もなかったから、ぶつからずに済んだけどハズなのに……  
『ゴースト』は地面に蹲って動かない。

大狼君はギアをチェンジしてバツクしようとした。ケド、間に合わない。

半透明だった『ゴースト』が明確化して、怪物に変化してしまった。毛の生えた獣人みたいな姿。車のフロント飛び乗ってきて、長い爪と鋭い牙であたしたちに襲い掛かってきた。

再び大狼君はギアをチェンジして、物凄いスピードで車は前に走り出した。

バランスを崩された獣人がフロントガラスに激突した。そのまま獣人はフロントから転げ落ちて、アスファルトの地面に激突して遙か後方。

「なんだったの？」

あたしは驚いて声をあげた。

「さてな、私たちに敵意があつたことは確かだ」

窓の外を見ると、『ゴースト』たちが次々と怪物に変身していくのが見えた。さっきみたいな獣人だけじゃない、ドロドロのスライムみたいな奴とか、巨大な怪鳥みたいなとか、昆虫みたいな奴まで…… 怪獣大百科状態。

「でも、どうして『ゴースト』たちが……？」

「彼らはこの世界では存在が弱い。あの状態から別のモノに変われる可能性がいくつもある。加工し易い分、マテリアルとして最適なのだよ」

そういえば…… 黒い狼団のアジトであたしが見た奇怪な実験みたいなこと。『ゴースト』から戦闘員を作っていた。

大狼君がサイドミラーを見た。

「後ろからバイクの列が追ってくる」

あたしは開いた窓から身を乗り出して後ろを覗いた。

赤いハチマキをした戦闘員を先頭に、黒い狼団の戦闘員がバイクに乗って追いかけてきてる。

「あなたが呼んだの？」

尋ねると大狼君はアクセルを踏みながら言う。

「奴等の様子は明らかに可笑しい」

バイクに乗った戦闘員は電磁ロッドを振り回し、あたしたちを威嚇しているようだった。

二人乗りしてる後ろの奴がバズーカを構えた。

危険を叫ぶよりも早くバズーカは撃たれ、あたしたちの乗った車の真横をすり抜けて、対向車線を走っていたトラックに当たって大爆発を起こした。

ハンドルを急に切った車内が揺れた。

「運転を代われ」

あたしは大狼君の言葉に耳を疑った。

「はあ？」

「運転くらいできるだろう」

「車の免許なんて持つてるわけないじゃん。だって実年齢十六歳だよ？」

「レースゲームくらいやったことあるだろう。この世界の運転などその程度だ」

「本当？ ゲームとかちょー得意だケド」

こう見えてもあたしゲーム大好きなの。コンシューマーからアーケードまで、ゲーセンに月にどれくらいつき込んでることか……。

何かもう大狼君つてば無理やりあたしに運転を代わらせて、窓から這い出して屋根に登ろうとしてるし！

仕方なくあたしは運転を代わって、ハンドルをしっかりと持ってアクセルを踏んだ。

車が急に大きく蛇行した。

「しっかりと運転しろ！」

屋根の上から怒声が聞こえたケド、仕方ないじゃんね。この車、ハンドル操作が難しく、すぐに車体のバランスが崩れるんだもん。バックミラーに目を配ると、戦闘員を乗せたバイクに電撃弾がヒ

ツトして、ボーリングのピンみたいに次々と倒れていくのが見えた。  
……あつそうだ。

「どこに行けばいいのかあたし知らないよ！」

「そのまま走って」

大狼君が最後まで言う前に、真横で爆発が起きて車体が大きく揺れた。

「だいじょぶ大狼君！」

「案ずるな、このまま真っ直ぐ走って高速に乗れ」

「オツケー」

後ろから追ってくる戦闘員の数が増えるような気がする。まるでゴキブリ。

群を抜け出してきたバイクが車の真横に並走してきた。

電気コードが伸びるのが窓から見えた。大狼君が放った電気コードの鞭は戦闘員にヒットして、運転を誤ったバイクは大回転しながら後列で大爆発を起こした。

なんかどんだん大惨事なってる感じ。

「奴等だ！」

大狼君が叫んだ。

「どこ？」

「今、左の角から出てきた二台のバイクを見る！」

二台のバイク……いた！

黒い服のナイトメアと、その前を先導するファントム・メア姿を発見した。二人はバイクに乗ってあたしたちの前を走っていた。

あたしは大きな声で呼びかける。

「スピード出すから落とされないでね！」

ギアをチェンジして床が抜けるほどアクセルを踏んだ。

前を走る車を次々と抜き去り、バイクをすぐ目の前に捕らえた。

ナイトメアが振り返った。近くで見ると、その喪服みたいなドレス、大型バイクと絶対似合っていない。

急にナイトメアがバイクのスピードを落として、車の横に並走し

てきた。そして、ナイトメアの姿がバイクから消えた!?

屋根の上で大きな音がした。まさか屋根に乗った?

なんか屋根の上が騒がしくなってきたみたい。スポーツカーの屋根って絶対足場が悪いのに、よくそんなところで戦うなあ。

「うわっ!」

あたしは声をあげた。急にナイトメアがフロントに乗って、すぐにまた屋根に戻っていった。

天井が近いから、上の音がスゴク響いてくる。

大狼君とナイトメアの会話が聞こえてきた。

「貴様らはこの世界で何をしようとしているのだ!」

「クスクス、この世界はドリームワールドに吸収されるのよ」

「ドリームワールドに吸収だと?」

「私が支配する領地を拡大するのよ」

「……それがファントム・メアの目的か?」

「クスクス」

ナイトメアは笑っただけで、それ以上は答えようとしなかった。

道路を走り抜けて、ついに高速の入り口が見えてきた。料金を払

わずにファントム・メアは料金所を突っ切った。

あたしも料金なんて払ってらんないから、あくまで仕方なく料金所を見なかったことにした。

ああっ!

ナイトメアが後方に吹き飛んだ。

バックミラーに映るナイトメアは、まるで魔鳥のようにドレスを揺らしながら、後方を走っていた戦闘員の首に抱き付いて、そのまま戦闘員を引ずり落としてバイクを奪った。ありえない。

さっきからファントム・メアに追いつこうとしてるのに、車を縫うように走るからぜんぜん追いつけない。それどころか少しずつ引き離されてる感じ。

後ろからは戦闘員たちを追ってくるし、ナイトメアまで迫ってる。前方に大狼君の放った電撃弾が飛んだ。ファントム・メアを外れ

た電撃弾は関係ない車に当たって、そのまま車はハンドル操作を誤って壁にぶつかった。

前で事故が起きたせいで次々と玉突き事故が起きた。横を向いた車が行く手を阻んだ。

ダメツ、ぶつかる！

ブレーキをかけながらハンドルを切った。ケド空でも飛ばない限り避けられるハズがない。

豪快な音を立ててフロントが前の車に突っ込んだ。

衝撃であたしの首がガクンってなって、大狼君の身体が大きく前に飛ばされた。

すぐに戦闘員とナイトメアが追いついてきた。

もう車は使えない。あたしは急いで車から降りた。

バイクを降りて近づいてくるナイトメア。その後ろには戦闘員を引き連れている。戦闘員の数はざっと数十匹まで膨れ上がっていた。あたしは何も武器を持っていなかった。ナギじゃないあたしはもう戦えない。だから刀も置いてきてしまった。

艶やかに微笑みながらナイトメアがあたしに詰め寄ってくる。

「ファントム・メア様の邪魔をするようであれば、ここで死んでもらうしかないわね」

あたしは後退りをしながら、手に汗を握った。

大狼君があたしを押し退けて前に出た。

「これでも喰らうがいい！」

そう言いながら丸い物体がナイトメアに投げつけられた。けど、手の甲で軽く弾かれて玉は後ろの戦闘員に当たった。

次の瞬間、玉が孵化して金属のワームが戦闘員の腹を突き破った。腹を喰らったワームは戦闘員の体内で増殖して、何十匹と増えて次々と戦闘員たちを襲いはじめた。

「キーッ！」

悲鳴を上げなら戦闘員たちが逃げていく。

ナイトメアの足元に散らばったワームが彼女に襲い掛かる。ケド、

ナイトメアの表情は冷たく涼しい。

「デイファイ！」

ワームたちが一気に燃え上がった。地獄の業火に焼かれ、金属が熔けてアスファルトにこびりつく。

大狼君の手から電撃弾が放つ。ナイトメアが胸の前に手を突き出し、電撃弾が彼女の手の平に呑み込まれてしまった。

「まだ無駄な抵抗をするおつもり？」

冷笑を浮かべたナイトメア。

あたしはアスファルト蹴り上げ走り、地面に落ちていた電磁ロッドを拾い上げた。

だいじょぶ、ちゃんと戦える。

電磁ロッドを振りかざし、ナイトメアの頭に叩き込もうとした。バシッ！

電磁ロッドは軽かるしく片手で受けられた。すぐに電流を流そうとスイッチを押そうとしたケド、その前にあたしは平手打ちを喰らって地面に転がっていた。

薔薇の香がした。

どこからともなく、ファントム・ローズが現れた。

「ナギサを傷つけさせはしない」

薔薇の鞭がナイトメアに襲い掛かる。

瞬時にナイトメアは飛び退いたケド、薔薇の鞭はまるで生きているように執拗に追いかける。

薔薇の棘がナイトメアの頬を切った。滲み出す漆黒の血。

手の甲で血を拭ったナイトメアは微笑んだ。

「勝負はお預けにしましょう」

ナイトメアはあたしたちに背を向けて、高い塀を越えて姿を消してしまった。

大狼君は近くに転がっていたバイクを立ち上げ、あたしを置いていこうとしていた。

「ちょっと、あたしを置いていく気？」

「足手まといだ」

「足手まといって、あなたが協力して欲しいって」

大狼君を乗せたバイクは走り出してしまった。

あたしは堪らず彼の背中に叫んだ。

「そっちが協力して欲しいって言ったのに、この気分屋ッ！」

信じらんない。

無神経なの、自己中なの、バカなのアホなの、所詮あたしは都合のいい女なワケ？

スゴクあつたま来た。

でも……あたしは戦えない。ナギじゃないあたしは役立たずなのかもしれない。

あたしだって、ファントム・メアのこと……ううん、リョウのことを……。

気付いたらまたファンム・ローズは消えちゃってた。

あたし独りぼっちになっちゃった。

どうしていいかわからないまま、戦闘員の残していったバイクに乗り、パーキングエリアまで走った。

パーキングエリアはとても静かだった。まるで廃墟のような静けさ。

ゲームとか映画だとアンデッドが出て来る雰囲気。

……あつ、ホントになんか出てきた。

足や手、中には頭まで、身体の一部を食いちぎられた人たちがゾロゾロ出てきた。予想してた展開どおり……当たっても嬉しくない。逃げようとあたしが反転すると、後ろからもすでにゾンビっぽいのが沸いていた。パーキングエリアの駐車場は、ゾンビさんたちの集会場になっていた。

薔薇の香。

あたしに襲い掛かってきたゾンビの胸が真つ二つに割れた。グロイよお。

次々とゾンビたちが切り裂かれて地面に倒れていく。切られても動いているけど、足や手を切り離されたら、さすがに動けないらしい。

ゾンビたちを一掃して、その中に残ったのはファントム・ローズ。

「大丈夫か？」

「うん、ありがとう」

お礼を言うと、ファントム・ローズは背を向けて、姿を消そうとしていた。

「待つて……マナお姉ちゃん」

あたしの呼びかけに、ファントム・ローズは背を向けたまま動かなくなつた。

すぐにあたしはファントム・ローズの背中に抱きついた。

「その仮面の下はマナお姉ちゃん何でしょう？」

「……………」

ファントム・ローズは黙っちゃって、何も答えてくれなかった。

「あたしね、小さい頃からお姉ちゃんに助けってもらってばかり。でもね、あたしも戦いたいの」

「……………早く自分の世界に帰れ」

「イヤッ、リヨウを連れて帰るの、お姉ちゃんのこと。昔のようになんてムリだってわかってる。でも、少しでも昔のように、みんなが幸せに暮らせるように……………」

「彼はファントム・メアとして覚醒めてしまった」

「絶対に元に戻す！」

「……………そうか」

お姉ちゃんの全身から香ってくる薔薇の香。

はじめてファントム・ローズに出会ったとき、あたしはそれがお姉ちゃんだなんて夢にも思わなかった。声も違った、シルエットも違って見えた、何もかもお姉ちゃんとは別人に見えた。

けれどね、もしかして……………と思いはじめた瞬間から、あたしに見えるファントム・ローズは少しずつ変わっていった。

でも、まだ白い仮面を被ったまま。

「お姉ちゃん……」

「私はファントム・メアを止めなくてはならない」

抱いていたハズのファントム・ローズが胸の中から消えた。

舞い散る薔薇の花びら。紅い花びらに埋もれ、一振りの刀が落ちていた。

微かな声があたしの耳に届いた。

「サイバーワールドの法則は完全に失われたわけではない」

あたしは刀を拾い上げた。

この世界は狂いはじめている。住人たちの仮面が剥がされ、『ゴースト』たちが怪物と化す。

ナギは破壊されてしまった。けれど、あたしは大丈夫。今のままでも戦える。

巨大な咆哮が聴こえて、あたしは慌てて辺りを見回した。

四本足の巨大な影。獅子のような引き締まった肉体。頭からは山羊のような角が生えている。

鋭い歯が並んだ口からは、人間の足らしき物が飛び出していた。

身体の一部が消失したゾンビみたいな人たちが思い浮かんだ。

あたしはここで喰われるわけにはいかない。

抜刀してあたしは巨大な魔獣に斬りかかった。

行ける気がした。

「円月斬り！」

刃は魔獣の前脚を斬った。それと同時にあたしは殴られ、叩き飛ばされてしまった。

地面に片手を付いてあたしは堪えた。

だいじょぶ、あたし負けない。

再び刀を構えて飛び掛ろうとした。そのとき、魔獣が口から炎を吐いた。

「ファイアオール！」

ダメかと思ったとき、あたしの前に現れた長髪の男の人　大狼

君だ。

ファイアウォールが炎を防いだ。

大狼君はあたしに何も言わず魔獣に向かって行った。

巨大な口を開ける魔獣。大きく空気を吸い込んで、また炎を吐くつもりだった。

大狼君の手が電気を帯びて火花を散らす。

「これでも喰らうがいい！」

電撃弾が魔獣の口内に放たれた。

内側から電撃を喰らい魔獣が咆えた。

ウオオオオオン！！

巨大な身体を横転させた魔獣が消えていく。砂流れるようにプロ  
グラム言語が消える。

あたしは大狼君の背中を見つめた。

「助けに来てくれてありがとう」

「別に助けに来たわけではない」

もぉ、素直じゃないんだからぁ。

冷たい風があたしの背筋を撫でた。この感じ……まさか！

ナイトメアがそこには立っていた。

「ファントム・ローズはもう何処かに消えてしまったようね」

逃げたと思ったのに、まさかファントム・ローズが完全に消える  
まで待ってたの？

大狼君は電気コードを構えた。けれど、ナイトメアの視線はあた  
しだけを見ていた。

「貴女はファントム・メア様を存在させる為に不可欠なのよ。わた  
しと来てもらうわ」

ナイトメアの手が差し伸べられた。その手を掴む気なんてない。  
目指す場所は同じでも、捕まってそこに行くつもりはない。

あたしは刀を構えた。

ナイトメアの綺麗な唇が嗤った。

「愚かね」

風に流され溶けるように、ナイトメアの姿が消えた。姿を消したときは……だいたい背後から現れる。

と、思ってた。あたしは刀を後ろに向けて難いだ。

空ぶった。いないじゃん。

「上だ！」

大狼君が声をあげた。

すぐに見上げると魔鳥のようにナイトメアが降下してくる。

あたしは切っ先を天に向けた。

「稲妻衝き！」

必殺の一撃はナイトメアの心臓を抜けて背を貫いた。

余裕の笑みを浮かべるナイトメア。

「夢幻の住人でない貴女にわたしが傷つけられると思うて？」

まるで水に落とした墨汁のように、ナイトメアの身体が広がって、あたしを丸呑みしようとする。

飛んで来た電撃弾がナイトメアの身体を拡散させた。

あたしは急いでその場から飛翔して、大狼君の横に並んだ。

黒い霧が密集して、再びナイトメアの身体になった。

この刀ではダメージを与えられないの？

そんなハズはない。きつと、何か方法があるハズ。

あたしは無我夢中でナイトメアに斬りかかった。

刃がナイトメアの肩に食い込んだ。けれど、まるで霞を切っているよう歯ごたえ。切っ先は地面に落ちてしまった。

すぐに大狼君の鞭が風を唸らせた。

華麗に舞いながら電気コードの猛攻を躲すナイトメア。その表情に焦りの色はまったくくない。

「ナイトメアとなつたわたしに勝てる者などいないわ」

「驕りは身を滅ぼす」

風を切った電気コードが火花を散らしながらナイトメアの腕にヒツトした。

ドレスの袖が焼け焦げ、赤くただれた皮膚が見えた。けれど、そ

の傷もドレスもすぐに元通りに戻ってしまった。

それを確認した大狼君は満足そうに頷いた。

「ダメージを与えられないというわけではないらしいな」

「貴方の魂はすでに半分以上、夢幻の海に浸かっている。この世界に長く居過ぎたのね。だからわたしに損傷を与えることができる。」

しかし、この程度の微々たる傷ではわたしは倒せなくてよ」

「ダメージを与えられることがわかればそれで結構」

ナイトメアとなった彼女は本来の力を取り戻し、完全な夢幻の住人となった。それを倒すにはどうしたらいいの？

あたしは刀に祈りを込めた。

お願い、マナお姉ちゃん力を貸して。

薔薇の香がした。それを感じたのか、ナイトメアを辺り見回す。けれど、ファントム・ローズの姿はどこにもない。

刀が突然、眩い光を放った。刃に刻まれていく薔薇の紋様。長細かった刀がズツシリと重くなり、その刃はあたしの顔を映せるほど太くなった。

……力を貸してって言ったけど、重くて使えない。

お姉ちゃんのドジ！

だいじょぶ、あたしにならできる。

できるもん！

大狼君の電気コードを躲すナイトメアに向かってあたしは駆け出した。

重くて地面に付いてしまっている切っ先から火花が散る。

ナイトメアが嘲笑う。

「見た目だけ大そうになっても、わたしには敵わないわよ」  
クスクス嗤うナイトメアの眼が急に見開かれた。

なぜかナイトメアの動きが止まった。

その隙に電気コードが巻き付き、さらにナイトメアの身体を拘束する。

そして、あたしは思い込めて刀を振り上げた。

「このバカ女!!」

股の下から頭の先まで、ナイトメアの身体が真っ二つに割れた。そして、あたしの足元で二つに割れた身体が別の形に変形しはじめた。

まさか……？

割れた身体は二人の少女　ナイとメアになったのだ。

いち早く立ち上がったメアが苦虫を噛み潰したような顔をする。

「おのれナイめ……」

闇色の渦を巻きながらメアの身体が霞み消える。

「待て！」

大狼君がメアを掴もうとしたが遅かった。

元の大きさに戻った刀を鞘に収め、あたしは地面に倒れているナイを抱き起こした。

「大丈夫ナイ？」

「ううん、ううん……あまりよくない……メアにだいぶ力を……」  
ぐったりして、スゴク疲れた顔をしている。

もしかしてナイトメアの動きが突然止まったのは、ナイが助けてくれたから？

大狼君がナイに訊く。

「メアはどうなった？」

「空間転送、つまりワープしたみたい。けど、メア独りじゃ力が安定しないから、そんなに遠くには飛べないと思うし、座標も安定しないから飛ぶ場所も自分じゃ選べない」

「滅びてはないのだな」

大狼君は近くにあった車の窓ガラスを割り、ドアを開けると何か細工をしてエンジンを掛けた。

「行くぞ」

と、大狼君はあたしたちに顔を向けた。

「行くつて、さっきはあたしのこと置いていったのに、なんかムカツク」

「足手まといにならないと証明されたからだ」  
なんか打算的。

ナイはナイトメアとしてメアと意識を融合させることにより、メアがどこに向かおうとしているのか知った。ケド何を企んでいるかのまでは、意識をブロックされてしまったためにわからなかったらしい。

そしてあたしたち三人を乗せた車は、このサイバーワールドの中心に建つという電波塔に向かっていった。

タワーの一階にあるビルフロアが見えてきた。ガラスのドアの前には機械人が二人、見張りに立っている。

大狼君がアクセルを踏んだ。

「少々手荒に乗り込むぞ」

車は速度をドンドン上げながら、見張りを薙ぎ倒してドアを突き破った。

タイヤが悲鳴をあげて急ブレーキが踏まれた。

すぐにあたしたちは車を降りる。

ロボットたちがあたしたちを排除しようと沸いてくる。

電撃弾で一気にロボットを殲滅させながら大狼君が叫ぶ。

「どこに向かえばいい!」

それにナイが答える。

「上、とにかく上!」

エレベーターに乗ろうとボタンを押したあたしの腕を大狼君が掴んだ。

「もっと頭を使え!」

そのまま階段まで引きずられた。

まさか階段を上れてること?

「ダルツ……どこまで上るんですかあ?」

「とりあえず展望台まで!」

答えてくれてありがとうナイ。そして、そんなに元気に言わない

で、上る前から疲れる。

すぐ後ろからはロボットが追いかけてくる。

上から来るロボットは大狼君が電気コードで薙ぎ払う。倒されたロボットがあたしの行く手を阻むケド、文句なんて言って体力を使わず上り続けた。

このタワーの大きさって東京タワーと同じくらいかな。あそこの展望台って何メートルにあるんだろ……一〇〇、二〇〇かも……もつと上かな？

あはは、死ねる。

上っても、登っても、階段ばかり。

階段がやつと途切れ、そのフロアにあたしたちは飛び込んだ。

広い展望台。壁は一面ガラス張りで、外の景色がよく眺められる。そして、このフロアであたしたちを待っていたのは。

白い仮面の使者。ファントム・メアでも、ファントム・ローズでもない。

大狼君の口元が歪んだ。

「……ザキマ」

そう、あのへヴィメタな格好とモヒカン頭はザキマだ。そして、彼の仮面は半分だけだった。

「ケケケケケツ、よく来たなクソガキどもと、大狼君！」

大狼君はザキマに顔を向けたまま、嘔み潰したような声であたしたちに言う。

「先を急げ、ザキマの相手は私がする」

その言葉に重みを感じた。

先を急ごうとしたナイとあたしの前にザキマが立ち塞がるうとした。ケド、それを大狼君が許さない。

「貴様の相手はこの私だ！」

電流を帯びた電気コードが床を焼いた。

がんばって大狼君……。

ナイの後を追ってあたしは新たな階段を上った。

まあ、ホント何段階階段上げればいいワケ？

行く手を阻むロボットたちの姿はなかった。頑張ってたたしは階段を上り続けた。

そして、ついに無限とも思えた階段に終わりが見えてきた。また別のところに階段があるとか、そういうトラップないよね？

階段は一週間くらいもう見たくない。

扉を開けて入ったその先は、真っ暗な闇だった。

世界に閃光が走った。

白い渦と、黒い渦が、決して混ざり合うことなく世界を取り巻く。

まるで異次元の世界に迷い込んでしまったような雰囲気。

どこかで女の人の叫び声が聴こえた。

恐ろしい獣の咆哮も聴こえる。

古びた時計の鳴る音。

闇の中から影がヌツと現れた。

「わたしの悪夢へようこそ」

メアが月のように微笑んでいた。

そして、もう一つの影　ファントム・メアが現れた。

「ナギサを連れてくる手間が省けたな」

ここまで来たら一歩も引けない。

ケド、どうすればいいの？

あたしはリヨウに帰って来て欲しい。戦うために来たんじゃない。

あの頃のリヨウに戻って欲しいだけ。

この世界を取り囲む光と闇が暴れまわった。ケド、光のほうが多々しく感じる。横を見るとナイが苦しそうな顔をしていた。

向かい合うナイとメア。

「メアの相手はウチがする」

「お姉さま、苦しそうだけれど平気かしら、クスクス。無理もないわ、ここは私のテリトリーだものね」

「姉が妹に負けるかボケッ！　ウチが絶対この世界を光で溢れさせてやる！」

「姉と妹なんて言い方、便宜上でしょう。古来から魔力は私のほうが上よ、お姉さま」

クスクスと嗤う声が世界に木霊した。

ナイがメアと戦うなら、あたしはファントム・メアと戦わなきゃいけない。でも、彼に刀を向けることはあたしにはできない。

光と闇が激しいぶつかり合いをはじめた。

あたしは深く息を吐いて呼吸を整える。

「リヨウ、お願いだから昔のリヨウに戻って」

「ボクはリヨウではない。昔のボクはリヨウから生まれた存在だった。しかし、今は夢幻から生まれた存在 真のファントム・メア」

「違う、あなたはあたしが好きだったリヨウなの！」

「キミがリヨウのことを好きだったのは、偽りの記憶だ」

世界が整合性を取るために植えつけられた記憶。何度もその話は聞いたことがある。ケド、あたしは信じてるの、はじめは嘘だったかもしれない。

「ケド、今はこの気持ち本物だと信じてる！」

「ふふっ、偽りの記憶に躍らせているだけだ」

「違う、絶対に違う！」

あたしの気持ちは本物。だから、この気持ちでリヨウを必ず救う。本物の気持ちなら絶対救える。

白い仮面が微笑んだ。

「この際、キミの記憶が偽りだろうと、そうでなかるうと構わない。どうせリヨウはこの世界にはもういない。キミが愛した『本物』のリヨウは世界から消滅したのだからね」

「うっん、あなたリヨウ」

「この論議はどこまでも続きそうだね。いいだろう、キミがリヨウと信じるボクの手で、キミを新しい世界に誘おう」

「新しい世界……あたしを殺すの？」

「いいや、殺しはしない。キミはボクに吸収されるんだ。そして、永久をボクと共に過す」

フロントム・メアが銃を抜いた。

瞬時にあたしは刀を抜き、薔薇の力が宿った刀はその姿を変えた。太くなつた刀の側面が銃弾を弾いた。

あたしの耳元で囁くような声。

「今のはちよつとしたお遊びさ」

耳元でした声はフロントム・メア。すぐに横に刀を振ろうとした。ケド、あたしにはできなかった。

それをフロントム・メアに悟られた。

「ボクに攻撃を加えることができないのかい？」

「だって、だって……あなたはリヨウだから！」

「違うね」

「違くない。声が、だって声がリヨウだもん！」

「幻想に過ぎないよ。キミの思い込みが、そう聴こえさせているに過ぎない」

無情にもまたフロントム・メアは銃を撃った。

今度はどうにもできず、銃弾はあたしの太腿を貫いた。スゴク痛かった。涙が出るくらい痛かった。

想像以上にあたしの瞳から涙が零れ落ちた。

きつと、痛くて泣いてるんじゃないの。今まで溜め込んできたものが、全部涙になって流れ出してしまったの。

本当にリヨウを元に戻せないの？

本当にダメなの？

だったらどうすればいいの？

わからなくなっちゃった。

涙を流したらスゴク疲れちゃった。

何もかも疲れちゃった。

このままフロントム・メアに吸収されてもいいかなと思う。

あたしの身体をフロントム・メアのローブが包み込んだ。

辺りが暗くなった。

何も見えないけど、別に怖いとは思わなかった。

ファントム・メアとひとつになるんだ。

記憶が……自我が薄くなつていくのを感じた。  
遠くに小さな光が見えた。

ぼんやりと輝く光。この暗闇の中で、ただ一箇所輝く光。暖かい  
光。

……リヨウ……リヨウ……。

そうだ、リヨウだ。

あの光の中にいるのはリヨウだ！

あたしの身体が突然輝いた。

すぐにあたしはリヨウに駆け寄った。

十字架に磔にされたリヨウがいた。顔には表情のない白い仮面。

あたしは仮面を引き剥がそうとした。

でも、取れない。いくら引っ張っても取れない。

どうして、どうして取れないの？

……リヨウ……ねえ……リヨウ……目を覚まして……リヨウ……。

声を出そうとしたけど、闇に蝕まれるように音にならない。

……リヨウ……リヨウ……。

リヨウは目覚めない。

頭が急にフラフラした。

何か……頭に響いてくる。

笑い声？

耳障りな笑い声。

ケーケケケケケツッ！

はつきりと聴こえた。

その声は！？

「てめえは邪魔だ！」

何か強い力によってあたしは押し飛ばされた。

あたしは目覚めた。そして、床に手を付きながら立ち上がり絶句  
した。

床に倒れているみんな。ナイとメアがいた。ザキマと戦っていたハズの大狼君もいた。

ファントム・メアは？

いなかった。

代わりにいたのは仮面を被った別の男。それはザキマだったモノ。今はもう違う。

半分だけだった仮面は、すでに顔全体を覆い隠していた。

おそらく彼は覚醒めたの　ファントムとして。

「ケケケケケケケツッ！！」

耳障りな笑い声があたしの耳にこびりつく。

あたしは刀を構えた。

「これはいったいどういうこと！！」

「ケケケツ、オレ様が一番だって証明してやったただけだぜ」

「許さない……ファントム・メアはどこ？」

「喰ってやった」

弱った身体を震わせながらメアが立ち上がるうとしていた。

「奴はファントム・メア様の不意を衝いて……私たちを……おのれ

……ザキマめ……」

「オレ様はザキマじゃねえ。オレ様の名前はファントム・メタル、

世界を支配する者だ」

メアが創った空間が壊れていく。きつとメアの力が弱ったせいだ。

床に倒れながら大狼君は拳を握って力を込めていた。

「許さんぞザキマ……」

ゆっくりと立ち上がった大狼君の手から火花が飛ぶ。

「喰らえ！」

大狼君の手から電撃弾が放たれた。ケド、いとも簡単にファントム・メタルはそれをはじき返した。

自分の放った電撃弾を喰らって大狼君が床に膝を付き、そのまま前のめりに倒れてしまった。

「ケケケケケツッ！　いくらやっても同じだぜ。オレ様は最強なんだ

からな。オイてめえ、残るはお前一人だけお嬢ちゃんよお」  
あたしは刀を強く握った。

……薔薇の香。

「それはどうかな？」

「お姉ちゃん！」

あたしは歓喜の声をあげた。

ガラスが割れるように、世界が音を立てて崩れた。

新たに現れたのは小さな展望台。

白い仮面があたしを見据えた。

「すまない、メアの結界が邪魔をして助けに来られなかった」

「あたしはだいじょぶ。それよりみんなが……」

「心配ない気絶しているだけだ」

薔薇の鞭を構えるファントム・ローズ。

対抗してファントム・メタルが両手に嵌めたツメを鳴らした。

「二人とも同時に掛かって来いよ。カスが何人束になって来ようが  
オレ様はかまわねえぜ、ケケツ」

今度こそ、あたしはこいつと決着を付ける。

「神速斬り！」

神風のようにあたしは翔け、一気に斬り込んだ。

衝撃波と一緒に繰り出して一撃がツメで止められた。あたしの刀  
は一振り、ケド相手は二本のツメを持っていた。

あたしの腹を抉ろうとするツメ。

薔薇の鞭が宙を翔けた。

ツメはあたしの腹を抉る寸前、鞭によって巻き絡められていた。  
ファントム・メタルは刀ごとあたしを押し飛ばした。

「てめえら、そんなヒョロイ攻撃しかできねえのかよ！」

挑発だ。なんてムカツク奴なの。絶対に負けられない。

「それでも喰らえ！」

あたしは叫びながら渾身の一撃を振り下ろした。

再びツメで受け止めようとするファントム・メタル。ケド、あた

しの一撃はツメを砕いて、こいつの手首を落とすとした。

「ぎゃあああああ……なんてな」

白い仮面が下卑た嗤いを浮かべたような気がした。

手首の切断面からコードのような物が伸びて、それはまるで筋肉組織を形成するように手の形になった。そして、コードの表面はメタルコーティングされ、新しいツメが手の甲から生えてきた。

ファントム・ローズが声をあげる。

「ナギサ、奴の弱手は仮面だ！」

それ早く言つてよ。お姉ちゃんの忘れん坊！

ファントム・メタルの手に絡めていた鞭をファントム・ローズが引く。スゴイ力で引かれたファントム・メタルの身体が浮いた。その鎖の付いた鉄球を投げる要領で投げられた。

勢いよくファントム・メタルがガラスの壁に叩きつけられ、強度の強いガラスが砕け飛んだ。

展望台に強風が吹き込む。

窓の放り出されたと思つたファントム・メタルは、淵に手を掛けて辛うじて耐えていた。

あたしはファントム・メタルの手を踏みつけてやとうと足を上げた。ケド、ヤツは自ら手を放して下に落ちてしまった。

すぐに身を大きく乗り出して下を覗くと、一〇〇メートルくらい下の展望台の屋根に乗っていた。

微かに奴の笑い声が聴こえる。

ファントム・ローズがあたしを胸の前で抱きかかえた。

「行くぞ」

「えっ？」

ドコになんて聞く前に、ファントム・ローズは窓から飛び降りていた。

強い風に煽られながらも無事に着地して、衝撃はあたしの身体にまで伝わった。

スゴク強い風。足場も悪いし、一瞬でも気が抜けない。

なぜか突然、頭がキーンとして立ち眩みがした。

ファントム・メタルが上を指差した。

「あれを見る」

あたしは言われるままに上を見た。

特に変わったところは見当たらない。ケド、感じる。この頭がキーンとする感じ、タワーの上のほうから発せられてる。

あたしは鋭い眼つきでファントム・メタルを睨んだ。

「あれがなんなの？」

「ファントム・メアどもはこのタワーを使って、強い思念をこの世界にばら撒くつもりだったらしい。けどな、オレ様はいいつらが気付かねえように、コッソリと細工をしてやったんだ」

薔薇の香が鼻を衝いた。

「小細工とはなんだ早く言え」

低く厳しいファントム・ローズの声音。

「ケケケツ、この世界を破滅させる小細工だ」

「そんなことどうやって、早く止めて！」

あたしは心の底から叫んだ。

ケド、あたしの望みは聞き入れなかった。

「生憎オレ様は人の言うことを聴くのが嫌いでな」

わかつてる答えだった。でも、腹が立つ。

落ちて着けナギサ。だいじょぶ、もっと冷静になってこいつから話を聞きださなきゃ。

「いったいどうやって世界を壊す気なの、そんなことできるハズない」

「できるはずがないだと？」

よし、挑発に乗ってきた。

「あなた一人で世界を壊すなんてできるハズない」

「いいだろう、教えてやるう。世界の中心にあるこのタワーは電波を飛ばすだけの代物じゃねえ、呼ぶこともできるんだ。そう、強大な力だ、世界を破壊するほどの力をな、このタワーに叩き落とす。わ

かるだろう、タワーに暗黒が渦巻いてるのがよ」

いつの間にかタワーの上には、雷雲のような暗黒が渦巻いていた。この場所に力が集まるってことは、タワーを壊せばいいの？

それはムリ。

何か制御装置のようなものがあるはず。それを操作するか、壊せば……。

ファントム・ローズがファンム・メタルを置いて、この場所から駆け出そうとした。

けれど、そんな簡単にはいかなかった。

「おっと、どこに行くんだ？」

ファントム・メタルのツメがファントム・ローズに襲い掛かった。ツメを躲したファントム・ローズが言う。

「制御装置は上だな？」

「なんでわかった!？」

驚きの声をあげたファントム・メタルにファントム・ローズは静かに、

「今のは鎌を掛けさせてもらった」

「ナニい！」

激怒したファントム・メタルの猛攻がはじまる。

鋭いツメが次々と連打され、ファントム・ローズのローブを切り裂いていく。

今のうちにあたしが！

「行かせねえぜ嬢ちゃんよ！」

ファントム・メタルの手からステッカーが投げられ、あたしの背中爆発を起こした。

爆発の衝撃で屋根の上から落ちそうになったあたしに、ファントム・ローズの鞭が伸びる。

「掴まれ！」

あたしは鞭を掴んだ。

ケド、ファントム・ローズはあたしを助けたせいで、背中をツメ

で挟られてしまった。

ファントム・ローズの背中から薔薇の花びらが噴出した。再び止めと言わないばかりに、鋭いツメがファントム・ローズに襲い掛かるうとしていた。

しかし、そのとき！

遙か上空で大爆発が起きた。

上の展望台が木っ端微塵に吹き飛び、タワーの先端部が地面に向かって落下して行った。

「クソオオオオオッ！！」

怒りを露にしてファントム・メタルが怒号をあげた。

少女の笑い声が聴こえた。

「あはは、残念でしたおバカさん」

いつの間にかこの屋根にナイが立っていた。

「大狼君がアンタの計画に勘付いて、ドーンとやっちゃってくれました」。というわけで、アンタの計画は水の泡、はい、ご苦労さん。無邪気にナイは笑った。

「畜生、畜生、畜生！」

モヒカンヘアを掻き毟りファントム・メタルが取り乱した。

その隙を衝いてファントム・ローズがあたしを持ち上げた。

「仮面に止めを刺せ！」

勢いよく上に飛ばされたあたしはそのまま刀を構え、切っ先をファントム・メタルの仮面に向けた。

「あんななんか大ッ嫌い！」

切っ先が仮面に触れた瞬間、粉々に砕け散って爆発した。

力なく背中から倒れるファントム・メタル。動かなくなったその顔には、真っ黒な穴が口を開けていた。

ナイがあたしに笑いかけた。

「はい、めでたしめでたし」

辺りに強い薔薇の香が立ち込め、あたしの意識は遙か遠く遠くに遠退いた。

## サイバーファントム「Link7ワールド」

目覚めるんだ。

私は誰かに呼ばれたような気がして、永い眠りから目を覚ました。辺りを見回して、ここが病院だということが知れた。

誰かが用意してくれたのか、年号と日付が表示される時計が置いてあった。

そうか……。

私はIT関係の仕事していた。多くの大金も掴み、それなりに幸せだったのだろう。

記憶と時計の年号を照らし合わせると、大よそ七年前にその事故は起きた。

その事故が起きた日は酷い土砂降りだった。私はいつものように会社に出勤しようと、愛車のバイクに乗って走っていたところを、大型トラックに跳ね飛ばされたのだ。

どうやら私は死に損なっただけ。手も足も、全て作りモノのようだ。

「……薔薇の香？」

咳いた男の口元は微笑んでいた。

どちらが幸せだったのだろうか？

私は病院関係者が来る前に、ここから逃げ出すことにした。

どうやら天は私に大いなる力を授けたらしい。

私は内から込み上げる力を感じた。

あの世界での法則を私の身体は受け継いだままなのだ。

鼻を衝く薔薇の香であたしは目を覚ました。

「あたし……」

付けっぱなしのノートパソコンが腕の前にあった。

「そうか、全部終わったんだ」

ものスゴイ喪失感。

胸が苦しい。

あたしは大切なものを失ってしまった。

リヨウはどうなったの？

本当に一緒に滅びてしまったの？

信じられないし、信じたくない、誰かウソだって言って！

だって、悲しすぎる。

ファントム・メアに取り込まれたとき、あたしは逢えたのリヨウに……。

楔に繋がれ磔にされたリヨウ。暗闇の中で、弱かったケド輝いていた。あれが本物のリヨウなの。

だいじょぶ、いつか必ず救うから待ってて……リヨウ。

今回は恥ずべき失態だったと言わざるを得ない。

ローズにやられるならまだしも、新米のメタルに不意を衝かれるなんて……。

まだまだボクは活躍し足りないよ。

しかし、真のファントム何度でも蘇る。

嗚呼、意識が遠退いていく。

暗黒の眠りの中で、ボクは待つとするよ……。

次の覚醒めをね……。

それでは、ごきげんよう……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0254e/>

---

夢幻の世界ファントム

2010年10月8日14時32分発行